〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十九枚）」の記載あり〕

目録

江戸市街出火
江戸市街再ヒ出火
大坂市中出火
京都市街出火
大坂市中再ヒ出火
伝奏衆へ所司代脇坂淡路守ヨリ達書
内海御台場御普請并大筒鋳立車台其外製造之御用相勤候ニ付拝領物
大筒鋳立車台其外製造之御用相勤ニ付拝領物
海岸手当向伊勢守達書回達
米国人日本海測量請願
十月二日夜亥之刻江戸大地震
〔脱カ〕〔江戸大地震ノ事実〕
質素節倹令

二一四　江戸市街出火

二月廿四日夜子中刻、京橋西川岸通リ納屋ヨリ出火、折節東南風ニテ、北紺屋町・西白魚屋敷畳町・五郎兵衛町・稲荷新道・かのふ新道・加賀町一丁目二丁目・南傳馬町三丁目西側計、廿五日暁寅刻鎮火、

右・・・二月三十日報知、

二月廿九日夜子刻、淺草東橋際ヨリ出火、風少々、材木町并木中屋敷裏迄一丁程焼失、寅刻鎮火、

右・・・三月十五日報知、

二一五　江戸市街再ヒ出火

三月朔日夜丑上刻、小網町一丁目ヨリ出火、西北風強テリフリ町・葭町・吹屋町・堺丁・新材木町・泉町・

小船町・大坂町・難波町片側・堀江町・堀留一二丁目村松町・米澤町二丁目・橘町一丁目弐丁目三丁目・横山町・馬喰町一丁目片側二丁目三丁目・浅草茅町片側河岸不残焼失、柳橋辺迄天王前ニテ火留ル、浅草見付焼失、通油町角少々焼失、人形町・長谷川町・乗物町、二日午刻鎮火、郡代屋敷残ル、

右三月六日報知、

二一六　大坂市中出火

四月十日暁卯刻、阿波町丹波屋平兵衛借家、三木屋吉兵衛表ニ有之、梁間四間半桁行四間之大工職仕事場ヨリ出火、右不残焼失ヨリ町内ニテ家数拾壱軒、竈数七拾五軒、明借家五軒焼失、同辰下刻火鎮、従御城酉ノ方ニ当リ、道法弐十町程在之候、

右・・卯四月十一日調書保志ヨリ廻ル、

二一七　京都市街出火

四月十日暁丑之上刻、三條通河原町西へ入、町南側合羽屋・・・ヨリ出火、風ハ無之候得共、東西へ広ガリ両側一丁半、河原町上ル町弐十軒計、下ル町西角切、寺町矢田寺本堂焼失玄関庫裏残ル、誓願寺中二ケ寺焼失、都合八十軒、

二一八　大坂市中再ヒ出火

五月七日寅之下刻、南本町弐丁目、布屋文兵衛支配借家、布屋安五郎梁間三間半桁行七間半ノ居宅二階ヨリ出火、右居宅不残、町内ニテ家数三軒、竈数拾六軒、明借家二軒、同所三丁目ニテ竈数壱軒、唐物町弐丁目ニテ家数三軒、竈数四軒類焼、同卯下刻火鎮リ、東西広キ所廿壱間弐尺、南北同弐拾間　御城ヨリ申酉之方ニ当リ、道法拾三丁程在之候、

右・五月八日調書保志ヨリ、

二一九　伝奏衆へ所司代脇坂淡路守ヨリ達書

二一九の一

異船近海へ渡来之節、七口之内、右渡来之最寄要所ノ方御土居内へ、井伊掃部頭（直弼、彦根藩主）一番手人数並酒井（忠義、小浜藩主）修理大夫・松平（柳沢保申、郡山藩主）時之助（当番年ニハ、同様人数差出、相固候様相達候、

一右之節、

御所九門へ、掃部頭二番手人数之内並修理大夫・時之

助当番年ニハ、同様人数ノ内差出相守、残人数ハ先ツ屋敷ニ扣居、時宜次第可差出候、

一修理大夫・時之助非番年ニモ、相応人数差出置候儀ニ付、右之節、最寄要所ノ方御土居内へ人数可差出候、

一右同断之節、青山下野守（忠良、篠山藩主）・稲葉長門守（正邦、淀藩主）・本多隠岐守（康融、膳所藩主）・永井遠江守（直輝、高槻藩主）、夫々人数差登候ニ付、七口之固場所、別紙之通相固候様相達候、

〔右之通夫々へ相達置候間、得其意、伝奏衆へ可被達置候、
四月（二十二日）
右之趣、従脇坂淡路守殿申越候ニ付、此段相達候、〕

二一九の二
覚

伏見街道
稲葉長門守人数屯所、稲荷社地并社家之内、
固所、同所辺、

竹田街道
右同断
竹田村安樂壽院塔頭之内、
固所、竹田村辺、

鷹ケ峯口
青山下野守人数屯所、同所常照寺、
固所、鷹ケ峯村辺、

下加茂口
右同断、
松ケ崎本涌寺・妙泉寺、
固所、山端村辺並御菩薩池辺、

粟田口
本多隠岐守人数屯所、南禅寺境内并塔頭之内、
固所、三條通蹴上辺、

北白川口
右同断、
智恩寺境内並塔頭之内、
固所、白川道吉田山辺、

朱雀口
永井遠江守人数屯所、同所權現寺并東寺境内塔頭ノ内、
固所、朱雀村並東寺四ツ塚辺、

卯四月

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて補訂〕

二二〇　内海御台場御普請並大筒鋳立車台其外製造之御用相勤候ニ付拝領物

（脱カ）五月四日

御座間

時服十　阿部伊勢守

同　六　本多越中守

内海御台場御普請并大筒鋳立之御用相勤候ニ付、被下之、

八丈縞十反　遠藤但馬守

同断御用取扱候ニ付、被下之、

右於奥拝領之、

御勘定奉行

黄金拾枚　松平河内守（近直）

時報四ツ

同　川路左衛門尉（聖謨）

小普請奉行次席

御目付　鵜殿民部少輔（長鋭）

時服三ツ宛

箱館奉行

竹内下野守（保徳）

堀織部正（利熙）

御目付

黄金七枚　岩瀬修理（忠震）

時服三ツ宛

御勘定吟味役

岡田利喜次郎（忠養）

右於芙蓉之間伊賀守申渡之、

内海御台場御普請御用相勤ニ付拝領物

御勘定組頭

黄金三枚　後藤市兵衛

時服三ツ

黄金壱枚　同　組頭

中村爲彌

黄金壱枚　同　格

時服二ツ

宮田簡太郎（曾カ）

御細工頭格

御徒目付　組頭

田中甚左衛門（勘カ）

黄金壱枚

御勘定

小島磯之丞

露木岳助（兵カ）

同弐枚　同

時服弐ツ　宛

白銀二十枚　鈴木大之進
同　齋藤六藏
黄金弐枚時服弐ツ
同　日下部官之丞
白銀七枚
同格御徒目付
同　拾枚　永持亨次郎
御勘定吟味方改役並
同　五枚　山口小一郎
同　野口鎌五郎
白銀拾枚
支配勘定
同　七枚　長坂半八郎（庄カ）
右於御右筆部屋椽頰、伊賀守申渡之、
御徒目付
小判金二十両（銀二十枚ヲ）　永井脇三（太カ）
同　十両（十枚ヲ）　森文太郎
同　二十両（三十枚ヲ）　榊原榮五郎

右於燒火間、越中守申渡之、
内海御台場御普請ニ付、御入用金諸払（請カ）
其外御用相勤ニ付拝領物
御代官
黄金壱枚　齋藤嘉兵衛
右於御右筆部屋椽頰、伊賀守申渡之、
内海御台場御普請ニ付、御材木伐出方
御用相勤ニ付拝領物
御目見持格支配勘定
小判弐十枚　前原八十郎
右於躑躅之間、伊賀守申渡之、
大筒鋳立車台其外製造之御用手伝相勤ニ付
拝領物
御小姓組戸川伊豆守組
小兵衛養子
白銀三十枚時服二ツ　榊原鏡次郎
右於同席（躑躅間）、伊賀守申渡之、
松平大和守家来

白銀二十枚 時服二ツ 宛　岩倉鐵三郎〔太カ〕　白銀拾五枚　箱館奉行支配組頭

阿部伊勢守家来　前田藤九郎　黄金壱枚　河津三郎太郎

鳥居丹波守家来　友平榮　御徒目付組頭　御細工頭格

本多越中守家来　星野覺之丞〔覺兵衛カ〕　御勘定　田中勘左衛門

右於檜之間、伊賀守申渡之、

卯五月　〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて補訂〕　黄金弐枚 時服弐ツ 宛　小島磯之丞

鈴木大之進

志賀六左衛門

三二　大筒鋳立車台其外製造之御用相勤ニ付拝領物

黄金三枚 時服二　御勘定組頭　後藤市兵衛　白銀十枚　同　大竹伊兵衛

同二枚 同二　同　中村爲彌　同十五枚　同　横田新之丞

同壱枚 弐　同　高橋平作　同二十枚　同格 御徒目付　永持亨次郎

同十五枚〔脱カ〕　同　平山鎌太郎〔五カ〕

同弐枚 同弐ツ　同格　宮田菅太郎　金二十両　御勘定吟味方改役並　山口小一郎

同十五両　野口鎌五郎

支配勘定　石川忠之助

〔銀カ〕同　五枚

右於御右筆部屋椽頬、伊賀守申渡之、

御徒目付　稲垣藤一郎

小判金弐十両宛　岩瀬繁三郎

小澤傳之丞

右於焼火間、越中守申渡之、

御代官　御鉄鉋方兼帯　江川保之丞

黄金七枚　時服弐

内海新規御台場之儀ハ、不容易大業之処、「ニ候処」天郎左衞門江縄張ヨリ御用被　仰付、且大筒鋳立并車台其外附属ノ品等製造之儀ヲモ、御実備専務ニ深ク研究イタシ、格別入精相勤、今度御成功ニ相成候段、莫大之骨折ト被　思召候、其方儀モ、引続キ右御用相勤ニ付、旁其方へ出格之拝領物被下之、

右於御右筆部屋椽頬、伊勢守申渡之、

卯五月

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

二三二　海岸手当向伊勢守達書廻達

二三二の一

口演之覚

一昨十三日達ニ付、伊勢守殿宅へ相越候処、別紙書面被相渡、猶又口達ニテ被申聞候ハ、右ハ先達約定ニ相成、応接之向江尋之趣モ有之、此節表向見置候様トノ事ニ候間、同席一同へ申通候様、右之通約定ニハ相成候事ナカラ、種々難題申立反復難計夷人共ニテ、不容易御時節、如何様ノ儀到来モ難計候間、其心得ヲ以手当向行届候様可致、治ニ乱ヲ不忘ハ政治第一之事ニ候間、能々致通達候様、且亦同席中名差ニテハ難申候得共、格別手当無之向モ有之、又ハ名目而已ニテ実備無之家々モ有之候様相聞候間、以後ハ急度手当行届候様有之度、若此上等閑之家々有之候ハ、及御沙汰候儀モ可有之候間、国持・庶流迄モ無残処申通候様、猶測量等之儀、今日大和守、松平殿宅ニテ御達申候儀モ御座候間、虚飾無之様精々相達候様ニトノ事、左候テ御請之儀ハ、御披見之上以使者伊勢守殿江御請被仰達候様、御賢息方江モ、御通達有之候様ニトノ事、

右相済大和守殿へ相越候処、別紙被相渡、五月過参候

トノ事故、最早近々可参、何レ御断ニ相成可申候、勿論此方ヨリ事ヲ好ミ候儀ハ無之候得共、応接之次第ニ依テハ、何時戦争ニ相成候モ難計事故、其心得ヲ以手当行届候様トノ御趣意ニ候間、不洩様相達候様トノ事、御請使者其外伊勢守殿之通ニ候事、

八月十五日　松平薩摩守

南部美濃守様〔利剛、盛岡藩主〕
松平大和守様〔直矩、川越藩主〕
松平右近将監様〔武聰、浜田藩主〕

二二二の二　伊勢守殿ヨリ御渡之御書付

魯西亜・英吉利・亜墨利加等ヘ、別冊之通条約為御取替ニ相成候得共、追々諸夷入港之上ハ、以後之御実備弥以肝要之儀ニ付、銘々右之心得ヲ以、尚又平常覚悟モ可有之事ニ候、因テ為心得条約写相達候事、

二二三　米国人日本海測量請願

〔久世広周、老中〕大和守殿〔八月十三日〕ヨリ御渡之御書付

阿蘭陀之儀ハ勿論、魯西亜・亜墨利加二国ハ、長崎・下田・箱館、三港江渡来御差免、英吉利ハ、長崎・箱館二港江渡来御差免相成候処、亜米利加国之儀、近年清国ト交易盛ニ相成、御国之海上繁々致通航候、付テハ、暗礁等心得不申候付〔行カ〕テハ、人命ニ拘リ候間、浦々致測量度旨、当三月中、下田江渡来之亜墨利加船ヨリ願〔脱カ〕〔出、追テ挨拶承候タメ渡来可致旨申立〕出帆イタシ候、右測量之儀、容易ニ御差免シ難相成候ニ付、追テ渡来ノ節、下田ニ於テ精々申論、厳敷御断相成、若又如何様申論候テモ、承伏不致節ハ、追テ此方ヨリ、応接ノ者、彼国ヘ被差向、政府ヘ可及懸合ト迄モ為申談候筈ニ候、併国風制度相違之上、論談徹底難致夷情ニ候得ハ、下田ニテ応接之模様ニ寄、内海迄モ乗入候欤、如何様之次第ニ可相成モ難計、尤是迄モ都テ穏便之御取扱ニ相成居候儀ニ付、今般トテモ此方ニテハ、穏ニ相断候積ニ候得共、自然之儀出来候モ難計候間、銘々兼テ其心得ニ可被罷在候、依之亜墨利加船ヨリ差出候測量之儀申立候書面和解、為心得相達候事、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

二二四　十月二日夜亥之刻江戸大地震

江戸大地震ニテ、潰家及出火場所付、為見分御案内方御歩行被差出候書付

一虎之御門内ヨリ
〔本荘宗秀、宮津藩主〕松平伯耆守様御上屋敷外御囲、練塀大抵クズレ、〔黒田斉溥、福岡藩主〕松平美濃守様表御長屋一ケ所崩ル、

一外櫻田
〔鍋島斉正、佐賀藩主〕松平肥前守様御上屋敷、日比谷御門之方少シノコル、御殿向其外御長家共不残焼ル、外櫻田御門ヨリ日比谷御門迄、御囲土手数ケ所崩、

一西御丸大手脇御櫓クズレ、其外御囲向土塀石垣半藏御門外迄数ケ所崩、坂下御門ニ渡ル御櫓其外トモ大損シ、

一西御丸下
〔道貫、高富藩主〕本庄安藝守様御役屋敷、表御長屋半分程、内長屋少々クズレ、
〔忠雅、長岡藩主〕牧野備前守様御役屋敷、表御長屋前横クズレ、御殿半分程崩、表御門ハ残、
〔忠惠、小幡藩主〕松平玄蕃頭様御役屋敷、御殿向御玄関之方、其外表御長屋クズレ、表御門残ル、
〔忠優、上田藩主〕松平伊賀守様御役屋敷大損シ、表御門残ル、
〔信親、村上藩主〕内藤紀伊守様御役屋敷、御殿御長屋共不残崩、少々焼ル、
〔忠毗、敦賀藩主〕酒井右京亮様御役屋敷、御殿其外共崩、表御長屋御門残ル、
〔忠徳、泉藩主〕本多越中守様御役屋敷、御殿不残崩、表御長屋少々残、西丸下御厩半分程崩、

一幸橋内ヨリ山下御門内
〔茲監、津和野藩主〕亀井隱岐守様内長屋少々焼ル、
〔祐相、飯肥藩主〕伊東修理大夫様御殿向御長屋共不残丸焼、
〔柳沢保申、郡山藩主〕松平時之助様同断、
〔氏燕、狭山藩主〕北條美濃守様少々焼ル、
〔利剛、盛岡藩主〕南部美濃守様不残丸焼、
〔島津斉彬、薩摩藩主〕松平薩摩守様御中屋敷、櫻田邸御殿半分程崩、表御長屋壱ト棟焼、
〔氏郁、吹上藩主〕有馬備後守様不残焼ル、
〔氏中、三草藩主〕丹羽長門守様御玄関之方御長屋クズレ、
〔正耆、白河藩主〕阿部播磨守様御屋敷不残崩、

（忠国、忍藩主）松平下總守様御上屋敷不残焼落ル、
（容保、会津藩主）松平肥後守様御殿御長屋不残崩焼落ル、表長屋少々残ル、
同櫻田御門渡御櫓外御多門不残崩、其外御囲土塀大損シ、同下場腰掛焼落ル、
一馬場先御門大損シ、
一日比谷御門内ヨリ大名小路辺、
（山内豊信、高知藩主）松平土佐守様御中屋敷不残崩レ、
（鍋須賀斉裕、徳島藩主）松平阿波守様御中屋敷半分程崩、
（貞直、笠間藩主）牧野備後守様御殿向クズレ、
（忠精、島原藩主）松平主殿頭様御玄関其外トモ崩、
（忠民、岡崎藩主）本多中務大輔様不残焼落ル、
（利則、古河藩主）土井大炊頭様御殿向御長屋半分程、
（大河内輝聰、高崎藩主）松平右京亮様半分程クズレ、
（池田慶徳、鳥取藩主）松平相摸守様御殿大体崩、表長屋一ト棟焼、裏手御長屋クズレ、表御門残ル、
（胤統、三上藩主）遠藤但馬守様御役屋敷不残焼落ル、
（長守、勝山藩主）小笠原左衛門佐様表長屋半分崩焼、
（大給乗命、岩村藩主）松平誠之助様表長屋一棟崩レ、其外残ル、
八代洲河岸定火消御役屋敷崩、
松平相摸守様御中屋敷不残崩、
（燈、儒林）林大學頭様大抵焼、
（正修、長島藩主）増山河内守様御上屋敷不残崩、北ハ残ル、
（池田慶政、岡山藩主）松平内藏頭様御上屋敷、表御長屋前通リ並裏手之方クズレ、
（慶倫、津山藩主）松平三河守様御上屋敷御囲向大テイ不残崩、
（広周、関宿藩主）久世大和守様御役屋敷表御長屋クズレ、其外方大焼ケ、
（正弘、福山藩主）阿部伊勢守様御役屋敷表御長屋焼、其外損シ、伝奏御屋敷少々崩、
一辰之口辺ヨリ神田橋内辺迄、
（俊民、生実藩主）森川出羽守様御役屋敷不残焼、
一和田倉御門大損シ、
御作事定小屋大テイ崩、
御畳蔵不残クズレ、
（忠徹、小倉藩主）小笠原左京大夫様御上屋敷御殿向半分程崩、其外大損シ、
（忠頤、姫路藩主）酒井雅樂頭様御上屋敷不残焼、
同御向屋敷不残焼、
一大手御門大損シ、内櫻田御門迄御囲大抵大損シ、石垣クズレ、

一常盤橋御門大損シ、
松平越前守（慶永、福井藩主）様御上屋敷表御長屋、其外共大損シ、同中
御屋敷表御門崩、其外共大損シ、
酒井左衛門尉（忠発、庄内藩主）様御上屋敷大損シ、
一ツ橋様（徳川慶喜）表通リ御長屋其外共、所々崩レ大損シ、
一竹橋御門大損シ、同所九十御（ママ）多門不残クズレ、
大手ヨリ竹橋迄ノ間、雉子橋御門・清水御門大損シ、
其外大手処々崩、
一雉子橋御門外ヨリ小川町辺迄、
小出信濃守（吳教、園部藩主）様御上屋シキ不残損シ、其外御旗本衆五六
軒程焼ル、
一一ツ橋通小川町所々大損シ、此辺地震強シ、
榊原式部大輔（政恒、高田藩主）様御屋敷大損シ、所々崩、
本多豐前守（正寛、田中藩主）様御上屋敷大損シ、焼、
板倉伊豫守（勝明、安中藩主）様大損シ、
本多伊豫守（忠都、神戸藩主）様御上屋敷大損シ、其外御旗本衆四五軒焼
ル、
戸田大炊頭（忠文、足利藩主）様御上屋敷半焼、
稲葉長門守（正邦、淀藩主）様・土屋采女正（寅直、土浦藩主）様御上屋敷、何ケ所トモナ
ク大損シ、
内藤駿河守（頼寧、高遠藩主）様不残焼、
堀田備中守（正篤、佐倉藩主）様御上屋敷不残焼、
一表猿樂町ヨリ一ツ橋外迄、十町程之間、御旗本衆二十
軒程焼ル、
伊東播摩守（長裕、岡田藩主）様御殿向クズレ、
一飯田町辺ヨリ小川町駿河台辺迄ノ間、地震強ク、
一小石川辺ヨリ本郷湯島辺、随分強シ、
水戸様（徳川慶篤）表通リ御囲所々大損シ、通リ土塀不残崩レ、御
屋敷内所々崩、損シ所多シ、
牛天神下町家辺ヨリ出火ニテ少々焼ル、
松平丹後守（滝脇信進、小島藩主）様御屋敷御殿向不残崩、
小笠原信濃守（貞幹、安志藩主）様御殿向、其外不残崩、表長屋少々残ル、
加州様（前田斉泰、金沢藩主）表通リ土塀不残崩、
筋違橋内ヨリ駿台辺大損シ、
一神田明神下ヨリ下谷御成小路辺、随分地震強シ、
堀丹波守（直央、村松藩主）様御上屋敷御殿向不残崩、表御門残ル、
黒田豐前守（直静、久留里藩主）様不残焼、少々御殿向残ル、
石川主殿頭（総禄、亀山藩主）様不残崩、少々焼、
小笠原左京大夫様御中屋敷表長屋、半分程崩、其外損
シ処多シ、

一上野広小路左側不残焼、
上野御山
中堂御本坊無別条、其外所々石垣抔少々宛損シ、下寺門抔少々損シ、
一吉原町不残焼落、
一下谷阿部川町弐丁程焼、
一下谷辺大損シ、大クズレ随分強シ、
一東本願寺下谷下寺大損シ、本堂ハ無事、和泉橋通リ、柳橋通リ大損シ、
一浅草観音所々大損シ、本堂横ニ成ル、
浅草黒船丁ヨリ出火、八幡町辺迄十丁程焼、
一本所深川地震強シ、
一出火場所三十六ケ所程ノヨシ、
一橋々ハ何レモ不落、
一麻布・青山・四ツ谷・市ケ谷・小石川・駒込辺ハ、地震ヨハシ、

二二五　江戸大地震ノ事実

当二日夜亥之刻、江戸大地震ニテ潰家出火有之、大変ニ付、拙子モ彼是致居、今七日頃ハ漸ク静ル体ナレハ、識人ヲ訪旁通行之序ニ見ル所丈ケヲ記ス、先市兵衛町辺、江戸見坂辺、御屋敷方外御囲ヒ、錬塀（練）ハ皆崩ル、板塀ハ痛軽シ、土蔵大ニ痛ム、此辺震ヒ方少々軽ト見ヘテ潰家少ク、諸家方何レヲ見テモ、錬塀皆崩ル、土蔵大痛ナリ、霞ケ關黒田様表御門ノ北長屋三十間程潰ル、此辺ヨリ地震強クナル、西　御丸下潰家多シ、両・・・・・・・・・・御丸土塀崩ル、桔梗御門崩ル、和田倉御門内會津様二タ御屋敷ヨリ、忍様・本多様焼ル、桔梗下馬ノ腰掛焼ル、和田倉御門番所焼ル、辰ノ口姫路様二タ御屋敷ト、大岡様焼ル、神田橋御門内両側潰家・ユガミ等ニテ大破也、同御門外三島町ヨリ、筋違御門辺迄、家居ユカミ大破、小川町ヨリノ西ノ方、飯田町・小石川・本郷辺ハ一見セス、是亦随分強キ由、焼タル所モ有ヨシ、桃町（統カ）・四ツ谷辺ヨリ西方ノ方一見セズ、少々ハ軽キ方ナルベシ、神田明神下ヨリ、湯島天神下並御成街道筋、上野広小路辺迄潰家夥シ、広小路東手ヨリ南ヘ大ニ焼ル、上野御山内崩レ処少シ、同下寺ハ崩処多シ、廣徳寺前ヨリ御門跡前浅草ヘ掛テ、東西南北潰家トユガミ多シ、浅草寺観音堂仁王門潰レズ、塔ノ九輪乾江曲ル、吉原丸焼ノ由、馬道猿若町ヨ

リ花川戸ヘ掛テ焼ル、駒形ヨリ御蔵近ク迄、幅壱丁程長三四丁程焼、浅草御門内ヨリ日本橋辺、中橋辺迄、家居ユガミ大破、南傳馬弐丁目ヨリ京橋迄三四丁四方程焼ル、尾張町ヨリ芝口辺、幸橋御門外辺迄少々軽シ、久保町大破、愛宕下辺ヨリ溜池山之手之方大破ハ無シ、桐畑ヨリ赤坂河岸通リ中通リ大破、同傳馬町ヨリ青山、久保町辺少々軽シ、百人町ヨリ澁谷ヘ掛テ弥軽シ、芝御山内ヨリ神明社辺少破ニシテ、神明前神明町・宇田川町・柴井町之辺ハ潰家多シ、柴井町焼ル、赤羽根辺ヨリ麻布十番、古川辺大破、夫ヨリ山ノ手ヘ掛テハ大破ナシ、芝三田、同金杉辺ヨリ高輪・牛町辺迄少々軽シ、高輪中程ヨリ品川ヘ掛テ強シ、伊皿子弐本榎辺ヨリ西ノ方、山ノ手少シ軽シ、右之外聞及タルニ、本庄・深川辺強シ、三十三間堂潰タル由、永代橋辺ヨリ仲町ヘ掛テ焼ル、丸之内・日比谷両門外ヨリ、幸橋御門内迄、諸大名衆焼ル、日比谷御門内大名小路辺ニテ、御大名衆三四軒焼ル、佃島焼ル、品川沖二ノ御台場焼候由、右之通之大変、筆ニテ述足ラズ、二日夜ノ大地震ヨリ、日夜度々少々ヅヽ震、七日霄（宵）ニ又余程震フ、後猶止ザルベク思ハレ、二日夜ヨリ、屋敷々々町々野陣ヲ構置、今ニ毎夜女・童・老人達ハ夫ニ寝ル、此度ノ地震ハ、江戸カ一番強ク、爰ヲ本トシテ拾里四方程強キ風聞也、考ニ両・・・・・・・・・御丸下ヨリ西ノ方、本庄・深川辺江掛テ強ク、西ノ方山ノ手ハ少ク軽キカ、然レハ江戸内強弱半々ナリ、併シ右様強弱ハ論スルト雖ドモ、大概ハ同様ノ地震也、山ノ手迚モ錬塀崩レ、土蔵崩レ、家ノユガミ潰レ彼是有ル程ナレハ、安住スルモノナク、何レモ毎夜野陣ニ臥也、丸ノ内ヨリ下町辺地震強ク、焼タル場所モ有ルカ故ニ、死人ノ夥事明暦度大火ノ刻、去所（死者カ）拾万八千人ニ劣ラサル風聞也、何レモ仮葬トシテ屋敷方ハ役人ノ送書、町々ハ夫々ノ掛リヨリ、或ハ車ニ積、或ハ桶ニ入、或ハ駕籠ニ乗セシテ寺々ヘ持込ム、寺々モ大ニ当惑スルヨシニ承ル、或ハ活ナカラ衣食住ニ窮スルモノ多シ、為ニ御救小屋ヲ、幸橋御門外・深川海辺新田・浅草雷門前、此三ケ所ヘ御構ヒ被下置、何レモ幅四間程、長サ五六拾間程ノ御小屋ナリ、かゝる天変世ニ無キニシモ非レハ、敢テ怨ムベカラス、

二三六　質素節倹令

二二六の一 別紙御書付、（安宅、京都所司代）脇坂淡路守殿被成御達候ニ付、写三通相達候、以上、

十月二十六日　（豊常、京都町奉行）岡部備後守　（長祚、京都町奉行）浅野中務少輔

京都

御地役十五人宛

二二六の二 遠国奉行且遠国御用等被　仰付候面々、旅装之儀、以来伊達道具為持候ニ不及、旗並竿・幕・矢玉等行列ニ不差加、荷造ニイタシ持越可申候、持弓之儀ハ勝手次第為持可申候、

一鉄砲筒数之儀、是迄之振合ニ不拘持越不苦候間、相増候節ハ可相伺候、

一雨天之節相用候長柄傘之外、台笠・立笠等為持候儀相止可申候、挟箱之儀為持不申候テ不苦候、

一万石以下之面々家来共、長棒駕籠並徒召連候儀可為無用候、

但具足櫃為持候トモ壱人持ニ可致候、

一万石以上ノ面々モ右之趣ニ相心得、参勤交代等之節供連行装省略イタシ候儀可為勝手次第、家来共旅装之儀モ右ニ準シ、夫々可有省略候、

右之通向々へ不洩様可被相触候、

卯十月（十九日、老中達）

右之通相触候間、可被得其意候、

二二六の三 火事装束之儀、華美之品相用申間敷候、羽織ハ是迄ノ品相用候テモ不苦、頭巾ハ綴壱枚、紋所二ツ、長サ弐尺程ニ限リ、縫模様等一切無用ニ可致候、且又目立候踏込ノ類相止、イガ袴之内相用可申候、尤股引相用候向ハ、是迄之通可相心得候、

但当分有合之品相用候儀ハ不苦候、

右之通向々へ不洩様可被相触候、

十月（十九日、老中達）

右之通相触候間、可被得其意候、

二二六の四 今度諸事簡易之御制度ニ被為復候御旨モ有之、殊ニ此度地震ニ付テハ諸向一同難渋ニ及ヒ、武備ノ外容易ニ旧復モ難相成候間、銘々衣食住ヲ始諸事格別ニ省略可致候、就テハ

殿中ヲ始着服之儀、当分左之通可相心得候、

一熨斗目ハ正月御規式十五日迄、且
御宮　御霊屋へ　御参詣之節計相用、尤無地ニテモ腰
明キニテモ勝手次第可致着用候、其外ハ都テ服紗小袖
服紗袷可致着用候、
　但是迄熨斗目不相相上ハ勿論長上下モ着用不及候、
一勅使参向等之節ハ是迄之通、其外重キ御祝儀事等ハ格
別之儀ニ付、其時ニ可相達候、
一万石以上以下家督初テ　御目見、其外　御礼之節、着
服之儀ハ是迄之通可相心得候、尤披露并進物持出候役
人等ハ、当日ノ服相用可申候、
一八朔御礼ハ是迄之通、七夕ハ染帷子、重陽ニ万石以上
ニテモ花色ニ不限、常ニ服紗小袖着用不苦候、
　但七夕重陽ハ長上下着用不及、
一殿中麻上下之節モ、木綿紋付之儀ハ服紗同様相心得着
用可致候、肩衣袴之儀時節ニ不拘、麻木綿並単ヲ用候
儀可為勝手次第候、此外麁末之品相用候儀、銘々心得
次第タルベク候、勿論家来又者等弥以麁服相用可申候、
惣テ無益之入費相省キ、実用ノ武備相整候様専務ニ可
心掛候、
　右之通被　仰出候間、向々ヘ不洩様可被相触候、

十月（十九日、老中達）

　右之通相触候間可被得其意候、以上、

一六の五
此度地震ニ付、御城内御破損所数ヶ所有之候処、世上
一般材木其外差支モ可有之ト
思召候ニ付、御締場所之外其侭被差置候分被
仰出候間、銘々屋敷於テモ、其心得ヲ以全ク入用之ヶ
所而已、格別手軽ニ普請致候様可被心得候、
　右之通可相触候、尤西丸御目付江モ可有通達候、（十三日の老中達カ）
十月

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年
市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数四十九枚）」の記載あり〕

目録

水戸公齊彬公ニ送ラレシ書
齊彬公島津豐後ヘ賜書
齊彬公春嶽公ヘ御親書
大森村ニ於テ新鋳八十斤砲ヲ試ム
〔脱カ〕〔参考　小松相馬家記抄〕
齊彬公御病気御全快布告
齊彬公春嶽公ヘ御親書
魯艦入浦ノ報
齊彬公春嶽公ヘ御親書
米艦内海小柴沖ヘ乗入タル報
内裏造営地引木作初
水戸前中納言殿銃術問答
齊彬公福井公ニ御親書
下田・箱館両奉行ヘ達書
米艦測量ノ形況
魯艦乗組員書翰
福井侯齊彬公ト営中ニ面晤
和蘭蒸気船運用規則
和蘭国王汽船ヲ献ス及ヒ答礼品目ノ調
松平和泉守並ニ松平伊賀守老中ヲ罷ム
米国人ニ沿海測量ヲ許ス

二三七　水戸公齊彬公ニ送ラレシ書

一昨烏ハ御細答、殊ニ御別紙ノ趣、逐一御尤ニ存候ヘ共、大小名ノ窮迫ヲ御救ヒハ、如何様ノ御仕向ニテ可然哉、金穀ヲ以テ救ヒ候ハ、際限モ無之候間、定テ御制度ノ上ヨリ御救ヒノ貴考ト存候処、其廉々全ク愚老

ノ心得迄ニ委細承知イタシ度、建白イタシ候迚モ成否ハ勿論難計候ヘ共、ヨロシキト存候事ハ、乍不及力ヲ尽シ申度候、号令等剛勢ハ不宜門地高キノミナラス、気胆アル方ナレハ、従テ文旨毎モ強ニ過キタリトソ云々、御尤千万ニ候、是ハ愚老モ元ヨリ右ノ見込ニ有之、文略草々也、

（九月二十三日）
晩秋念三　　水隠士

薩州殿

二二八　齊彬公島津豐後へ賜書〔安政五年正月六日〕

一筆申入候、愈無事珍重存候、然ハ　御昇進之義誠ニ（齊興公御位階御昇進ヲ云フ）以テ恐悦至極之御儀奉存候、

御満悦之御事ト奉存候、右ニ付此方ヨリ所々送リ物之事、此地ニテハ様子モ分兼候間、其許ニテ宜敷可取計候、且先例側役使ニテ御祝義申上候間、此度モ武兵衛（堅山利武）使申付、当月末出立申付候筈ニ御座候、且又此節ハ近衛家・三條家江モ御礼使申付、御城奥（幕府ヲ云）江モ御礼申上候故、余人ニテハ差略モ六ケ敷ト存候間、武兵衛江申付候事ニ御座候、大坂金子之事等モ申付、其他之事モ委細申談可遣ト存候、此段心得迄ニ申入置候、且此節之事ニ付テハ其方始別テ骨折之義、御成就ニ相成安心之事ト存申候、先ハ早々申入候、以上、

正月六日

猶々、先例此ノ節之事ニ掛候面々、色々結構ニ被仰付候儀定テ高輪（齊興公）ヨリ被仰出ト存候、シカシ若不被仰出候ハヽ、委細武兵衛（上）便可申越ト存申候、以上、

用事

豐後江

（齊彬公芳翰・齊彬公書翰影写（東大史料編纂所所蔵）にて校訂）

二二九　齊彬公春嶽公へ御親書〔嘉永六年〕

○この文書は、「鹿児島県史料　齊彬公史料」第一巻の第一四三号文書の嘉永六年正月廿六日付島津齊彬書翰（松平慶永宛）と同文により略す。

二三〇　大森村ニ於テ新鋳八十斤砲ヲ試ム（参考　安田助左衛門日記抄）

安政二年乙卯三月四日

於大森、百五十封度・八十封度打試被仰付差越、翌五日打試首尾能相済、六日越通（土佐ノ中浜万次郎カ製シタル雛形ニ依リテ造リタル船名）日打試首尾能相済、六日越通船ヨリ船打（船打大砲射撃）被仰付、豐後殿（島津豐後）御初番頭其外多人数ニテ候、

一安政二年三月十日

江戸出立、甲州通木曾路通行、惠林寺へ参詣、四月十三日帰着、

一江戸出立ノ節、山川御台場御築替大砲鋳製等ノ儀、御小納戸ヲ以承知仕趣有之、四月廿日、三原藤五郎櫻島へ差越居候ニ付、田原直助同船差越対話、翌廿一日ヨリ同人并ニ相良助大夫常長同道、画師國分八郎召列レ、山川へ差越、廿九日帰府、

一安政二年十月十一日

田原直助同道、山川へ被差越候三原藤五郎・早川務立会、御台場見分、十九日帰府、

二三一　参考　小松相馬家記抄

一安政二年乙卯三月十二日、前ノ濱出帆、琉球国へ同四月十一日着、在勤トシテ川上式部へ交代ス、

編者曰、小松相馬（清猷）ハ帶刀（清廉）カ養父ナリ、御軍役奉行ヲ以テ琉球警吏ノ長タリ、在琉中病死ス、為人沈重温厚識アリ、当時門葉中望アル人ナリキ、

二三二　齊彬公御病気御全快布告

太守様御事、去秋中ヨリ甲寅ノ秋御疝癪気ニテ被遊　御引入候処、被遊　御快気、　公辺御機嫌為御伺、先月二十六日乙卯二月廿六日御用番牧野備前守忠雅様へ、被遊御見舞候段御到来候、依之御祝儀云々、

三月十七日　　石見

嘉永七年甲寅八月中旬頃ヨリ御病床ニ就カセラレ、御重症ニハアラサリシカトモ、多日御快方ニ赴カセラレス、十一月中旬頃ニハ、御疲労増シタリトノ説アルニ依リ、御国中貴賤挙テ憂悶シ、御快気速ナランコトヲ神仏ニ禱レリ、而シテ同二年正月末頃ニハ、御快復之趣拝承シ、衆人安堵ノ思ヲナセリ、

二三三　齊彬公春嶽公へ御親書〔安政元年〕

過日ハ尊書忝奉存候、愈以御清安奉賀寿候、然ハ亜船ノ珍器拝見忝、雛形米国使献品ノ内ナラム写候上、龍土伊達宗城公へ相廻候様ニ可仕候、偖炎上ノ儀、奉絶言語候、天災打続キ何共歎息ノ至奉存候、又々少々痰ノ気ニ有之候テ、今日モ不参御登営ナシ仕候、十五日ハ押テモ登城ノ心得ニ御座候、色々申上度事御座候、是非近日参上万々申上度候、龍土仝上へモ御逢ト奉存候、佐久間佐久間修理気ノ毒千万、長々滞船候テハ、弥増不締ニ可相成ト存申候、以

後ノ御所置実ニ一大事ト奉存候、先ハ早々如斯御座候、頓首、

（四月）卯月十一日

猶々、御自愛専一奉存候、此火縄弊国製（藩内根占・大村等ヲ名産トス、軍用皆此二所ノ製専用ス）ニ御座候間致進入候、御入納被下候ハヽ、大慶奉存候、以上、

ボートホーイツスル（米艦所載ノ図当時珍トシ模造セリ）之図、何卒拝見奉願候、以上、

薩摩守

越前守様

貴答

（島津家書翰集（日本史籍協会叢書）にて校訂）

二三四　魯艦入浦ノ報（安政五年カ）

昨廿五日御届申上候、魯西亜類船渡来ニ付、支配向ノ者差遣シ、来意為尋候処、右ハ蒸気船仕掛ケ「スクーネル」ニテ、魯国ヨリ書翰持来リ、唐国上海最小島魯国軍艦碇船罷在所ヘ罷越候処、布恬廷モ出帆、日本エ参候由ニ付、右書翰持越、一昨廿四日下田ヘ入津ノ処、神奈川エ碇泊罷在候趣承リ、彼十二時下田ニ罷在、昨暁出帆、此地エ着仕候趣申聞候、尤未海上ニ魯船四艘繋リ居、此内唐国致出帆候八九日前ニテ、其比、英・佛ノ船々日本ヘ罷越候積船用意中之趣見受候間、無程渡来可致趣申上候旨、支配ノ者罷帰リ申聞候、此段御届申上候、以上、

（安政五年カ）六月廿六日

浦賀奉行

二三五　齊彬公春嶽公ヘ御親書（嘉永六年）

○この文書は、「鹿児島県史料　斉彬公史料」第一巻の第一六〇号文書の嘉永六年六月二十九日付島津斉彬書翰（松平慶永宛）と重複により略す。

二三六　米艦内海小柴沖ヘ乗入リタル報（安政五年）

（安政五年七月）昨十日之内、奥御祐筆組頭志賀金八郎（金弐枚時服二ツ）常々御用多場所出精相勤候ニ付、被下之、右於奥相済、

（安政五年七月）十二日、巳刻（ウチャーチン）ロシア使節大広間御目見、御奏者番披露、

（安政五年七月）十一日、内藤豊後守（正縄、信濃岩村田藩主）年来出精相勤候ニ付、城主格京都御所方御取締方兼右被仰付、於芙容（容カ）間掃部頭（井伊直弼）老（信親、老中）中列座、紀伊守（藤内）申渡之、

（正睦、老中）六月十八日、備中守（堀田）殿御渡、亜船蒸気弐艘、昨十七日小柴沖エ入津、ロシア一艦（マヽ）十六日下田ヘ入津、引

続英・佛船モ江戸ニ入津ノ由、
同廿三日、大和守殿御渡、今度魯西・亜墨両国ノ軍艦申立趣ハ、英佛ノ軍艦今日渡来可致、尤清国ニ相勝、十分ノ勢乗ン(ニ脱カ)押懸リ候事故、応接方甚六ツケ敷相成ベクト、万一清国ノ覆轍ヲ踏候様ノ儀出来候ハ、不容易儀ニ付、井上信濃守・岩瀬肥後守於神奈川調印致シ、使節ニ相渡候、
七月五日、備中守殿御渡、英吉利国ノ軍艦三艘品川沖ニ入津致候、右ハ使節差越、和親交易之条約於江戸為取替度申立候付、役々出張、追々応接ノ積リニ候、
十一日、ロシア使節登城ニ付、殿上ノ間御廊下辺ニ罷出見物可申、備後守被仰渡候、
十四日、備中守殿御渡、亜美利加条約ノ儀、先般被仰出候通リ無御余儀次第ニテ、条約調印相済候儀ノ処、其比ヨリロシヤ船渡来、去巳年(安政四年)仮条約為取替相済居候廉々取戻(広カ)、条約取結度旨申立、貿易御差許ニ相成候儀ニ付、申立件々精々談判取結、亜美利加ノ振合ヲ以テ御取結相成候、英利西(吉脱カ)・佛蘭西船モ近々渡来可致、十分(之カ)ニ条約取結申立候共、精々及談判、取結、亜美利加振合ヲ以テ条約御取結可有之候、先達テ叡慮ノ趣被仰進候次第モ有之ニ付、下總守御使被仰付、否上京(不日カ)(之上カ)ニ候、無御余儀訳柄委細及言上候筈ニ候間、可被得其意候、

七月

編者曰、当時ノ形勢及ヒ談判ノ事実ハ、「ペルリー」カ日本紀行ニ照シテ、彼我ノ形況ヲ弁スベシ、

二三七　内裏造営地引木作初（参考　非蔵人日記抄）

三月十一日

一造内裏地曳木作始日時定陣之儀也、上卿三條大納言實萬卿・奉行柳原頭弁光愛朝臣・弁葉室弁長順(ママ)、陽明家於寝殿陣被始巳一刻半前、
一来十九日、石清水臨時祭ニ付、従十七日晩刻二十日朝御神事ノ事、
一来十八日、新殿造営地曳木作始之事、
右両条為心得、議奏萬里小路被申渡、令壁書畢、

三月十三日

一来十八日、地曳木作始ニ付、　御所々々ヘ可為参賀奉行日野殿被申渡殿下ヘモ参賀同様服者之輩ハ可為廿日令壁書

三月十八日

一新内裏大造造巳刻地曳午刻等也、

一為恐悦帥宮・　内大臣殿・　左大将殿・　二條大納言殿・　九條大納言殿・　近衛大納言殿・　中納言中将殿・九條中将殿等御参、其余御不参有御使、於麝香間代御祝被出、諸家悉参賀、便所々々ニテ御祝被出白飯・吸物・酒肴、同列参賀隠居・番代見習等迄御祝被出白飯・吸物・酒肴、依之御献奉行ヘ番頭宗党・番頭代義邦御礼申上、

四月八日

一新内裏礎立柱也、

一為恐悦関白殿・右大臣殿・　帥宮・　内大臣殿・　左大将殿・　近衛大納言・　中納言中将殿等御参、其余御不参有御使、於休息所代御祝被出、諸家悉参賀、於便所々々御祝被出白飯吸物、同列隠居・番代見習等迄・参賀、御祝被出白飯・吸物・酒肴、依之御献奉行ヘ番頭代御礼申上参賀晩頭上之

一同列御差図御用掛之輩方金二百疋准后ヨリ方金百疋　拝領之旨有吹聴御礼廻去三月十八日同上

一従今晩　賀茂祭ニ付御神事、依之改火掛湯如例被出、

二三八　参考　水戸前中納言殿銃術問答

二三八の一

銃術問答

水戸前納言ノ職ニ在、深ク心ヲ外事ニ用イ、其外患ヲ虞スル最切ナルノミナラス、又其西洋工芸技術ノ精ナルヲ知、之ヲ採用シテ以テ我短ヲ補ハントス、故ニ銃礮ノ制・練兵ノ法・船車機器ノ運用ノ如キ、皆其長ヲ取テ之ヲ活用変通シ、種痘之方・乳酪之製・医療之術ノ如キモ、皆其家臣ヲシテ之ヲ伝習製造セシム、又嘗家臣子弟ヲ撰ンテ蘭文ヲ読ムコトヲ習ハシム、但其邪教ノ大倫ヲ害シ、奇衣ノ奢侈ヲ導キ、国体ヲ損シ、風俗ニ害アル者ニ至テハ、痛ク之ヲ排斥シ、言語名称亦洋言洋名ヲ用ルコトヲ禁ス、

安政二年乙卯六月著ス処ノ銃術問答一巻アリ、之ヲ一橋慶喜ノ刑部卿ニ与フル所ナリ、今其全文ヲ挙ク、亦以テ其博采資取ノ一端ヲ見ルニ足ラン

二三八の二

問テ曰ク、拙者是迄某流ノ砲術ヲ学ビ候得共、近来世上専ラ西洋ノ砲術行ハレ候間、新ニ西洋流ヲ学ヒ候ハント存候処、得失如何可有之哉、

答曰、吾仏尊シトヤランイヘル諺ノ如ク、世ノ武芸ヲ学ヒ候者、己レカ流儀ノミ尊ヒ候テ、他流ノ善ヲ取候事ヲシラス候、然ルニ貴殿既ニ某流ヲ被学、又西洋ノ流ヲモ被学候ハントノ儀、近頃感心ノ至リニ候、西洋

ノ術、如何ニモ着実便利ノ事多ク候間、国体ノ本末・制度ノ異同・風俗ノ厚薄等ヨクヽ合点被致、其上ニテ彼ノ長スル所ヲ取テ、我短ナル所ヲ補ヒ、我長スル所ヲハマスヽヽコレヲ振ヒ候御志ニ候ハヽ、西洋流御研究ノ儀、至極御尤ニ存候、

問テ曰、国体ノ本末トハ如何、

答曰、申迄ハ候ハネ共、大日本ハ天照大神ノ詔ノマニヽヽ、御代ヽヽノ天皇シロシメサレ、天地日月ト共ニ、長久ノ御国ニ候ヘハ、実ニ世界ノ大本ニテ、海外万国ハ此末ニテ候、然ルニ漢学ニナツミ候モノハ漢土ヲ学ビ、蘭学ニナヅミ候モノハ西洋ヲ慕ヒ、本末ヲ失候モノ不少、漢土モ其君臣シバヽヽ位ヲカヘ候、我カ朝ノミ天地ノ始ヨリ幾万年カ経テ今ニ至ルマテ、神胤一本ニテ皇位ヲ続キ給フ事、決テ外国ニ其例シ無之、サレバ三代将軍ノ御意ニモ、御国内ノ戦争ハ源平其外互ニ勝負有之候迚モ、其者限リニテ日本ノ恥ニアラズ、日本ノ土地・人民等一人タリ共、外国ヘ被奪候テハ、日本ノ恥ト被仰候儀、誠ニ御尤之御事ニ候、サレバカリソメニモ御国ニ生レ候人々家中々々ハ、其国主領主ヲ守護シ、国主・領主ハ大将軍ヲ輔ケ奉リテ、天皇ヲ守護シ奉リ、大日本ノ威稜ヲ六合ニ輝サムト志シ候儀、即チ大和魂ニテ、武家心得ノ第一ト存候、

問テ曰、制度ノ異同トハ如何、

答曰、御国ト制度ノ異同アケテ数ヘ難ク候ヘトモ、尤モ大ナル所ハ、封建郡県ノ異同ニ候、当時御国ハ封建ニテ候、漢土ハ周ノ代迄ハ封建ニ候故、方今ノ世態ニ似寄申候、秦ヨリ以後ハ郡県ニ相成候故、タトヘ能キ事ニテモ、方今ノ御制度ヘ引付ケ候テ、行ヒ難キ事少ナカラズ候、扨封建ハ国々ヲ諸大名ヘ賜リ、政事ヲ御任セ、其家中モ、大夫ノ子ハ大夫トナリ、士ノ子ハ士トナリ候故、殊ニヨリ不徳不才ノ人モ重役ニ任シ、政事振ヒ兼候弊有之候得トモ、家中ハ譜代ニテ、百姓モ代々恩ヲ蒙リ候故、君臣ノ恩義至テ深ク候、郡県ハ方今御料所ヘ御代官被差出候如クニ、州郡ノ太守ヲ殊ニ選ヒ候テ申付、惣テ役人等其他ニ挙用ヒ、中ニハ父子相続致候モノモ有之候ヘトモ、封建ト違ヒ重役ノ子孫ハ俄ニ卑賤ニ落チ、又ハ民間ヨリ起リ、一代ノ中ニ執政大臣ノ職ニ至リ候事モ珍ラシカラス、軍兵モ民間ヨリ、壮年勇力ノ者ヲカリアツメ候故、執政大臣等人物揃ヒ候ヘハ、善政美事被行候ヘ共、詮スル所、君臣ノ

恩義浅ク候、扨テ前ニ申候通リ、日本ハ世界第一ノ御国ニ候故、自ラ仁厚義勇ノ風俗ヲナシ、上古ハ国造ト申スモノ有之、マヅ封建ノ姿ニ似寄、中古ハ漢土ノ制度ニナラヒ、郡県ニ相成候得共、外国ト違ヒ柔弱卑劣ノ振舞無之故、戦ニ臨ミ候時、一々ニ法度軍令ヲ以テ下知不致候テモ、人々恥辱ヲ知、父子兄弟打死候テモ少モカヘリミス、死骸ヲ乗リ越ヘ々々相働キ候、封建ノ制度ニテハ尚更之事ニ候、之レ御国ノ尊キ所ニテ候、外国ハ元来仁厚義勇ノ風乏シク、郡県ノ制度ニテハ、別テ君臣ノ恩義浅ク、人々必死ノ覚悟無之候故、法度軍令等ニテコレヲ遣ヒ候得共、ヤヽモスレハ遁逃ノ患有之候、之レ外国ノ卑キ所ニテ候、サレハ御国ノ士卒ヲ遣ヒ候ニハ、第一常ニ仁政ヲ施シ、益々恩義ヲ厚クシ、其上ニ漢土西洋ノ軍制等ヲモ取候テ、之レヲ活用候ハヽ、無此上事ニ存候、

問曰、風俗ノ厚薄トハ如何、

答曰ク、是又挙テ数ヘ難ク候ヘ共、尤大ナル所ハ、利義ノ異同ニ候、君ニ忠ヲ尽シ候ヘハ一命ヲ失ヒ、敵ニ降参致候ヘハ万金ノ利ヲ得候時ニ臨ミ、ムシロ一命ヲ失ヒ候共、忠節ヲ尽候テ、臆病鄙劣ノ名ヲ恥ケ敷存候ハ、御国武士ノ大和魂ニ候、詐謀ヲ用ヒ、恥辱ヲ忍ヒ、他国ノ人民ヲナツケ、他国ノ土地奪ハントノミ志シ候ハ、西洋人ノ底意ニテ候、御国ノ人モ利ヲ知ラサル者ハ無之候ヘ共、義ノ一字ニテ之レヲ制シ、義ニ当リタル上ニ、利アル事ナラデハ取用ヒ不申候、西洋人モ義ヲ言サルニハ無之候ヘ共、従来利ヲ貪ラムカ為ニ義理立候間、御国土民ノ上ニ立候人々ニハ、能々此義ヲ心得、マス々々土民ノ大和魂ヲトギミカキ、西洋利ヲ貪ルノ風俗ニ移ラザル様、用心専一ト存候、往古ヨリ夷狄ヲ禽獣ニ比シ候ハ、畢竟禽獣ハ、利ヲ知テ義ヲ知ラサル故ニ候、サテ近頃ノ説ニ、夷狄ヲ禽獣ノ如ク見通シ候ハ甚不宜、夷狄モ亦人類ニ候ヘバ、随分丁寧ニアシラヒ候テ可然ト申モ、一通リ尤ノ様ニ候ヘ共、ナマシイ公平ガマシキ説ヲ行ヒ、万一夷狄ト五分々々ノ交リヲ結ヒ候様成行候ハヽ、御国ノ大和魂ウセ果テ、禽獣ノ道横行致候半ト苦心ノ至リニ候、

問曰、国体ノ本末・制度風俗ノ異同等、貴説ニテ粗承知イタシ候、乍然是ハ御国ノ人々一体ニ心得ヘキ事ニテ、砲術ニノミワタリ居候事ニ無之候、然ルニ西洋流ノ砲術ニカケテ、之レヲ論セラレ候ハ如何、

答曰、サレハニテ候、愚老ツラ々々世上ノサマヲ見候ニ、近来、西洋ノ学日々ニ盛ニテ、海外ノ長技ヒロマリ候ハ、喜フベキニ似候ヘ共、国体ノ本末ヲワスレ、制度・風俗ノ異同ヲ混淆致シ候萌ヤ、アラハレ候、聖知ノ人ハ禍患ヲ未萌ニ絶ト承候、今ハ其禍患最早萌候ヘハ、心アル人ハ尤用心専一ノ時節ニ候ハズヤ、

問曰、禍患ノ萌トハ如何、

答曰、誰モ存候通リ、鉄砲ハ元来夷狄ヨリ渡リ候器ニテ候ヘハ、第一ニ鉄砲ト云フ名目ヲ始メ、カナ物・小道具・分量ニ至ルマテ、最初ハ逐一蛮語ニテ伝ハリシコソサシ見ヒ候処、古人一切其蛮語ヲ用ヒス、鉄砲・玉薬・火皿・火フタ・火縄・引カネ等ノ名目付、六匁十匁・百目貫目等、彼ノ分量ヲ蹴ステ、御国ノ分量ヲ用ヒ候、服食等ノ偽名ニ、カツパ・タハコ・カステイラ等蛮語ヲ用ヒ候モ有之候ヘ共、鉄砲ニ限リ一切蛮語ヲ用ヒス、アナガチ漢訳ニモヨラス、御国ノ名目ヲ用ヒ候ハ、流石古人ノ大見識ニモ感スルニアマリアリ、夫故今ハ鉄砲モ自ラ御国有来ノ如ク心得、近頃新ニヒロマレルヲハ、西洋流トサヘ名ツケ候也、扨ソノ西洋流ヲ学フ者、古人ノ見識トハルカニ事カハリ、ゲーベル・ヤーゲル・ビストン抔ト鴃舌ノ語ヲ用ヒ、幾十ポント抔唱ヘテ玉目ヲ秘シ、銃耳・雷粉抔イヒテ済ヘキ事ヲ、タップ・ドンドル抔トナヘ、其他蛮語ヲ用ル事、挙テ数フベカラス、衣服モ袖アリテハ便利アシキトテ、夷狄ノヌイグルミテフ物ニ似寄タル服ヲ用ヒ（甲冑ノ下着ハ勿論袖無之候間、調練ノ節ニ限リ其場ニテ右下着ヘ差袴ヲ用候ハ可然候ヘ共、平常往来ニモ甲冑ノ下着ナリトテ用候テハ、夷狄ニ似寄候ノミナラズ仕事師等卑賤ノ者風ニ候間、先ツハ袖、調練ノ時、大刀ヲヌキアル衣服ヘタスキニテ事済ムベキカ）ステ小刀ヲ背ニサシハサミ、甚シキニ至リ候テハ、無刀ニテ鉄砲ノミ携ル者アリト承及候、言語衣服ハ制度風俗ニ拘リ、就中佩刀ニ至リテハ、御国武備ノ大眼目ニ候所、人心新奇ニ趨リ、如此サマニ成行候ハ、アサマシキ事ニ候ハスヤ、此義公辺ニテモ精々御世話被為在、既ニ御触モ有之候得共、今以テ其弊改リ兼候ハ、嘆ケ敷事ニ候、

問曰、彼カ銃陣四十八人ヲ一隊トシテ三段ニ並ヘ、前後左右稠密ニ備ヘ、至極着実ト存シ候所、貴説如何、

答曰、四十八人ノ銃陣、其工夫感スルニアマリアリ、然レトモ畢竟所謂郡県制度ニテ、新ニ民兵ヲ募リ、或ハ烏合ノ衆ヲ速カニ調練スル故ノ術ニシテ、御国ニテ

モ同心・足軽以下ニ用ヒ候ハ可然候ヘ共、譜代恩顧ノ士ニ用ユベキ備ニハ有之間敷候、同心・足軽以下ト云ヘトモ、今一概ニコレヲ用ユルコト容易ナラズ候、其故ハ第三ケ条ニ申ス通リ、御国ノ武士ハ廉恥ヲ重ンジ、一種義勇ノ気象有之候、サレ共今銃砲専ラニ行ハル時ニ当テ、廉恥義勇ノミ恃ミテ、只々槍刀ヲ握リ、夷狄銃陣ノ前ニ進ムハ愚ナルワザ故、彼砲勢ニ敵セム程ニ、我モ亦砲勢ヲ張テ相向ヒ、扨其中ヨリ所謂廉恥義勇ノ武士我身ヲ的ニシテ、騎馬ニテモ歩兵ニテモ、砲或ハ長刀・太刀御国ニテ長技トスル所ニテ、我コソ得タリト思フ道具ヲ携ヘ、敵陣ヲ乗崩シ突立切立候ハ、、必勝疑フベカラズ今夷狄共ニテ神国ヲ柔弱ナリトアナトリ、大言ヲ申セトモ、陸遠引上ケテ一戦セシニ、何ノ恐ルル事カアラン、今ハ此方ニハ大艦ナキ故、弓ニテハ戦モ相成兼ルトイヘトモ、計策ヲ以テ彼カ船ニ乗入テ、短兵急ニ起サンニハ、タトヒ大砲ハ数多フチヘカケ置ケ共、内ヲ向ケテ打事ハ叶フ間敷、常ニ大小砲ノミ頼カ故ニ手元ノ勝負果テ弱ク、第一臆病ニ候故、一口モ不残生捕ニ成ベシ、サレハ御国ニテモ長技トスル槍・剣・長刀等厚ク心掛候上ニ、大小砲ヲ学時ハ益ツヨク、大小砲ヲノミ頼トスル時ハ夷狄同様臆病ニナリテ、手元ノ勝負ハ弱ク成ルニ疑ナシ、兎角ニ武士タラン者ハ、非常ニ臨ミテハ命ヲステテ国ニ報ユル役人ナリト心得ベシ、命タニ不厭ハ何事ヲカ恐ルベキ、太平ナレハトテ、百年生ル人ハマレナレハ、大和魂ヲミカキ、非常ノ事アランニハ義勇ニ付死戦シテ、名ヲ後世ニ残サンコト、然ルニ今ノ西洋流ハ、譜代・新参・士分・歩卒ヲ思ヘシノ差別モナク、之レニ四十八人ノ陣ヲ教ル、難心得候、一旦ハ是ヲ士分ニ教ヘ、終ニハ卒伍ノミ伝ヘ教ヘントノ意ニ候ハバ、尤ニ候、方今ノ勢ヲ以テ察スルニ、譜代ノ武士皆槍剣ノ長技ヲ廃シテ、歩卒民兵ノ業ヲ事トスルニ至ラムモ計リ難ク候、コレ愚老不審ノ一ツニ候、方今天下ニ有来候銃砲幾万ヲ以テ数フベシ、火縄ハ火打ハ火帽ニシカズ、是諸人ノ知所ナレ共、俄ニ幾億万ノ火縄仕懸ヲ一時ニ改ムルハ其勢ナシ難シ、サリトテ僅カニ千万之火帽ノミ用ルハ愚ナリ、サレハ西洋銃陣ノ意ヲ以テ之ヲ用候ハ、、兵器全備候迄ノ内ハ、タトヒ火縄筒ニテモ火打筒ニテモ、六匁ノ玉、十匁ノ短筒ニテモ、活用可相成事ニ候、西洋流此処ヘ心ヲ不用、火帽ノ長筒ニ非レハ調練ニ用ヒ難キ様ニ申候、愚老不審ノ二ツニ候、畢竟国体・制度・風俗ノ堪(勘)弁ナク、ヒタスラニ西洋ノミ信仰致候故、右ノ如ク成行候ヘ共、一流一芸ノ師ト違ヒ、国主・領主等政事ニモ携リ候ヘハ、大体ノ上ヨリ見識ヲ立候テ、改正有之度事ニ候、

問曰、四十八人ノ銃陣、御国同心・足軽以下ニ用ヒ候ハ可然候ヘ共、譜代恩顧ノ士ニ用ユベキ備ニハ有之間敷トノ儀、如何ノ訳ニ候哉、

答曰、前ニモ申通リ御国ノ風俗義勇ヲ貴ヒ、廉恥ヲ重ンシ候故、戦場ノ討死ハ不及申、変難ニ当候テハ笑ヲ

含テ切腹モ致シ候、此切腹抔ト云フ事、外国ニテハ殊ノ外驚キ怖レ候ト承候、サレハ上タル者、常ニ恩義ヲ以テ召遣ヒ、万一ノ節千騎ガ一騎ニ成トモ、卑劣ノ振舞ナキ様仕向ケ候ハ、肝要ニ候ヘ共、逃候ハ、可殺抔トオヒヤカシ候テハ、却テ士気ヲ挫キ申候、今西洋ニテ、四十八人陣ヲ指揮致候ニハ、剣ヲ抜威ヲ示シ候ヨシ、畢竟下輩ノ者ヲカリアツメ、調練致候故ニ可有之哉、殺サルヲ恐レテ働ク程ノ者ニ候ハヽ、スハ、且又三段稠密ノ備ハ、騎馬ニテカケ立ラレ候節、所謂剣附鉄砲ニテスキ間ナクカタメ候ハヽ、馬ヲ入候事不相成、調子ヲ揃ヘ一同連発候ヘハ、大敵ニ向ヒテ進ミ候ニモ心強ク、是等ノ工夫ハ感スルニアマリアリ候、乍然譜代義勇ノ士ハ右様ノ工夫ヲ施シ候迄モ無之、却テ或ハマハラニ備ヘ、或ハ一所ニ集リ、変化自在ナル中ニ神速ノ働モ可有之、大小銃モ能々狙ラヒスマシ候テ、敵ヲ斃シ候義、士ノ本意ニ可有之、然ルニ見当モナキ筒ニテ一調子連発抔申、全ク軍勢ヲ助ケ候迄ニ候、右様下輩ノ業ヲ歴々ノ士ニ申付候ハ、如何ノ事ニ候、愚老蘭学不案内ニ候ヘ共、西洋ニテモ所謂ヤーケルトヤランハ、ネラヒ打ノ筒ニ相見候ヘハ、右ネラヒ打致候モノハ、定テ下輩ニハ有之間敷、サレバ是非ネラヒ打ノ組立モ可有之、又騎戦ヲ防キ候剣付鉄砲等有之バ、是非騎戦ノ陣法組立モ有之ベク、是ハ勿論下輩ノ業ニハ有之間敷、又大銃有之上ハ、大銃ヲ小砲ニ組立候手順モ可有之、其他船軍陸戦等多端ノ事ト推察致シ候、サレハ、実ニ西洋ノ長スル所ヲ取ラントナラハ、悉西洋軍法等ヲ考究致、其上ニテ斟酌ヲ加ヘ、農兵ニ用ユベキヲハ農兵ニ用ヒ、士分以上、物頭・番頭以上、大将分ニ至ルマテ、夫々制度・風俗勘弁ノ上、彼カ所長ヲ取テ用候ハ方今ノ急務ト存候、然ルニ僅カニ四十八人陣ノミノ西洋法トノミ心得、歴々ノ諸士之レニテ合戦致シ、先手同心ノミニテ合戦致候様ニノミ心得候ハ、是愚老カ兼々不審致候三ツニ候、

問曰、四十八人ノ陣ハ、イカサマ下輩ノ用ユベキ業ニテ、拙者修行致候ニハ不及義勿論ノ事、家中モ下輩ノ者ヘノミ学ハセ可然哉、

答曰、物頭ハ一組ノ将、番頭ハ一隊ノ将、家老ハ一軍ノ将、貴殿ニハ貴家惣軍ノ大将ニ候、惣隊ノ本ハ一伍ヨリ始マリ候ヘバ、一伍ノ情合御承知無之候ヘバ、惣軍ノ采配モ届兼候理合ニ候間、平日ノ調練ニハ、試ニ

家老・番頭又ハ物頭ノ采配ニモ御立入、又御近習初メモ試ニ同心等ノ立場ニ代リ、得失利害研究致候ハヽ、尤可然候、一体武士一人前ノ武道ト、領主・地頭ノ武道トハ、次第相違致、仮令ヘハ槍・剣・銃・馬等一円ニ修行致シ、万一ノ節ハ諸人ニ抽テ、一番鎗・一番乗狙撃等ノ功名著ハサント日夜心掛候ハ一人ノ武道ニテ、如此モノハ実ニアツパレノ武士ト可申候、扨吾組子支配共ヲ不残右ノ如クニ仕コミ候半ト、日夜丹精ヲ尽シ候ハ、物頭・番頭・家老ノ武道ニ候、一領一国ノ主ハ一家中不残武道ヲ励ミ、君臣上下一致シテ、天朝公辺ノ御恩ニ報ヒ奉ラント志候ヲ、国主・領主ノ武道ト可申候、

問曰、然ハ国主・領主ハ一芸修行ニハ及申マシクヤ、答曰、愚老在邑中鷹野ニテ、人品相応ナル者田ノ草ヲ取候モノ見受候間為承候ヘハ、石高人別モ多分有之、シカモ村長ヲ勤、何不足ナキ者ノ由ニ候間、下男・下女モ多ク有之、此炎天ニ自分苦ミ候ニモ及間敷ト為申候ヘハ、此者申スニ、私一人草ヲ取トモ、何程ノ足リ合ニモナリ不申、乍併百姓ト申モノハ、何程大株ヲ持候テモ、自身田畠ノ耕作ヲモ心得不申候テハ、下男・下女ノ働キモ分リ兼候、且不案内ニテハ下知モ届キ不申、自然ト諸人無勢ニ相成候間、大義ニハ候ヘ共、年来如此仕来候ト申ヲ承リ、一農夫ノ言ニ候ヘ共、実ニ大名ノ心持ニ的中感心致候、万一ノ節、大名一人剣・槍・銃・馬ノ働ラキ致候トテ、一人ノ業ハ格別ノ事ニモ無之候ヘ共、平常家中ノ武芸工拙（ウカ）勤惰ヲ吟味致候事モ、目クラ同様ニテハ不相成、且又夏ハ暑ヲ避ケ、冬ハ寒ヲ恐レ、己ハ手足ヲ動サズ、家中ニノミ出精致セト申テハ、家中帰服不致候間、芸人ニコソ成候ハズトモ、政事ノ暇ニハ間断ナク武芸相嗜候儀、即家中ヲ励シ候第一ニテ候、一ニハ養生ニモ相成事ニ候、大名一人ノ働キト申ハ、万一ノ節総軍或ハ進兼或崩レ立候時、俄ニ旗色ヲ取直シ、総軍九分ノ負軍ヲモ十分ノ勝利ニ引込シ（ミカ）候儀ハ、大将ノ采幣一ニ有之、此采幣フルヒ候モ、平日武芸ノ嗜ミ有之候ヘハ、自然ト気モ満、胆モ太ク相成居候間、下知モ存分ニ行届キ、三軍ノ勇気一倍致可申候、馬ナドモ一騎武士ノ好ト、国主・領主ノ馬好トハ、同シ好ノ中ニモ相違有之候、銃術ノ事ニ付、御尋故武芸ノ事ノミ御答申候ヘ共、学問政事ノ上モ皆一理ト存候也、

安政二年乙卯六月十九日認

〔徳川斉昭〕潛龍老人

一橋殿

御報

二三九　齊彬公福井侯ニ御親書〔安政元年〕

参考　昨夢紀事抄

一六月十五日、去ル八日江戸出立之飛脚到着シテ、薩州侯ヨリ御出書相廻ル、右御別紙如左（本紙迭ス）

別啓仕信、阿閣ヘ面会之儀ハ琉国之義ニテ、是迄日本通信、清朝ヘ対シ押シ隠シニ相成候得共、此節之場合ニテハ打捨置、異人自侭ニ被致候テハ不相成候間、此方ヨリ打明ケ、是迄不申聞候得共、琉国ハ属国ニ相違無之訳申聞候方可然評議ニ候、弥夫ニテ可然哉トノ事（弘化ノ始仏人初メテ来リシトキヨリ、陽ニ清国ニ従属云々ト答ヒ日本通商ト唱ヘタル等ノ事実ハ、弘化二三年ノ紀事ニ明カナリ）ニ御座候、尤之事候得共、彼国所存モ御座候間、篤ト申諭之上（〔候〕カ）ニ致度申候処、其通リニテ、是ヨリ追々彼方ヘ可申遣ト存居候、阿（〔申脱カ〕）阿部正弘被申候ハ、左様ニ相成候ハヽ、琉モ悦ヒト被申候間、中々左様ニハ有間敷、大方難渋可申立ト存候旨申置候（阿部侯琉人ノ情態ヲ知ラサル故如斯、清ヲ父トシ日本ヲ母トスルノ国情ナレハナリ）、左候テ弥左様候（〔ニ脱カ〕）ハヽ、万事下田之規則ニ習ヒ候様御達御座候様、且又外ヘハトモカクモ、小子ニハ琉球引合モ御座候間、下田応接之次第取繕（幕吏応接取繕ノ多キヲ知レタル故如斯）無之処、不致承知候テハ、不都合眼前ニ御座候段申述候処至極尤候間、応接人帰着之上、委細可申聞トノ事ニ存候、是ニテ事実可相分ト存申候、来（安政三辰年）三月ヨリハ弥通商ノ道取結之相談相違無之様ニ被存申候、左候テ大船（軍艦製造中ナレハナリ）成就ノ上ハ、此方ヨリモ出張（公ノ御主論）、商法之心得ニテハ無之哉ト被察申候、追々様子承リ可申上候、呉々モ極秘ニ相願申候、扨又閣中モ以後手当之儀ハ、余程心配之様子候得共、御救助之沙汰ハ頓ト無之ヨシ、外ニ手段ハ無之ト存申候、トカク閣中始メ、商之方可有利潤ト存込候口気ニ御座候、

一水老公御登城モ、全ク世上之人ロヲ恐レ候訳ト存申候、全体前日承候テ、御登　営候テハ軽敷（〔々脱カ〕）候間、此節ハ無之方ト龍土（伊達宗城公）ヘモ申遣候、同意ニ候得共、申上候間モナク候処、跡ニテ承候ヘハ、藤田水戸藩（藤田）ヘ松河内（松平河内守）ヨリ是非ト申候テ、夫故御勧メモ申上候（〔ニ脱カ〕）哉聞得候、廿六日ニハ御断ニ相成申候、御登　城

之節モ何事モ不申上、表通リ之御届等之書付、入候（衍カ）御覧候計リ之由ニ御座候、

一ボード砲米国式海陸兼用砲ノ名図、龍土伊達宗城公ヨリ拝見イタシ候、

早速写申付候、且又遐邇貫珍琉人渡唐者ニ命シテ福州ヨリ取寄セ玉フ之儀御返却相成落手仕候、

一愚娘篤姫君之儀、イマタ何之沙汰モ無之、此間辰辰ハ阿部侯ヲ云フ之口気ハ、イツレ何トカ返事イタス筈ニ候ヘトモ、存之通色々御入用多御事多々ユヘ、少々静ニ相成候（御事多の中ゆへ照・昨）マテハ、何分難申ト被申、（候脱カ）随分含之様子ニ候得共、長引可申光景、扨々困リ入申候、相顕ハレ候処モ御座候ハヽ、又々可申上候、

一墨奴応接モ此前ヨリ宜敷トノ事候得共、市中歩行且品物取入等ハ、不相替我侭ノ様子、下田七里方、箱館五里方ハ無相違自由ニ歩行御聞済、来三月ヨリ品物交易始ル（候カ）トノ事ニ密ニ承リ申候、水・尾両公如何程被仰候トモ、迚モ可被行光景ニテハ無之候、猶逐（追）々可申上候、立花柳川侯弥御救助之願指出、不相叶候ハヽ、守衛御断申上度願書モ出候由、岡山岡山侯モ何カ申立候様子候得共、例之通長引、未タ決定不致候ヨシ御座候、下谷下谷云々紛スヨシ、毎々咄有之、（候脱カ）其外格別小子ニモ咄無之候、細川態本侯例之通ニテ相分不申、猶後便細事可申上候、頓首、

（安政元年）六月三日

猶々、久世大和守事、家来国勝手一条ヨリ事起リ、当時引入、多分退役之風聞、極内承リ申候、以上、

（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）ならびに照国公文書にて校訂）

二四〇　下田・箱館両奉行ヘ達書

二四〇の一（安政二年）卯二月八日、伊勢守ヨリ下田奉行（マヽ）ヘ下附

箱館奉行ヘ

豆州戸田村滞留之魯西亜人共、今般下田港ヘ入津之亜米利加商船ヘ乗組、追々帰国致候筈ニ候、尤カムシヤツカ又ハウルツフヘ罷越候内、（由カ）若永海ニテ渡海難相成候ハヽ、箱館ヘ入津可致由ニ候間、為心得相達置候、弥相越候ハヽ、蝦夷地其外取締筋等厳重可被取計候、委細之儀ハ箱館奉行可被談候、

右之通、松前伊豆守ヘ相達候間、得其意可被取計候、

（大古本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

二四〇の二

伊勢守下附

大目付

御目付　江

先達テ下田表ヘ渡来之亜米利加商船出帆之節、魯西亜人トモ乗組帰国致シ候筈ニ候、依之向々ヘ相達置候事、

卯二月

二四一　米艦測量ノ形況

伊能（勘解由）氏実測図出デシヨリ後ハ、図ヲ用ユル者皆之ニ拠ラサルハ無シト雖モ、航海者ニ在テハ最モ緊要トスル所ノ海底深浅及ヒ磁鍼偏差ヲ、此図中ニ記サヾル等ノ如キ、充分海図ノ用ヲ為ス能ハサルヲ以テ、遺憾ニ堪ヘストス、外国人亦此図ノ経度ヲ改ムルモ、方位并浅深等ノ確実ヲ得サルカ故、急ニ我国沿岸瀕海ヲ測ルコトヲ要セシナル可シ、是ヨリ後、安政二乙卯年三月廿七日、米国船二艘下田港ニ来リ、日本海測量ヲ請フ、翌廿八日、全国測量船「ウインセス」号船主「ジョン・ロッデイル」ヨリ、前件ニ係ル書翰ヲ出ス、其訳文ニ云、

〔大日本古文書にて補〕

〔日本帝国江戸ニ於テ、外国之事ヲ司ル貴官ヘ〕

歴（暦）数千八百五十五年第五月十四日安政二乙卯年三月廿八日ニ当ル

亜墨利加船「ウインセス」号船下田ニ於テ、

貴君ヘ

交易渡航之場所ニ有之候暗礁并島々等ヲ測量ノ為メ、二ヶ年以前北亜墨利加合衆国ヨリ、五艘之船ヲ仕出シ候儀ハ、日本政府ニ於テ御承知ト相考候、

今我等日本ヘ来リ、当時南太平海ニ有之候我領地ト唐国ト之間ニ於テ、交易専ラ盛也、依（之カ）テ我国之船々、右両国之間ニアル日本海ヲ通ラサレハ不相叶儀、地図ヲ以テ知ルベシ、右海路中ニ有之難所ヲ量リ、地図ニ顕サヾレハ、交易安全ト云ヒ難シ、我国ノ交易船、日本島々之周囲ニアル難所之害ヲ受クベキニ、其難所ヲ秘スルハ、好親之君ニ於テ願フ所ナル乎、若シ我渡航之モノ、難所不案内ノ時ハ破船多ク、無辜ニシテ死スル者多ク、将タ衆人無余儀日本人ヨリ賓客ノ取扱ヲ受クベキニ至リ、其失費多カルベシ、

前条ノ次第ニ寄、渡航之通路測量ハ、日本人ニモ且我国ノ為ニモ希フベキ事ハ顕然タリ、右測量ニ日本人手伝イタシ度、アメリカ合衆国トノ条約中第十ケ条ニ、我国ノ船危難ニ逢フ時ハ、日本港ヘ乗リ入ルベキ許容アリ、

万民悉ク条約ヲ解議スル時、規定トスル「二三之事件」大二三ノ事件免許アレハ、是ニ属スル廉々都テ許ス所トスベシ、然ラ

サレハ、其許容全カラスト云ヘシ、親シキ国ノ船沈没焼失、檣ヲ失ヒ、或ハ乗組ノ者饑渇ニ及フ時ニ当リ、近隣ノ港ニ可参ヲ免シ、彼等ニ港ノ形勢ヲ秘スルハ、信義ニ非ス、虚偽ニ近シ、条約表無相違分明ニ解得タル所ニテハ、前文願之儀ハ、既ニ日本人ニ於テ許容有之事ニ候、仮令条約中ニ右之廉無之トモ、両国互ニ懇切ニシ、扶助スヘキニ、暗礁ヲ秘シ置、交易ヲ障、且大国民人ノ許多ノ命ニモ拘候ヲ、日本人ニ於テ願フベキニテアルマジク被存候、

若難所且避クベキ通路ヲ報知スルヲ拒ム時ハ、交易ノ障且許多ノ人命ニモ拘リ候ヲ願フ道理ナリ、学問ノ為我等ノ測量ハ日本人ニ障害ナシ、我等ニ於テハ最モ肝要ノ事也、歐羅巴并合衆国ノ政府ハ、其港ヲ図面ニ載セ、板ニ興シ、是ヲ他国ニ商フ也、是決テ害アルコトナシ、却テ便利多ク、渡海ノモノ扶助ノ為メ、瀬アル処ニハ澪杭ヲ建テ、且危難ノ岩ニハ燈ヲ居ヘ、是ヲ目当トス、是則仁心ノ政道ノ為ス所ナリ、

軍船ハ地図ナクトモ其海路ヲ知ル也、其故ハ艀ニ大砲ヲ備ヘ、先ニ立テ難所ヲ探リ、夜中ニハ火ノ手便ニテ、通路ヲ違ヘサル様ニスル也、軍船敵国ノ港ヲ測量スルニ、平常暗夜ヲ良トス、商船ニ於テハ、左ナクシテ地図ヲ便リトシ、其助ニテ渡航ス、

我謹テ願フハ、日本政府日本海測量ヲ許容セン事ヲ、我前文申立候外志望無之、若日本政府、日本人ヲ差遣スコトヲ希ヒ、役人両人船中ヘ招待スルコトアラハ、大慶ノ至也、且其人我所業ノ証トナリテ、是ヲ学ビ絵図ヲ得ベシ、我願望ハ止ヲ得サル事情、条約之趣意、和親ノ本旨、且ツ公然ト許シタル通路ノ難所ヲ測量スルニ、人々免恕ヲ受クベキ自然ノ道理ニ基キシ事明ナルベシ、稀ニ渡海（航カ）スル遠隔ノ島々海辺ヲ平常測量ス、是ハ目前無余儀事ニモアラサレドモ、船々其海路ヲ迷ヒ、漂流スルヲ安全ニスル為ナリ、日本ノ島々我航海ニ害障ヲ為シ、且ツ危難アリシ後ハ、初テ此測量ノ事ヲ希フナリ、測量交易ニ先キンスベキニ、猶予セシハ尋常ノ規則ニ違フ事、日本政府ノ弁知スル所ナリ、

我願ノ趣意許容アルベキハ、相違アルマシキト被存候、若シ許容ナキ時ハ、合衆国ノプレシデントニ於テ、日本政府ト好意アルトハ思ハサルコト顕然タリ、我高貴ノ人ト談判ノ為メ下田ヘ渡来セリ、我等条約中許容ノ廉ヲ土地ノ重立タル人ニ談シカタシ、我等ノ行状正シ

ク恭敬ナリ、重立タサル人ノ障、或ハ無益ノ仲人アルトキハ、条約第四ケ条ヲ違背スルモノニ等シク、日本帝并合衆国プレシデントノ敵トスベシ、

右敬テ申上候、

南太平海地方(北カ)ニ於テ、

合衆国測量船之主頭ジョン・ロッヂイル

日本国執権へ

(大日本古文書(幕末外国関係文書)にて校訂)

二四二　魯艦乗組員書翰

高貴ノヨシフアントノウイチ呉志傑(ゴシケウイチ)勿知へ

船将布恬廷ニ随テ航海シ、今度甚シキ艱難ニ逢ヘリト、然レトモ、其地総テ親懇ノ取扱ニテ、実ニ謝スルニ暇ナキカ如シト云フ、汝等不幸ニシテ苦心ストイヘトモ、神恵ニ由テ恙ナキ事大慶ナリ、今時英吉利船所々ニ逍遙スルカ故ニ、帰途甚タ安カラス、ヨロシク其期ヲ待チ其模様ニ就テ心安ク帰国スルニシカス、因テ彼ノ親懇ヲ謝シ、常ニ将命ニ随テ信義ヲ旨トシ、無滞帰リ来ラン事ヲ欲ス、ウスレシヤル人名君モ是ヲ示セリ、予是等ノ事ヲ取扱フベキ任ニアラサレハ、唯汝ノ壮健ニシテ帰ルヲ待ツ、必ス疑心ヲ生スルナカレ、布恬廷ノ汝ニ深切ナルハ、予常ニ忘ル、事ナク是ヲ謝セリ、是ヲ以テ心ヲ安ンシ、其職ヲ守ルヲ要トス、親友モ其事情ヲ知テ是ヲ慰メリ、然レトモ祖母君ハ頻リニ心配シテ、汝ノ為メニ幸福壮健ナル事ヲ祈念セリ、

久シフ汝ヲ見ス、果シテ勇武ヲ保テルヤ、仮令海難ニテ帰途ヲ失フカ如シト雖トモ、必ス心気ヲ摧クナカレ、唯正真ニ其旨ヲ守リ、一隊ノ士ト共ニ天幸ノ至ルヲ待テ、事ノ成就ヲ祈ルベシ、

千八百五十五年五月九日安政二卯年四月六日

會薩原傑勿(エサルケウィス)都書ス

二四三　福井侯齊彬公ト営中ニ面晤（参考　昨夢紀事抄）

一七月朔日　公御登城ノ折、於(ルカ)営中薩州侯ノ御内話アリケレハ、今後琉球国ノ御所置ニツキテ御心得ノタメ、江戸近海ニ於テ、異船御取扱振ノ事ヲ

幕府ヘ御達ノ上、応接方ノ諸有司(ヘカ)ノ御尋問アリシニ、林・井両氏ヲ初当前ノ難儀ハ、一ニ交易、次テハ日本海測量ノ件ニテ、如何ニ手ヲ尽シテ御断リニ及ヒテモ、

(林大学頭・井戸石見守)

承引スヘキ勢ヒナラネハ、殆ント当惑セルノミナル故、只表立テ交易ト云ヘル名ヲ顕サスンテ、彼カ人用ノ物ハ、金銀ヲ以テ売渡サント云ヘル究策（窮）ニテ、公然タル返答ハナリカタキ由ヲ申セシ故、サラハ押テ品物ヲ持渡リテ交易セントイハヽ如何スル心掛ナルヤト、薩ノ（侯脱）問ハセ玉ヒケレハ、サル事トナリナンニハ、如何トモ致スベキ様ハ候ハスト御答ヘニ及ハレタリトソ、応接方ノ内伊澤作州ハ気概アル人ナリケレハ、作州一人ヲ御引留アツテ、汝ハ如何ニオモフト問ハセ玉ヒシニ、作州ヘ御任セニタニ候半ニハ、セメテ品川海ノ測量丈ケハ断リ延ヘ可申ト存候ヘト、巨細トナク一々伺トナリテハ、御評議決ン兼候間、所詮彼ヨリ次第ニ押強ク申（決ン兼日間取内、彼ヨリ）昨立候ヘハ、少ン許リツヽ御免シアル如キ次第故、一ツトンテ御手強ヨナル御仕向ケモナク、又御堅固ノ御備モナケレハ、生キタル心地ハ候ハス、測量ノ事モ船ノ通リ候半限リハ、水戸老公（水戸口統キ何方ニテモ）昨口統阿方部（阿）マテモ乗入ルトノ事候ヘハ、龍ノ口マテモ迫リ可申一大事ノ儀候ヘハ、一命ニカケテ対談ニ及ハスシテハ承伏スヘクモ候ハスト云ヘト、（云ヒテカ）別ニ声ヲヒソメテ、カノ彼理ハ容貌雄偉威望堂々トシテ、林・井（林大学頭・井戸石見守）党ノ敵手ニアラス、二氏モ彼ニ対シテハ、敬屈シテ口ヲ開ラキ難シヨシヲ申テ、歎息セル由ヲ物語アリシトソ、（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）

編者曰、当時幕吏中ニ、外国ノ事情ヲ知ル者甚タ寡シ、其中ニ少シク弁識シタル者ハ、川路左衛門尉（聖謨、勘定奉行）・岩瀬肥後守（忠震、目付）・筒井紀伊守（政憲、大目付）・伊澤美作守（政義、下田奉行）等ノ数名ニ過キス、各藩侯ニ於テモ、又甚タ寡ク、僅ニ肥前・福岡及ヒ我公等、僅々三四名ナリシト云フ、

二四四　和蘭蒸気船運用規則（安政元年）

写

和蘭国之蒸気船（上カ）者（ノ脱カ）当寅（安政元年）閏七月十日、於出島認之、

一長崎御奉行所ヨリ、御問合ニ相成候趣ヲ以テ御書面披見仕、篤ト勘考仕候処、蒸気船運用・大筒類用法製造、或ハ蒸気機関取扱方・船打建方等、何レモ執行行届様（候脱）教導致候ニハ、夫々事柄多ク有之事故、其教方致候人物数人無之候（テカ）ニハ、難届可有之候、

一此度之一件ニ就テハ、自分（身カ）官位之論ヨリハ、先事柄ヲ大切ト致候事ト考候、夫々之事柄ヲ伝教致シ候ニハ、夫々之事ニ熟練之輩ニ無之候テハ不相叶申、然ハ先士官之輩ニ無之候テハ不叶事哉ニ考候、

一水夫之仕業、是亦大切之事ニ有之、就テハ水夫ニ仕立候日本人之所ニテハ、初之程ハ諸道具取付離シノ工合、（取脱カ）帆ノ取付離シノ工合、所謂水夫ノ仕業ノ事ニテ加勢致（手カ）シ執行致候様有之度事ニ候、（漸々執行ヵ）

一伝授致候輩一ケ年何程位之アテカヒ高一存ニテ決シカタクシテ、考ルニ此度日本御奉行所ニテ、其機ニ適当致ス人物御召ニモ相成候思召ニ候得ハ、先何程位之金銭夫カ為ニ御備ヒニ相成、尚御出方之御都合、且又右教導ノ為メ罷出候者滞在中、何等之事ニ御免相成候ト（々カ）申儀ハ勿論、御取扱振リ等之儀承知仕度事ニ候、（何程位の給料に可有之哉の義、何分一存にて難決候、隨て相考候ニ）

一右申上候儀、御決断有之候上ハ、事ニ功者ニシテ、至極適当之人物ヲ選ミ罷出及教導候得ハ、即左之通ノ学術ニテ、（適当の人物逸々罷出ヵ）（候脱カ）

地理学　窮理学　星学　測量学

機関学　按針学　船打建方学　砲術学

右之外軍用武備ニ携候諸学、

一夫々之事柄ニ由テハ、適シ夫々之人物無之テハ不相叶（付カ）（逸々ヵ）儀ハ顕然之事ニ候、然レ共又稀ニハ、一人ニテ幾事モ伝教致候様之輩モ有之候、然ト雖モ、伝授ヲ受候輩ノ所ニテハ、其師タル者他事ニ繁多ナレハ、其一事ニ而已拘リ候儀不出来故、教方不充分事間々有之候、此故ニ、願ハクハ一事々々ニ、夫々熟練之輩ヨリ教導可然事ト考候儀ニ候、

一国民ノ幸福ヲ増シト欲セハ、先相応之執行人ヲ撰ミ、以テ事ノ教導ヲ旨ト致候儀、先第一之事ニ候、

一事ニ怠有之、其執行不充分時ハ、後日憂ルト雖トモ益ナキ事、

一往古ヨリノ録説ハ公之書也、斯ル理屈之事ハ、混分幾丁ニ欽記シ有之事ニ候、

一右一件伝授致候人物、其学識精功ニ於テ、歐羅巴ニテ（ハ脱カ）事足リ、今日ヲ安ク送リ候輩ニテ、数千里ヲ隔候海外ニ赴キ候ニ不及、然ルヲ言葉ハ勿論、作法振合等モ、（其言語ヵ）（振合挙ヵ）其本国トハ甚異ニ候処ニ至候ニ付、夫等之情合日本ニテ能御勘考有之度候、

一是等之所、日本御奉行所ニテ深ク御含、彼是之儀御決断ニ相成有御座度候、（候様脱カ）

一右様之儀ニ師ト成候程之人ハ、先其身之為メニ相成候事ニテモ無之テハ、遠海ヲ渡リ罷出申間敷哉ニ候、（罷出候志出申間敷哉に候ヵ）（弥極意ヵ）

一右之儀ニ付、尚又爰ニ極々先之処染筆仕度候ハ、右之（左カ）桁々能々相定、決着仕候様有之度候、

一師ニ相成、日本へ罷出候輩、滞在中「フレイヘイデン」上ハ王侯ヨリ下ハ賤民ニ至ル迄、人タル者タケノ自由自在ノ義、和蘭国語ニテフレイヘーデン、又ハフレイヘイトトイフ、通常上下ノ差別無之、今日ヲ送候心得之義子細有之間敷候、

一日本ニテ御取扱ノ御振合一件（体カ）御遇接振等、御入用モ相掛、罷出候者有之儀ニ付、弥以宜可有之候、（事ニ脱カ）

一アテカヒ御渡方之御振合、且又右師タル人物、如何之御都合ニテ、何方ニ滞留可仕哉、承知仕度候、

一事ノ執行益ヲ求メ候為、師トシ物ヲ習候ニ、何レノ道何レノ国ト雖モ、矢張同様之訳ニ有之候、

一右等之義ニ付、御問合之御答ニハ、先此分ニ御座候、

一右ニ付「右師として」乗渡候輩ノ衣食等之儀ニ付御問合之儀、勿論是ハ手賄之事ニ被存候、此儀ハ其輩之心得内之事ト被存候、

一右之外「ウエルフ」（船打建場）・「ドツク、ヘルリング」（各船修覆）或ハ掃除取繕ヒ場等之儀ハ、既ニ先日海勢船備之一件申述候頃申立候儀（通ノ脱カ）ニ候、尚爰ニ又々此事ヲ申述度候、

一海勢船備ヲ得ント欲セハ、軍船就中蒸気船ヲ不得ハ叶ハス、然ル時ハ先差当リ必要タル者「ウエルフ」ニ候、此物無之テハ船修理之手当且取立方、或ハ船底等之見改不出来道理ニ候、（等脱カ）

一右等ノ事ノ為「ドローグ、ドツク」（乾燥船修傷場）或ハ「スレープヘルリング」（摺送勾配ノ処ヲ云）ニアラサレハ、蒸気船ニヲヒテハ弥以其都合不出来事ニ候、

一右等之趣向取製候ニハ、若干之金銭費候ハ勿論之儀ニテ、数多之時日夫カ為ニ掛リ候事ニ候、

一右ノ趣向取営候為メ、入費金銭之高ハ、最前ヨリ見込出来不申、右等之儀取掛リ候以前ニ、先ツ其所之地面見定、夫々手数イタシ見不申以前ニハ、決着出来カタク候、

一其土（地脱カ）堅剛ニ有之候欤、又ハ柔弱ニ候欤、或ハ其所之地面ニ柱ヲ建仕切ヲ付候為ニ、其趣向ヲナシ候欤、其可否或ハ其所堀穿候ニ容易ナル欤、又ハ不然シテ其所岩石アル欤、利害アルニ於テ、其入費ニ拘ル訳ニテ、其工合ニ依リ、夫カ失カ為之失費様々異同可有之候、

一右等之儀取調候以前、其地面之所右等之事ニ携候巧者之人物ヲ、見分穿鑿セシメ候様可有之事ニ候、右見分穿鑿方之儀「ワートルスタート」（水ノアリサマナリ）ノ事ヲ心得候職分ノ者ノ任ニ有之候、右修復取営候前、則如此次第ニ有之候得ハ、右職分ノ任ニ当リ候者、其意趣ニ相成不申候テハ難出来訳ニ有之候、

一鏞筒・鉄筒価之義、〔脱カ〕御問答ニ相成候処、右価ノ義〔ニ〕何分至極難申上候、新物ニテ其目方ヲ以テ売買仕候儀ニ有之候、又時ニ依テハ、其品之〔有高〕有ル多少ニ因リ鏞筒・鉄筒其価ノ高下有之候事共御座候、

一阿蘭陀・エゲレス・フランス各国ノ海勢船備ヲ〔ニ於テ〕以テ、至極之軽筒之外ハ、都テ鉄筒相用候方ニ相成、今専ラ船用筒新規之者ハ都テ鉄筒ニ有之、殊更鉄ナレハ其価安ク有之候、

一御奉行所ヨリ御問合之廉々、先夫々御答仕候通ニ候、随テ尚又日本之御為ヲ考ヘ申述度儀有之、猶爰ニ染筆仕候、則左之通ニ御座候、

一日本御政府ニテ、大造之御入用相掛リ、御手当ニ相成候海勢船備之儀ニ付、先差当リ重大必用ト致ス事有之、即別義無之、阿蘭陀語識知有之度事ニ候、其故ハ右伝授ノ為態々乗渡師ト成候者ハ、日本語一切不心得者ト被存候、

一右伝授之者〔節カ〕、通詞ノ手ヲ経候様有之候テハ、誠ニ以テ面倒ニ有之候事ニ候、依テハ〔只其〕只今ノ通弁ノミノ為、無益ノ時刻ヲ費候様相成、愈以面倒之事ニ有之候、

一此末〔右師〕出仕タルノ輩、出島ニ罷在候迄之間ハ、余程之時日モ相隔候事ニ候、其輩罷在候上ニテハ、蘭語指南等之儀ハ、致直〔行カ〕スニ及ハス候様成行候共〔分カ〕可然ト存候、追テ〔々カ〕申述候通、夫々ノ〔夫々ノ職々、其職ニ夫〕職ニ携候書籍等モ持越、夫々指南モ可仕ニ、右書籍ヲ〔逸々日本語〕日本語ニ飜訳ト申事ニ相成候テハ、夫ノ為夥敷時日ヲ費シ、加之不弁利之事ニ可有之候、

一日本御奉行所ニテ、我申立之趣意ヲ可然ト被成候事ニ相成候儀ニ候得ハ、先最前ニ長崎表ニ学校ヲ御取立、海勢船備方ニ御仕込被成候旨ヲ思召、年若之輩、右学校ニ入塾有之、阿蘭陀語執行有之儀肝要ニ候、

一右之評論御取用ニ相成候上ハ、金銭ハ勿論事ヲナシ〔迄脱カ〕候時日モ無益ト相成候事無之、歐羅巴〔ヨリカ〕ニテモ伝受ノ為罷出候モノ教導之事ニ取掛リ候時、万端速ニ至極弁利能可有之、随テハ忽日本人事〔軍カ〕船ノ味ヲ覚ヘ、自己之国人ニテ進退自由ニ船運用、日本其自国ノ旗ヲ建、如何程ノ繁昌富貴、他ニ比類無之名誉云フベカラサルニ至リ可申ト被存候、

一世界地図ハ、ヨク見ルベキモノナリ、又往古ヨリノ説録等ヲ鑑〔衍カ〕見トスルニ習学スル所アリ、是別義ニ無之、殊ニ阿蘭陀〔国脱カ〕ハ些少之国也、然ト雖モ海勢船備有之〔テカ〕、海

方習熟ノ人物不少ヲ以テ、既ニ独立シ、カツ海外ニ夥敷大国等ヲ若干領シ候事ニ相成シ、〔由候カ〕

一亜細亜ノ東方ニ当テ日本ノ島多クアルハ、歐羅巴ノ西ニ当テエゲレスノ島多クアルカ如シ、然レハ今エゲレスカモノスルカ如ク、日本ニ於テ海勢船備ヲ御立、港渚防禦有之ハ、貿易富貴強盛タラン事ハ必然ノ至ニ候、

一日本御奉行所ニテ、是等之儀御熟考有御座度、必ス事ノ是迄不取掛ヲ遅キ抔ト御了簡違無之、今究竟之執行時タルヲ不然ト不心得抔有之候テハ、残念之儀ニ候間、夫等之向ニハ能々御〔御諭シ〕鑑ミ、必シモ今良時ヲ無益ニ送リ候人物無之様仕度候、

一日本ニテ政府是等之情合御熟考被成、追テ伝授之為罷出候者教導致シ候時、御便利之為、年若之人々阿蘭陀語稽古修行勉強有御座度所希申候、

船将次官

グ、フアビユス

日本通詞

阿蘭陀甲必丹

右之通私儀迄申出候ニ付、写奉入御覧候、

加比丹

ドンクル、キユルシユス

右之通和解差上申候、以上、

〔安政元年〕寅閏七月十二日

西　吉兵衛印

西　慶太郎印

楢林榮七郎印

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

二四五　和蘭国王汽船ヲ献ス及ヒ答礼品目ノ調

観光艦和蘭国王ヨリ献ラレシ後、右答礼トシテ我国産数品ヲ送ラル、

一鎧　壱領

一腹巻　同

一金作太刀　一振

一同断長刀　一振

一金屏風（狩野土佐画）　五双

一肥前焼大皿　一組

一蒔絵箪笥

其外漆器類

一大和錦　一台

一色縮緬　二台

一京人形・扇子類・小間物種々

二四六　松平和泉守並ニ松平伊賀守老中ヲ罷ム

八月四日、松平和泉守（乗全、西尾藩主）・松平伊賀守（忠優、上田藩主）二人急ニ老中ヲ罷ラル、是ヨリ先キ二人勢州ト異論アリ、陰ニ謀リテ勢州ヲ退ケントス、而シテ勢州勢望アリ、除クベカラズ、諸有司亦往々其為ス所ヲ悪ミ、二人ヲ除クベキノ議漸ク起ル松平伊賀守ハ奸黠ノ人ナリシト、当時阿部侯ノ声望ヲ嫉ミタルハ事実ナリシト、伊達公ノ語ラレシコトアリタリ是ニ於テ、勢州意ヲ決シテ之ヲ退ク前例老中ヲ罷ル自カラ順序アリ、今其順叙ヲ履マス俄然命ヲ発ス、営中悚然一ニ水戸前納言ニ依テ、諸政ヲ改メ紀綱ヲ張ラントス、七日令ヲ発ス、

○以下の文書は、本文第一四四号文書中の一八（安政二年八月七日付老中達）と同文により略す。

二四七　米国人ニ沿海測量ヲ許ス

八月十三日、墨人請フ所、沿海測量ノ事ヲ領シテ曰ク、

○以下の文書は、本文第五〇号文書の安政二年八月十三日付老中達と同文により略す。

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年
市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数三十六枚）」の記載あり〕

目録

藩暦ノ来由
伊集院苗代川村朝鮮人ノ来由概略
近衛信輔公御謫居事蹟概略
門葉家名人員
江戸年中御用金定額享保・元文頃ノ定額
江戸芝邸在勤人数
太守様御登城御行列
義久公九州御領知概略
徳川家御軍役賦
薩隅日三州及諸島人別改
札改年間
薩隅日諸芸
砲術書講究事件建言
蒸気船雛形製造事件建言
海岸砲台改築建言
蒸気船雛形製造事件建言
軍艦製造不完全云々建言
以上十七条

二四八　藩暦ノ来由

本藩国暦ヲ用ル来由ハ、忠久公御入国ノ時、遠国タルカ故、頼朝公ヨリ暦士一人附ケ遣サレ、世々国暦行ル、ト云フ、本田與一右衛門ハ、初島津圖書カ家臣ナリ、暦学ヲ以御城下士ニ仰付ラレ、其子武兵衛無役中通ヲユルサレ（君辺ニ伺公スルヲ云）、江戸天文生澁川氏ノ門人トナリタリ、磯永孫四郎初メ小根占郷士ナリ、本田氏カ弟子トナリ、後ニ江戸ニ出テ澁川氏ニ学フ事数年、寳暦甲戌改暦ノ時、京都ニ至リ、土御門家ノ門生トナリ、留ル

コト数年、新暦ノ法ヲ伝テ帰国ス（通昭録抄）

今度改暦ニ付、薩州国暦被相改、先規ノ通新国暦有之度、右付テハ、暦役磯永孫四郎兼テ門下ニ被附置候間、新暦令伝授候様、委細先達テ被示越候趣、則關東（幕府）ヘ相伺候処、先規ノ通可取計旨被仰出候条、新暦法用並右孫四郎ヘ伝授等ノ儀相達候、以上、

子閏十一月廿日宝暦六丙子年

土御門三位

孫四郎帰国ノ後、代々御城下士被仰付、則著述ノ新暦国中ヘ頒行ハル、

二四九　伊集院苗代川村朝鮮人ノ来由概略

苗代川朝鮮人ハ、慶長三年（戊戌）惟新公朝鮮国ヨリ御帰朝ノ時、朝鮮人多人数捕ヘラレ、串木野ヘ召置カル、今爰ヲ本壺屋トイフ、同八年（癸卯）ノ冬、苗代川ヘ移サレ、子孫繁栄シテ、今二百五十三家男女千二百七十余人ニ及ヘリ、他姓ヲ雑ヘス、他ヘ嫁セス、

光久公以来、御参勤御交代此所ヲ御宿ト定ラレ、御目通ニモ召出サレ、李・朴・伸・金ノ四家外城士格ニ仰付ラレ、村中取扱イタシ、其外茶碗・磁器等焼物細工ヲ業トス、隅州・鹿屋笠野原ニ近年苗代川ヨリ数十家移サレ、トモニ繁栄ス、

二五〇　近衛信輔公御謫居事蹟概略

一近衛信輔公坊津御左遷ノ時、高家筋ノ女ヲ御側ヘ召仕ハレタキヨシ御所望ニヨッテ、禰寝山城坊娘（山城坊嫡子武氏ノ元祖ナリ、武石見ト号ス、第二女ハ亀山又兵衛ニ嫁シ、次ハ此女ナリ）十八歳ニナリケルヲ、右近重長娘分ニシテ差上ル、文禄二年（癸巳）御帰洛ノ時、山城坊ヘ御カタミトシテ、御茶入一ツヲ給フ、此女ハ具セラレ、京都ニ於テ一女ヲ産ス、後御縁辺（禰寝伝ニハ西洞家ヘ嫁ス、武家伝ニハ九条家ヘ嫁スト記ス）御子ナシ、御老年剃髪セラレ、寶性院ト称ス、山城坊娘ハ浪人（禰寝家ニ大坂浪人ト記ス、武氏ハ尾張浪人ト記セリ）村田伊織（武家伝ニ新左衛門ト云）京都東山ヘ在リ、近衛家ニ折々立入ケルニ、男子ヲ生ス、後伊織苗字ヲ岡村ト改ム、此子長シテ新右衛門ト称ス、母子京ヲ去テ薩州ヘ下リ、亀山家ニ便リ、川邊ニ住ス、世ニ川邊士トナリ、其子孫今岡村次左衛門ト称ス、

一信輔公御帰洛ノ時、禰寝猪之助（山城坊次男）・野久尾久作・城之内治兵衛（一綱御跡ヨリ上レリト記ス）供奉ス、後ニ猪之助近衛家吹挙ヲ以、紀州和歌山及ヒ藝州廣島ヘ仕フ、久作ハ禁裏ヘ

仕へ、一之宮修理亮ト改ム、一之宮ハ敕号ナリトイフ、老後薩州ヘ帰リ参河守ト改ム、修理亮ノ口宣世々家蔵ス通昭録

二五一　門葉家名人員

御家老与九十人

内

四　人　御一門

四十人　一所持・一所持格

卅八人　寄　合

五　人　寄合並

三　人　御役付其身計（在役中其一身ヘ資格ヲ与フ）

右ノ人名及ヒ知行高左ノ通、

御一門四家

大隅国姶良郡重富郷　島津周防忠教

高壱万四千六百九拾四石二斗四升八合七夕三才

大隅国姶良郡加治木郷　島津兵庫久長

高壱万九千三百三拾八石二斗三升五合七夕五才

大隅国肝付郡垂水郷　島津讃岐貴敦

高壱万五千四百二拾壱石四斗九升六夕九才

薩摩国指宿郡今和泉郷　島津安藝忠剛

高壱万三千八百〇三石三斗五升七合三夕八才

以上四家御一門家ト通唱ス、

一所持

薩摩国日置郡日置郷　島津左衛門久徴

高六千五百六拾四石〇七升五合四夕六才

大隅国肝付郡花岡郷　島津若狭忠敬

高

無所領　川上筑後久封

高

無所領　島津大蔵久隆

高

薩摩国伊佐郡宮城　島津圖書久治

高壱万五千七百五十五石五斗七升五合九夕三才

薩摩国（伊佐）郡黒木郷　島津豊後久寶

高弐千六百九拾壱石弐斗壱升〇五夕二才

薩摩国日置郡永吉郷　島津主殿久儔

高三千五百〇六石九斗八升〇九夕五才

薩摩国給黎郡知覧郷　島津伯耆久福

高六千九百三十四石三斗弐升三合九夕

薩摩国〔伊佐〕郡佐志郷　島津壬生久清

高弐千八百弐拾九石四斗八升七合三夕壱才

大隅国〔姶羅〕郡帖佐郷小松原村　島津左膳久元

高

大隅国〔桑原〕郡踊郷三躰堂村　新納波門久世

高

薩摩国〔伊佐〕郡繭牟田郷　樺山相馬久要

高千五百八十九石五斗一升六夕三才

日向国諸縣郡都城　島津出雲久靜

高

無所領　桂　小吉郎久武

高

無所領　島津賴母久武

高

無所領　島津求馬久敬

高

薩摩国川邊郡鹿籠郷　喜入攝津久通

高四千弐百〇三石三斗七升四合九夕

薩摩国日置郡伊集院郷石谷村　町田助太郎久長

高九百九十八石九斗弐升五合七夕弐才

無所領　島津帶刀久直

高

日向国諸縣郡恒吉郷坂本村　島津内記久雄

高

薩摩国〔薩摩〕郡平佐郷　北郷作左衛門久視

高八千百三拾七石五斗六合六夕

大隅国肝付郡新城郷　島津主計久寛

高千六百五十四石壱斗九升八合六夕弐才

無所領　島津矢柄久敬

高

無所領　大野多宮久甫

高

無所領　吉利仲久包

高

無所領　本田内膳久

高

大隅国桑原郡踊郷中津川村　伊集院伊膳久文

高

大隅国熊毛郡種子島　種子島鶴袈裟久尚

高壱万千百六拾石八升二合
大隅国肝付郡市成郷　島津石見久浮
高三千〇四拾四石二斗五升壱合二夕八才
無所領　頴娃織部久武
高
薩摩国日置郡吉利郷　小松相馬久猷（清カ）
高三千〇拾五石三斗五升六合四夕
薩摩国薩摩郡入來郷　入來院恰公寛
高四千八百拾五石四斗八升八合二夕九才
大隅国桑原郡踊郷萬膳村　比志島靜馬範惟
高
薩摩国指宿郡喜入郷　肝付兵部兼兩
高五千三百七拾四石五斗壱合六夕壱才
無所領
高
薩摩国川邊郡川邊郷神殿村　新納内匠久
高
無所領　菱刈李（李カ）之助隆徴
高
無所領　諏訪數馬武盛

高
無所領　川田將監佐武
高
無所領　畠山主計義制（邦カ）
高
薩摩国（伊佐）郡大口郷木ノ内（氏カ）村　新納駿河久仰
高
大隅国肝付郡大姶良郷南村　鎌田圖書正純
高千六百〇五石三斗七升
日向国諸縣郡末吉郷岩川村　伊勢雅樂貞章
高四千〇弐拾四石七斗八升七合八夕四才
無所領　市田隼人義近
高
以上四十一家ヲ大身分又ハ一所持ト唱フ、
外ニ寄合五十家、
寄合並拾家、

二五二　江戸年中御用金定額享保・元文頃ノ定額

六千両　御守殿
五千両　御付之面々御合力金

千　両　　御守殿女中五菜銀毎月五日目宛
九百両　　櫻田御渡方
外米二百石
千　両　　三田新奥
六百両　　三田大奥
四万七千五拾両　詰中御賦摸合方帖佐与
二万両　　不時御払金一月百貫目廻
一万九千両　　二季残金払
合拾万五百五拾両
銀〃六千三十三貫目

二五三　江戸芝邸在勤人数

惣計上下千六百九十人
年中飯米三千四十二石
一月二百五十三石五斗
一日八石四斗五升
以上記ス処ノ在邸上下人員ハ、弘化ノ初ヨリ、嘉永ノ中頃マテノ定数ナリ、米穀ハ鹿兒島ヨリ運輸セリ、之ヲ大廻リ船ト唱ヘ、春秋二回ノ定規ナリキ、

二五四　太守様御登城御行列

御跡乗二人・供十八人
御駕籠廻拾一人・供二十人
内四人中通御目付
御先供十三人・供十三人
御駕籠附二人
御挾箱持六人
御駕籠者十四人
御竪傘持二人
御草履取二人
御草履持一人
御供走番二人
御手道具持八人
御中門四人
御供挾箱持五人
御供鎧持三人
引馬中間四人
御厩人足五人　　両掛水籠飼料持
御替鞘持壱人
御桐油籠持二人

合羽籠持二十六人
御茶弁当持二人
御書院仕坊主一人
又者押八人
合百七十五人
這ノ鹵簿人員ハ、天明度ノ定数ナリ、其後幕府ノ令ニ依リ減省シ、近代ハ稍半数トナレリ、

二五五　義久公九州御領知概略

天正十一年九州之太守ト称ス、
薩摩国二十八万三千四百八十八石七斗
大隅国十七万五千六十七石二斗
日向国十二万百八十七石二斗
肥後国三十四万八千二百二十石
筑後国三十二万五千六百九十五石
筑前国二十一万六千三百五十石
豐後国四十一万八千三百十三石
豐後国十四万石
肥前国三十万九千九百三十五石
合高弐百三拾三万七千三百五拾六石壱斗

右旧来記ス処ノ略ナリ、

二五六　徳川家御軍役賦

高千斛
二十三人
鎧二筋
弓一張
鉄砲一挺
高一万石
騎馬十騎
旗五本
鎧三十筋
弓十張
鉄砲二十挺
高十万石
騎馬百七十騎
旗二十本
弓六十張
鎧百七十筋
鉄砲三百五挺

右之通、慶長廿年被仰出云々、

二五七　薩隅日三州及諸島人別改

一元文二巳年改御領内人数
　男女八拾一万七千六百三十五人
一延享二丑年改
　男女八拾四万三千八百八人
一寶暦三酉年改
　男女八拾七万二千八十三人
一寶暦十一巳年改
　男女八拾七万九千五百三十九人
一明和九辰年改
　男女八拾八万三千九百六十九人
一天明六午年改
　男女八拾四万二千四百六人
一寛政十二申年改
　男女八拾五万三千五百九十一人
以上男女ノ人員ハ調査精密ナラス、此数ニ超過シ、凡ソ百万ニ余レリト云フ、

二五八　札改年間

一寛永十一年始同十六年済
一正保四亥九年目
一承應二巳七年目
一萬治二亥七年目
一寛文五巳七年目
一寛文十二子八年目
一延寶五巳六年目
一貞享元子八年目
一元祿四未八年目
一元祿十一寅八年目
一寶永三戌九年目
一正德三巳八年目
一享保六丑九年目
一享保十四酉九年目
一元文二巳九年目
一延享二丑九年目
一宝暦三酉九年目
一宝暦十一巳九年目
一安永元辰十二年目

一天明六午十五年目
一寛政十二申十五年目
一文化十二亥十六年目
一文政七申十年目
一天保二卯八年目
一天保九戌八年目
一弘化二巳八年目
一嘉永五子八年目
一安政六未八年目

如此七ケ年毎ニ調査ヲナセリ、今ニシテハ、戸口調ベノ如キモノニシテ、生死出入ヲ調査スルコトナリキ、○名唱ノ如ク手札ナル者アリ、一人毎ニ一枚ヲ付シ、宗旨・族籍・生年月日ヲ記シ、而シテ改奉行所及改役員二名ノ印ヲ捺シ付与シ、各戸ニ蔵セシメタリ、

二五九　薩隅日諸芸

一弓法　島弦草
一鉄炮　稲田流　井上流
一鎗術　鏡智流　天流　雲平流　図田流
一長刀　竹ノ内流　柳生流　方流
一石火矢　真田流　赤井流　荻野流　天山流　南蛮流　道与流
一剣術　方真流　天流　大坪流　八条流　神当流　鎌倉流　〔示カ〕閑現流
一馬術
一軍術　水野流　北条流　常陸流　山鹿流　信玄流　茂信流　南木流
一軍馬　小笠原流　八岩戸流
一茶道千家　小笠原流
一軍礼　矢鳥谷流
一遠火
一番道　河野流　相阿弥流　建部流　飛鳥井流
一蹴鞠　孫子流
一火術　唐流
一地理
一和琴
一算用土御門家
一料理方　大草流　四条流
一曲節弓
一天文　土御門流　御家流　定家流　青蓮院
一筆法　近衛流　滝本流
一手書　観世　金春　金剛　宝生
一謡

一書礼　賀我
一将棋・双六
一笛・鼓
一生華　池之坊
一立華　池之坊
一棒手　新塚家
一捕手　山内流（雷カ）雲舟流　土佐流
一絵書　狩野流
一組打　場弓　盆石
一兵道　鎌倉流　武田流　柳流
一西道　半打　大路　金
一方　小笠原　吉川（故実ト言）　細川　今川　大流　伊勢
一有職　高倉流　山科流
一陰陽道御門家
一相法周易占
一和歌　二条家　冷泉家
一神道　宗源　習金
一僧学　古
一仏法禅学
具足着　結帯　佩貫　被観衣　自草　眼股衣　胄　掛レ脇威　足袋　繋　就草鞋　旋唯　輪帯　着レ靡当　両刀　纏　賢表　顧巻　蒙堂　負レ背旗ヲ　戴頭盔

二六〇　砲術書講究事件建言

砲術書籍方ノ儀ハ、去ル酉年新ニ被召建、掛人数ノ儀ハ、砲術稽古扶持被成下候人数ノ内ヨリ心掛宜トノ被掛置砲術書写方并諸差引等相勤候、就テハ砲術ハ勿論書籍ノ意味合会得イタシ、熟達ノ上ハ、西洋ノ兵書ハ素ヨリ、和漢古今ノ兵籍ヲモ跡習仕、非常ノ節抜群御用立候人才探出不仕候テ難相成役場ニ御座候処、当分通三ケ月ツヽ繰廻シニ勤方ニテハ、別テ不連続ニ有之、適々出精イタシ候テモ無程勤済ニ相成候、右テハ御用立候人々出不仕訳御座候、依之此後ハ三ケ月勤ノ儀ハ被相除、諸座書役小役人同様ノ向ヲ以被　仰付候ハ、往々御用立候モノ輩出可仕候、且又書籍方主殿役ノ儀モ、小役人同様ノ向ヲ以定勤被　仰付候ハ、皆共難有奉存、一涯競立精勤仕、御用向モ連続仕、御用立候人才探出可仕哉（トカ）ノ奉存候、

一勤方ノ儀ハ、初発被召建候節ヨリ、四時出勤イタシ、七時ニ退出可致旨被　仰渡置候、然処相勤候人数イツレモ壮年ノモノ共テ、砲術ハ素ヨリ外芸術・文武共出

精修行不仕候テ不叶年輩ノモノ共御座候得ハ、外芸術ナラ出精調急候ニ付、別テ肝落ニ罷成、殊ニ遠方ヨリ出勤仕候モノハ、猶更ノ事御座候間、以来ハ諸座同様、四時出勤八ツ時退出被　仰付度奉存候、尤六組式日ノ儀ハ、此以前ニハ八時初リ被　仰付候得共、今般四時初被　仰付ニ付、稽古相済候得ハ、御用差支ノ儀モ無御座候、乍然夏分ニハ朝稽古被　仰付候ニ付、未明出勤仕候、其外御用取込ノ節ハ、未明ヨリ夜入迄モ相勤儀モ御座候ニ付、平日ノ儀ハ右通被　仰付度奉存候、

右ハ初発ヨリ被定置候儀ニテ、今更御改革ノ儀如何敷御座候得共、今般分テ御手ヲ被召付候儀候間、右ノ趣私共ヨリ内々奉言上候、ヲノツカラ成田正右衛門ヨリ御軍役サヘ相付申出候賦御座候得共、此等ノ趣ハ取揚無之候ニ付、窺候節申出候趣ト御比左ノ端トモ被存候間、奉言上置候、以上、

安政二年乙卯四月廿九日　　磯永孫四郎周徳

市來正右衛門広貫

右ノ通、飛脚便ヨリ江戸ヘ上申候事、

二六一　蒸気船雛形製造事件建言

蒸気船雛形御造建ノ儀ニ付テハ、追々御届奉申上候通、不才ノ私是迄心力ヲ尽シ、戎器ノ諸部取直シ、乗試候得共、今以十分ノ向ニ無之、依之原書之算法ニ基キ寸法旁相紛シ候処、別テ相違ノ廉多ク、尤初発割合仕候節ハ、井上庄太郎・宇宿彦左衛門（右カ）両人ニテ寸法等相定候、

御発駕ノ時分ハ、鋳製ノ品ハ都テ出来上リ、御覧モ被遊候通ノ事御座候、今更割合不宜ト申候ハ、両人ニ対シ如何ニモ気ノ毒御座候得共、当分通ノ不工合ニテハ兎角無致方御座候得共、成行不奉申上候テハ不相済訳ニ御座候、尤算法ニ合ヒ不申儀ニ御座候間、何程力ヲ尽シ、少々ノ取直シ候テモ迚モ直リ兼可申、又原書ノ法ニ則リ、右体ヨリ直シ候得ハ、都テ改製ニ相成、御船ヲ初械器ノ大体皆不用ニ相成、御用途モ不少ノミナラス、御成就モ多日ニ相罹リ可申、依之無致方少々ツヽ取直シ相試候儀ニ御座候、今通ノ儀ニテハ、何程力ヲ尽シ候テモ、御用立候程無覚束奉存候、私事モ不調法ノ身トシテ、不容易重大ノ御用掛被　仰付候、冥加至極奉存、昼夜無他事研究仕候得共、其詮全無御座候、実ニ生涯ノ遺恨此事ニ御座候、殊ニ

皇国御開業ノ御事ニテ、他藩ノ御響ニモ相成、
公辺ヨリハ御誂モ有之、無此上御重キ訳御座候間、細
工人ヲモ鞭励仕候得共、今通ノ仕掛ニテハ、労シテ無
功ト申モノニ可有御座候間、折田八郎ノ所抔ニハ、先
此涯御取止ノ方奉伺吟味ニテ、既ニ先日私ヘモ其段相
談仕候、殊ニ当時柄御入用モ多ク候ニ付、御取止相成
度申出候、乍然私ニハ一円承引難仕段申聞置候、其成
行ハ、当時非常ノ御用途有之、御倹約中ノ事ニハ御座
候得共、不容易尊慮ヲ以御創造為被　仰出置候儀ニテ、
御達シモ無之ニ下ヨリ御取止可奉伺ハ甚恐入訳、殊ニ
御入価ト申テモ、細工人共ノ日用銭御払迄ノ儀ニテ、
僅拾壱人計ノ日用銭被相払候ニ、御所帯ノ御痛損可相
成訳ニモ無之、当時柄ノ習風ハ、聊ノ御出シ方ニモ減
シ候得ハ、都合向宜ト考候訳モ可有之候得共、心アル
モノハ歎息可仕候、且ハ中途ニシテ廃シ候ト申セハ、
人心ノ興廃ニモ相拘リ可申、尤蒸気船製造ノ儀ハ、中
々利工発明ニテハ巧ヲ為シ得難ク、兎角経験ヲ尽シ不
申候テハ難相成候半、於西洋モ発明シテヨリ数拾年ノ
久ヲ経テ、漸ク用トナルニ至リ候儀モ相見得、況日本
ニテハ纔両年ノ事ニテ、充分ノ儀ハ無覚束御座候、依
之何卒御気長ク御手ヲ被召付被下度奉願上候、尤折田
抔ヨリ御引取奉申上候テモ、乍恐御引取ノ儀ハ不被仰
付様奉存候、此上ハ細工人共モ、原書ノ理合篤ト会得
為仕、其上当分械器ハ御改造被仰出規則ノ通、二座ノ
械器法ニ基製造方被
仰付被下度奉存候、尤当分ノ仕掛ハ至テ古法ノモノニ
テ、西洋ノ詞ニモ陸械ト相唱ヘ、船用ニハ不用立訳モ
相見ヘ居候ハ、、何卒御改製被
仰付度奉存候、私ニモ不才ノ身トシテ、無他事研究仕
候得共、右通ノ成行ニテ甚残念奉存候、尤当分ノ仕掛
法規ニ違ヒ候段、井上・宇宿方ヘ申出候儀、別テ嫌疑
ノ子細有之候ニ付、此段被聞召分被下候様奉願上候、
以上、

但当分ノ御入目ハ僅計ノ儀ニテ、細工人共拾壱人ヘ
被成下候御出方迄ニ御座候、一日ノ御払方七貫三
百文程御座候間、是ヲ三拾日ニ仕候テモ、聊ノ訳
ニ御座候、当今非常ノ砌ニテ、少々ノ事ニテモ御
難渋ノ御事ニハ御座候得共、格別ノ利器御国用ノ
御品ニ御座候半、少々ノ御出方被為圧（厭カ）テ御猶予御
座候テハ、時勢ヲ以勘考仕候ヘハ、御猶予難相成

世振ニ御座候、御入用ノ時ニ相成、直ニ出来候訳モ不相叶品ニ御座候間、事静ノ砌ニ御製造被成立様御専一ノ御事ト奉存候、当今日本国中何方ニテモ、昨今年ノ災殃ニテ、武備ノ御設モ過半ハ御猶予ニ御座候半ト、此御方ニハ、此時勢ニ専御手ヲ被為付度御事ト奉存候、夫迚モ御用途立敷ニテハ、無致方御座候得共、又非常ノ世ニハ非常ノ御所置被　仰出可然儀ト奉存候、右ハ差当ルノ儀ニハ、兼テ申上候通リ、紅華・海人草・硫黄此三品ノ産物ニテモ、一ケ年ニ壱万両程ノ余計ハ無相違可有御座候間、一旦御物御計被　仰出候テ、右ノ御益計ヲ以蒸気船御造立相成候テモ、免角御引足リニ可相成哉ト奉存候、右ノ三品ハ、町人共一家ノ経営ニ過分ノ利ヲ得候テ、御国家ノ御為ヲ仕候儀ハ少モ無御座候、此段モ乍序奉言上候、

安政二年乙卯十一月廿九日　市來正右衛門上

二六二　海岸砲台改築建言

海岸守衛ノ儀ハ、追々分テ御世話被為在、砲台御築造・軍艦御製造等、何レモ御厳重御手当相成候事ニハ御座候得共、先般山川ヘ亜米利加船渡来ノ砌、私ニモ御用ノ儀有之出張、船ヘモ乗入見聞仕候処、異船ノ卸碇場陸ヨリ三拾丁余モ相備リ候ニ付、砲台ヨリ放発仕候テモ、三拾封度以上、八拾封度砲ニテモ弾丸届候丈ケニ無之、仮令敵船ニ的中イタシ候テモ、格別損害ニハ相成申間敷哉、依之種々勘考仕候ニ、兎角迄打（近カ）ノ手段専要ニ御座候間、軽舸ヲ以押寄、敵船ノ胴腹水際ノ辺ヲ打抜候儀、亦勝ト奉存候、右ニ付四五間程ノ軽舸余多御製造相成、拾八封度・弐十四封度・三拾封度位ノ大砲壱門ツヽ相備、衛士七八人又ハ拾人程モ無（ママ）居衛士・舟卒ノ（ママ）ヲモ相兼サセ、進退周旋自在ニ仕掛、山川・佐多・大小ノ根占郷、其外ノ沿海ノ郷々ヘ被渡置、非常ノ時ハ直ニ乗出シ警衛イタシ候様、凡七八拾艘モ此涯出来相成度、尤敵船ニ押寄候ニハ、敵ノ弾丸（マ）　（マ）相成候程近ク漕寄放発仕、且ハ追ヒ打等ハ法ハ第一御国ノ士風ニモ相叶ヒ、別テ御利用ト奉存候、尤衛士ノ儀ハ、兼テ修練被　仰付、水練ノ業モ相兼サセ申度、既ニ板倉伊豫守殿敵議ニモ、多ノ小舟ヲ以相防候赴モ有之、西洋ニヲヒテモ専相用候由相見得申候、肥前佐賀（ママ）守様ニモ、長崎御警衛ニ余多ノ小

舟ヲ以、異船ヨリ三四町程ノ処ヲ日夜相守居候、右ニハ弐拾四封度砲一門ト御備有之、平常ハ却テ覆大砲等ハ一切見掛不申候、昨年ノ夏、暎咭利ノ軍艦八艘渡来ノ節ハ、四拾艘被相備候、右ノ番舟ニハ、夷人共ニモ気味悪敷考候由御座候、依之此涯先七八拾艘モ御出来相成度御儀ト奉存候、御製造付テハ、当時大砲船御出来ノ余材ヲ以御造立有之候ハ、御入価モ相少ク、旁御弁利ニ相成可申、尤平日ハ近郷ノ運送船ニモ被相用候ハ、何レモ御利用ト奉存候、此段在崎中ヨリ工夫仕罷在候処、右次第山川ニヲヒテ、猶又御利用可有之ト奉存候間、此段早々奉言上候、以上、

安政二年乙卯四月廿六日　　市來正右衛門上

二六三　蒸気船雛形製造事件建言

蒸気船雛形御製造ノ儀ハ、和漢未曽有之御創業ニテ、実以不容易御事御座候処、愚昧痴頓ノ私式ヘ御用掛被仰付、誠ニ以冥加ノ至難有奉存、微力ヲ尽シ夙夜勉強相勤、是非御成行（効）相成候様奉存罷在候儀ニ御座候、尤万端江夏十郎申談候様分テ蒙

御内命候ニ付、事実大小示談仕御用向取扱仕候、然処今般御小納戸早川務御内用ノ儀有之被差下候ニ付、先月十三日ノ便ヨリ三原藤五郎ヘ申越候赴ハ、十郎事蒸気船方ヘ携リ御船奉行ト不睦ニ有之段被聞召上、事情肥後七左衛門ヘ御糺相成候処、七左衛門申出候赴ニ、窮士ノモノ御救助ト申、士分ノモノヲ金物師ノ場ニ多人数召仕候儀、並細工人共ヲ取押候儀不致自侭ニ召置トノ赴有之候ニ付、藤五郎ヨリ私并中原猶介召呼、右ノ書状一見為致候テ、十郎ヘモ右ノ書状為見置候様、尤藤五郎ニモ蒸気船方御用ハ承候事ニ付、私共ニモ右ノ成行一向存シ不申儀ニ御座候間、其通ノ事ニテ、十郎別テ迷惑ナル儀ト申事ニ御座候、就テ右様取沙汰有之儀ニ付、存慮ノ赴左ニ申上候、

一私并中原ニハ、度々御船奉行共ト討論ニヲヨヒ候儀ハ多ク有之候、十郎ニハ左様ノ儀毛頭無御座候、尤御造立場ニサヘ差越候儀ハ、ヲイ々々反射炉方ヘ出勤ノ序ニ両度位モ拝見ニ差越候儀ハ、決テ可有之御座候、且又窮士ノモノ御救助ト申召仕候儀ハ、甚間違ノ儀ニ御座候、去冬御小姓組ノモノ両人鋳製方ヘ召仕候例ヲ以、召仕呉候様七左衛門ヨリ無和理相談候訳有之、折田八郎兵衛其外ニモ相談イタシ、今ニ召仕候、右ノ人々ハ

全体金物ニ細工人ニテ、御用立候モノニ御座候、右外ニ御小姓組ヨリ罷出候モノハ、一人モ無御座候、多ク右ノ儀ヲ転倒イタシ申置候儀ニハ、相違無御座候、右ハ七左衛門ヨリ取計ノ儀ニテ、外々ヨリ為申訳ニハ決テ無御座候、今一往被相糺被下度奉存候、又細工人ヲ取押候儀不仕トノ赴ハ、元来私共ノ心得ハ天下ノ御創業ニテ、実ニ不軽細工モノニ御座候得ハ、是迄ノ製作物トハ大ニ相違候、第一工夫ヲイタシ不申候テハ、聢ト製作法モ不相知事ニ御座候間、御作事方御細工所抔同様所置ニテハ相済不申候ニ付、至極愛憐仕、私共ニモ同シク工夫イタシ、相供ニ勉強仕度相含、

御赴意（趣）通精々成巧相成候様申喩シ候儀ニ御座候処、御船奉行抔ニハヤトモスレハ厳酷ノ所置相初、御作事方抔同様ノ向ハ取計仕候、左候テハ迚モ御創業見事ニ成就無覚束御座候間、右体ノ場合ニテ討論ニモヲヨヒ、既ニ先達テハ曾零帝（ペートル帝）船工（露浦海軍史）トナリテ、微服シテ相励ミ候趣抔引出シ申聞、議論ニモヲヨヒ候儀有之、且ハ初修疑ヲ生シ、細工人共窃ヲイタシ候抔申掛ニ付、軽キコト人共トハ乍申、一統合点不仕候、右次第ノ趣ヲ補増イタシ申立候半カト奉存候、此等ノ趣ハ爰元ニテ御糺シ被下候得ハ、世人モ多分見聞ノ儀モ可有御座候間、御糺シ被下候テ、善非御分別被成候様奉願上候、

一先達テ井上庄太郎ヨリ江夏十郎ヘ申遣趣ハ、十郎事砲術館ヘ毎々罷出御用向取扱、夫故砲術方・鋳製方両端ニ分レ争論差起リ候由、依之此涯被携様被仰付トノ赴内々申遣候、尤三原藤五郎ヘモ同様申越候由、右ノ儀モ甚迷惑ナル事ニ御座候、十郎砲術館抔ヘ罷出候様被仰付置候訳モ無之、拝見ニサヘ此比罷出儀ハ見聞不仕候、然リ浮的（然ルニカ）打方ノ儀ニ付、

御発駕前十郎并私ヘ被仰付置候ニ付、私ニハ在崎跡ニテ其段三原藤五郎ヘ談合仕、櫻島并祗園台場等ニテ打方有之候、十郎ニモ初発被仰付候事故拝見ニ罷出候様、藤五郎ヨリ申聞罷出候由、其節何ソ指図ケ間敷儀共ニテモ為有之儀モ無御座候由、其成行ハ藤五郎ニモ克存知ノ段、私共ヘモ申聞候、尤成田正右衛門父子共ニ相知ノ儀ニ御座候由、右体跡願（形カ）モ無之儀、誰人ノ申立ニテ御聞通御座候哉、誠ニ可恐可憂ノ次第ト存候、ケ様ノ儀申上候人御身辺ヘ被召仕候テハ、実ニ御国家ノ一大事ト存候間、乍恐篤ト　御心ヲ被為用被下度奉願上候、古ヨリ讒奏ノ人

程国家ノ禍害ヲ為シ候ニハ無御座候間、甚驚却仕(愕カ)罷在候、尤十郎儀ニ付テハ、決テ右次第ノ儀ハ無御座候間、御糺ノ上何卒　御疑ヲ被晴被下度、将又蒸気船御造建一件ニテモ、来年御下国被為遊候上、当分通ノ取扱向於不宜ハ、其折御改革被　仰付、其内ハ当分通被召置被下度奉願上候、

右ハ甚不敬ノ至奉存候得共、言上不仕候テハ不叶儀ト奉存、不顧憚奉申上候、恐惶頓首、

安政二年乙卯五月十八日　　市來正右衛門(仝上)

二六四　軍艦製造不完全云々建言

乍恐奉言上候

当春御造立相成候軍艦四艘ノ内三艘ハ、江戸表ヘ御差廻相成筈ニテ至極御取急ニテ、船卸ノ上山川又ハ日州外ノ浦辺迄細工人乗リ付、差越御成就相成リ　乗試帆前等ノ儀ハ勿論、御製造モ充分届兼候儀モ有之由、右ニ付テハ甚残念ノ事ニ御座候、掛御船奉行并田原甚助(直カ)モ至テ慷慨仕居候、然処江戸ヘ乗廻シノ中途ニテ、帆檣等相損シ候由、畢竟製造精密ナラサル訳ニ御座候半、既往ノ儀ハ無致方御座候間、蒸気船ノ儀ハ未御央ニ御座候間、至極精微ニ吟味ヲ尽シ候様被　仰付、惣裁ノ人被相撰度奉存候、尤細工人ニモ、是迄ハ御船奉行計ニテ、賄賂・進物ノ召入候由、ケ様ノ創業ニ右様ノ所置甚不届ノイタシ方御座候、尤蒸気船ノ儀ニ付テハ、追々御手厚ク被　仰出、就中向井新兵衛ヲ以分テノ御内沙汰被為在候由内々伝承仕候、依之市來正右衛門ヲ初細工人共ニモ頭立候モノ(ママ)日々山田正太郎方ヘ差越、昼夜蘭書取調ヘ方仕候由、親敷見聞モ仕候、今成候テハ不日ニ其要目丈ハ跡究仕向ニテ、此儀ニ付テハ傍ヨリ見聞仕候ニモ、別テ精密行届候向御座候間、跡御懸念ハ被為

在間敷奉存候、就テハ外掛役々和熟不仕候テハ不相済、然ニ御船奉行等ハ、専権威ヲ以、賄賂ノ厚薄ニテ一体ノ所置イタシ候ニ付、当分ノ向ニテハ、誠ニ気ノ毒ナル儀ト奉存候、勿論風俗ニモ相拘訳御座候間乍恐申上候、折田八郎兵衛事ハ人品モ

御察度可被為在、下目付山野田嘉兵衛此両人ハ、厚ク御吟味有御座度奉存候、右通取シラヘ方ニ不日ニ相済候上ハ決テ奉窺候間、其時分ハ正右衛門ヘ御委任被

仰付度奉存候、当分御船奉行中ノ人物吟味仕候、堀四郎

左衛門、下目付ニハ岩切八兵衛ト奉存候、四郎左衛門儀ハ篤実ニテ、折田如キノモノニハ究テ無御座候、当分正右衛門取シラベ方仕候儀ヲ見聞仕候ニ、中々不容易儀ニテ、毫髪ノ程モ悉ク相糺シ、此度ハ是非成行ヲ遂度夙夜研究仕候、成就不仕候テハ死シテモ黄泉ニ目ヲ閉シ申間敷ト兼々申居候、尤見聞役ニハ清水源兵衛被掛置度奉存候、此等ノ赴見聞ノ成行ニ御座候間、役職ニモ無之身分ヲモ忘却仕、御国家専要ノ御事ト奉存、不憚恐奉言上候、以上、

安政二年乙卯五月廿九日　　磯永孫四郎周德

右ノ通、飛脚便ヨリ清水良正取次ヲ以言上被致候段、跡以被申聞候ニ付、草稿借用イタシ写置モノ也、

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年
市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五十五枚）」の記載あり〕

目録

汽船運用伝習鑑（艦）将意見
和蘭国王汽船献上事実
長崎製鉄（所脱カ）創初
汽船献上ノ手続甲比丹上申書
幕府海軍創立及ヒ規程
海軍伝習令
蒸気船伝習之儀上申書
軍艦昇平丸長崎ニ航ス
蒸気伝習生給金等和蘭甲比丹上申書
軍艦昇平丸長崎港ニ入ル
海軍伝習所ヲ長崎ニ設ク
諸藩伝習生人名
沿海測量ヲ許ス
以上十三条

二六五　汽船運用伝習艦将意見〔海軍歴史抄〕

和蘭蒸気軍船（艦カ）ヘデー船将グ、フアビユスヨリ教授方之義、甲比丹ヲ以テ差出候書翰和解

一昨年国王之蒸気船スームビンク（献上ノ後観光丸ト名ク）、三ケ月之間長崎港ヘ滞船イタシ候砌、帝国御奉行所並諸国ヨリ為稽古被差遣候人々、習熟イタシ候ト申義、何共難申上有之候、

一昨年之教示ハ、全大概ヲ示候而已ニテ、好事家ニ数多之珍物ヲ明解イタシ候様之義ニ有之候

一当節ニテハ、日本御奉行所ニ於テ、実ニ海軍御取立被成度思召、既ニ右御発起ニ相成、最早武器備付有之候蒸気軍艦御入手相成申候、依之日本国右船ヲ以テ、御利益被得度候ハヽ、教授方之義誠実ニ御熟考有之度候、

一前文申上候通、昨年教示ハ唯大概ヲ示候義ニ有之候間、此節ニ至候テハ、急度順序ヲ立教示被請度候、尚右教示イタシ候ニハ、熟達之者全ク夫而已ニ委任有之度事ニ候、

一教示方順序立候ト申ハ、軍船ニ於テ必用有之候諸掛々之者、諸事相心得居候指揮役ヨリ始メ、末々年若之者迄、無欠闕差置候儀ニ有之候、

一諸事相心得候指揮役ト申ハ、其者義天文其外算学有之、其進退之船不慮之患難有之候テ、日本地方見離候トモ、再ヒ一港ヘ到ラシムル等之心得アル者ノ義ニ有之候、

一日本船ニ於テ是迄ノ振合ニ船進退致候義、当時ニ於テ決テ充分ト難致候、

一蒸気船、殊更蒸気軍艦ハ、高価ノモノニ有之、尚乗組総中之人命ハ大切ノモノニ有之候、然ハ天気風並ハ変易キモノニ候間、軍艦並乗組之人命、未熟之者ニ委任イタシ候ハ、至極大切之義ニ有之候、

一其術未熟之者指揮イタシ候ヘハ、毎々其船並乗組之者全ク損亡イタシ候義有之候、

一天文学・航海術熟達致候ヘハ、右等之患難ヲ避ケ、且ハ無異ニ航海イタシ候タメ、第一ノ方便ニ有之候、

一右学術ノ外、指揮役義ハ、其船迅速進退イタスヘキ蒸気機械之義モ相心得、且又其船攻守ノ為ニ相成候砲術、其外諸事上達イタシ居候義肝要ニ有之候、

一指揮役ハ船中ニ有之候諸具用法相心得、仮令ハ檣・船具・帆並碇等之用法相弁可申事、一言ニ申候得ハ、指揮役義ハ船中ニ有之候モノ一トシテ相弁ヘサルモノ無之トノ義ニ有之候、

一第一士官ハ指揮役ニ相続キ候モノニテ、同様諸事相心得罷在可申事ニテ候、其故ハ、指揮役病気或ハ故障有之候節ハ、指揮可致義ニテ、第二之指揮役トモ可申者ニ有之候、

一外士官之向モ、各請持之事指揮イタシ、尚天文測量ノ学ニ達シ、且大砲並蒸気機械之用法其外之事マテモ、相心得罷在可申事ニ有之候、

一良能之士官居候ヘハ、下等水夫・船兵ニ至ルマテ宜相成モノニ有之候、

一右之者共之外、蒸気船ニテハ機械方要用ニ有之、右ハ機械取扱所修覆イタシ候為ニ有之候、機械方居不申候テハ、蒸気船無益ノモノニ有之候、次ニ申述ヘクハ火焚方之義ニ有之候、是亦練磨致ヘキ有之候（所業ニ脱カ）間、火焚方

ト相成候者、宜修行可致事ニ有之候、

一諸事昨年毎度申立置候、当節ニ至候テハ諸事手ニ掛候時節ニ有之候、右等之義ニ付既ニ用意致居候、

一既ニ毎度申立置候通、教示ヲ請利益被得度候ハ、、此已後之教示ニ順序御立可有之候、

一右ニ付日本御奉行所ヘ御進申候ハ、直ニ諸掛之者左之通御申付有之度候、是ハ日本最初之蒸気船ニテ、航海弁用致候為ニ有之候間、則指揮役壱人・第一等士官壱人・士官三人・按針役壱人・水夫頭壱人・端舟運用方三人・水夫五十人・兵卒組頭壱人・兵卒小頭壱人・兵卒拾人・太鼓方壱人・大工壱人・帆縫壱人・器械掛三人・火焚廿人、右外士官見習之者三四人ニ有之ヘク候、

一日本奉行所ニ於テ、日本人之内ヨリ右之人数御申付被成、日々スームビングヘ御遣シ、役々之所業習熟為致候様有之度候、

一右之者共ハ、何レモ公儀人ヘ御申付、一応御申付ニ相成候上ハ、決テ日々別人交替無之様有之、〔度脱カ〕左様無之候テハ、時日而已無益ニ相費ヘ候故ニ有之候、

一諸家方ニハ、蒸気二艘滞在中、伝習熱〔執カ〕心有之候ハ、、門人之向ヘデー船ヘ御遣可被成候、左候ハ、昨年スームビングニテ伝習有之候振合通ニ可致候、

一日本国帝海軍御取立被成度トノ義ニ御座候得ハ、乗組之義ハ御配慮之第一ニシテ、重立候義ニ可有之候、此段再応申上候、船艦ハ金銀ヲ以テ可被求候得共、乗込之義ハ左様ニ無之、国人之内ヨリ乗組、夫々之者取立候ニハ、年月研究可有之義ニ候、

一右等之義御思慮被成、スームビング乗組之義ニ付申上候通、〔脱カ〕〔外船用乗組夫々之者早々御申付有之度、尚スームビング之〕乗組同様、最初申付候者ハ、交替不相成様有之度候、

一日本奉行所ニ於テ、私儀日本之御為ニモ可相成義ト存申立候件々、御用ニモ相成候ハ、、一度ハ時節有之、御国益ニ相成可申義ハ、相違有之間敷存候、

一右乗組之者練磨習熟之義ハ、一体之基ニ有之御注文之船々当地渡来之節御用達可仕候、

一右之通ニ御取計被成候ハ、、日本海軍取立之御趣意相貫候様相成可申候、右ニ付御勘考被成ヘキハ、蘭学修行之義肝要ニ有之候、其故ハ諸業之為著述致有之候必用之書籍、独学研究イタシ候為ニ有之候、

一右一件之義ニ付、其許御相談仕候通、私存意之程日本

奉行所へ申立候義、無用之事トハ不被存候、

於出島　　船将次迄

グ、フアビュス

千八百五十五年第七月廿六日（安政二年卯六月十三日）

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて補訂）

二六六　和蘭国王汽船献上事実（海軍歴史抄）

船将次官ヨリ、教授之為士官其外残置候儀ニ付、加比丹ヘ差遣候横文字和解

於国有蒸気船ゲーデ

於出島千八百五十五年第八月七日（安政二年卯七月廿六日）

国有蒸気船スームビンク、日本国帝御請相成候旨、長崎御奉行ヨリ御達有之、則最早日本軍船ニ相成候ニ付テハ、右船ニ教授トシテ相残候者之義ニ付、取極致置候事肝要ニ有之候、

一教授者ヲ長崎ニ相残候ハ肝要ニ有之、既ニ度々申述候故、最早不及申候得共、御奉行所御入用ヲ以、外ニ捻仕掛（スクルーフ）コルフエット船弐艘為御打建相成候ニ付テハ、教授者相残候義急度無余儀事ニ有之、右教授者無之候テハ、スームビング船モ無益ニ相成、右弐艘モ廃物ト相成可申、軍船就中蒸気軍船功者之乗組無之候テハ、其詮モナク、少シ之功モ無、危キ翫物ニ有之候、

一右相残候者共之儀ニ付テハ、夫々分配致シ候方可然候、則コマンダント壱人、是ハ昨年并当年之通、伝習一体之取立致シ候者ニ有之候、

一士官三人、是ハ蒸気機械・船運用・砲術小筒調練・航海術・地理学・蘭語学・船中家事取賄等之教授致シ候者ニ有之、此分配ニテハコンマンダント之外、士官之有余無之候、

一蒸気機関方弐人、是ハ必用之事ニテ、子細申述候ニ不及候、

一火焚方兼鍛治四人、是ハ必用之者ニ候、火焚之役ハ石炭ヲ火上ニ投散シ候儀而已ニテハ充分ナラス、石炭ヲ少モ費ナク能燃立候様可致候、石炭之入費莫大之事ニテ、何レ之地ニヲヒテモ贖得候事ニモ無之、船中囲場モ狭ク候故、費ヲ厭ヒ候事ハ実ニ無余儀事ニ候、火焚方ハ是等之事ヲ習練可致事ニ候、

一船大工壱人、

一帆縫方壱人、是ハ縫方ヲ教候為ニ候、欧羅巴流之帆前ハ日本船之帆ニ格別致相違居候、

一兵卒組頭兼石火矢方壱人、是ハ砲術教ヘ方、大砲小筒調練ニ極テ要用之者ニ有之候、尤是ニ劔筒等相心得候兵卒壱人相添候義肝要ニ候、水夫頭壱人、端舟運用方壱人、水夫六人、是ハ日本人ニ船具・帆前・綱具扱方等、水夫之業ヲ教ヘ候為ニ有之候、

一右之者共、都合弐拾弐人相成候、都テ阿蘭陀人ニテ、日本海軍御取立開基之日本人教授方取立方ニ格別骨折可申候、

一此開基之人々、能ク練熟致シ候ハヽ、此後弘業之為メニハ汲出スヘキ源水ト可相成事ニ候、

一日本御為筋ニ付、再度可申述候、スームビング船乗組之外ニ、既ニ申立候通、士官見習ニ可相成家柄幼年之者御増可有之事ニ候、其為ニハ能キ折ニテ、今度可居残コマンタントハ、至極熟練勤功有之、既ニ阿蘭陀国ニ於テ数年学校ニテ、(脱アルカ)幼年之者ハ追テ士官ト可相成者ニ候、阿蘭陀海軍ニ数多練熟之士官有之候ハ、全此学校有之候故ニ候、

一今一事申述候ハ、元来武方ニハ当然之自由有之候者ニ候得共、此度貴君ニ任シ可申者共モ、素ヨリ国有海軍隊ニ有之候故、右自由ヲ得可申儀ハ勿論、就テハ外和蘭人迄(迎カ)モ出島ヘ閉籠ラサル様之証拠無之内ハ、右人数残シ置難ク、左無之候テハ、無心置教授モ充分難出来義ニ有之候、

日本差越之指揮役船将次官
グ、フアビユス

加比丹

於日本和蘭領事官ヘ

右之通、和解差上申候、以上、

卯七月

本木昌左衛門印
志筑龍太印
名村八右衛門印
荒木熊八印
西慶太郎印
本木昌造印
楢林榮左衛門印
西吉十郎印

(大日本古文書(幕末外国関係文書)にて校訂)

二六七　長崎製鉄所創初(海軍歴史抄)

(二六七の一)

安政二乙卯年七月、長崎ニ於テ海軍伝習ノ事始リシニ差向、蒸気器械ノ仕替并ニ手入等ニ歎(難カ)欠必用ノ諸具無之テ

ハ、損所等出来ノ節ハ差支アルヲ以テ、永井玄蕃頭（尚志、目付）在崎中政府ヘ申立、右諸道具類ヲ和蘭ヘ注文セシ所、翌々巳年ニ至リ諸工師モ来着シ、諸品モ持渡リタルニ寄、其節在勤ノ奉行水野筑後守（忠徳、勘定奉行）・荒尾石見守（成允、長崎奉行）ヨリ伺ノ上、稲佐郷飽之浦ノ地ヲ相シ、同年十月ヲ以テ起工シ、製鉄所ヲ設クルニ至レリ、其工事ハ、和蘭国機関方士官ハルデス首トシテ、コレヲ担任シ、会計及ヒ其他ノ事務ハ永持亨次郎専ラ董率ノ労ヲ執レリ、文久元年辛酉四月ニ至テ始テ竣工ス、当時ノ載籍多クハ散佚シ、頗ル詳明ヲ欠、今僅ニ是ヲ蒐摭シ、其概略ヲ示ス、

二六七の二
乙卯年十一月、定便ヲ以建白ス、

当年出帆之商船ヘ左之通誂遣シ、明年持渡候様相達、

一蒸気機械湯釜

一伝習御用必需之品

一鎔鉄炉附属之蒸気機械類并鉄槌等

代凡壱万金程

追テハ、御都城近之場所ヘ差置候方可然候得共、当地滞在之蘭人ヘ質問伝習候ニ付テハ、差向当地江御取建之可然云々、

二六七の三

覚

第一　蒸気鎚（ストーム）蒸気罐（ハームル）附属　一具

右既ニ日本ニ送輸スル全備ノモノ

第二　右蒸気槌ノ為ニ設ル焔炉二個用諸要品

第三　台附プレットトロル（銅鉄竿板製造機）六個（車輪并運転機等全備）・竿鉄製作用二個・鉄板製作用二個・銅板製作用二個

第四　右プレットトル六個ニ適用ノ焔炉ヲ築造スル諸要品并鋳鉄ノボック一、二個及ヒ所謂銅塊鋳造用ノ匙等ナリ

第五　鉄具鍛煉火竈（大装置）鉄砧（アーンベールト）スベールハーク、耳附ノ鑽運転機附属ノ輪風器等全備

第六　木材鋸断装置スレーデ及ヒ運転機附属全備、長八エル、厚一エルノ幹ヲ角材及ヒ板材ニ鋸断スルニ適スルモノ

第七　蒸気罐附属全備ノ蒸気機械一具或二具、右ハブレットトル輪風器及木材鋸断機ヲ運用スルニ適スルモノ、并ニ後ニ装置スル廻転罐六個及鉋盤六個ノ用ニ供ス

第八　最大砥石一具、運転機附属

以上

〔海軍歴史〔勝海舟全集〕にて校訂〕

二六八　汽船献上ノ手続甲比丹上申書〔海軍歴史抄〕

記旗之儀ニ付、船将次官ヨリ加比丹ヘ申出候書面和解

一毎々書面並口上ヲ以テモ申述候ハ、海軍御取立之為、日本御奉行所不取敢乗組之者御申付之儀、肝要ニ有之候トノ義ニ候、右ハスームビングニ於テ、日々習熟致シ置候テ、此後来着ノ船々ヘ御配付相成可申、此乗組ヲ以テ日本海軍ノ基ト被成、修行練磨可有之為ニ候、

一猶又申立置候ハ、教示之仕方如何様ニ規定相立可申トノ儀ニ候、

一国王之蒸気船スームヒング、既ニ国帝之モノト相成、御請取ニ相成候上ハ、武器全備之蒸気軍艦御所得ト相成、今ヨリハ実ニ日本海軍ノ御備有之候、右ニ付一昨日之書面ニテ、教示方并乗組御申付方之義申立候、未外ニモ申上ヘキ肝要之事有之候ヲ存付申候、

一右ニ付〔先脱カ〕一廉申述、此書面之主意ヲ相達可申義ハ、則日本記旗之義ニ有之候、

一世界中諸国々ニ於テ、各其国其外属地軍勢海軍并商船等之記旗有之候ニ付、外国人民平常尊敬イタシ候、

一記旗相建候軍艦、若記旗無之、或ハ不分明之記旗相建、武備イタシ候船ニ出逢候節ハ、逆妨イタシ〔候脱カ〕海賊ニハ無之哉遂吟味候上、奪取候規定ニ付、右記旗ハ最モ肝要ノモノニ有之候、

一依之毎船就中武備イタシ候船ハ、記旗可有之事ニテ、船〔後脱カ〕之方ニ引揚候旗ハ国旗ト相称、何レノ国民ニ属シ候トノ儀ヲ示シ申候、

一軍艦ニ於テハ、右後方ノ記旗ノ外ニ尚檣之内一本ニ一箇之徴有之、其船軍艦タル事并主役之位階ヲ示シ候、右徴ハ毎モ同様ニハ無之、長旗或ハ将旗ニテ、不断檣ノ頂上ニ引揚有之候、

一和蘭海軍用弁〔別脱カ〕記徴之絵図致附属候、

一大檣之頂上ニ引揚有之候長旗ハ、唯軍艦之徴ニテ、商買船ハ、右旗相用候義不相成事ニ候、

一将旗ヲ大檣之頂上ニ引揚有之候得ハ、其船之指揮役アドミラールニハ無之、乍併重キ将士ニテ其下知一艘ヨリ数多之船々ニ伝ヘ可申徴ニ有之候、

一艦檣之頂上ニ引揚有之候国旗ハ、スコート・ベイ・ナクト乗船ニテ、数艘之酋長フラグ・オフシールノ徴ニ有之

候、

一表檣之頂上ニ国旗引揚有之候ハ、其船ニフイース・アドミラール罷在候徴ニ有之、右ハスコート・ベイ・ナクトヨリ、高官之フラグ・オフシール一手之大将ニ有之候

一大檣之頂上ニ有之候国旗ハ、海軍極官ノフラグ・オフシールナルロイナント・アドミラール罷在候徴ニテ、海軍一組之大将ニ有之候、

一国帝或ハ国王之記旗ニ国王之紋アルヲ、大檣之頂国旗之上ニ引揚タルハ、其船ニ国主罷在ノ徴ニ有之候、

一フラグ・オフシール船中ニ罷在、其記旗一ツ之頂ニ引揚有之候節、長旗ハ引揚無之候、

一右之次第ニ付、軍艦ニハ第一記旗要用ニ有之候、其訳ハ右記旗ニテ何国之船ト申義、尚檣之一本ニ建有之候旗ニテ、其主役之位階ヲ徴候義ニ有之候、

一洋中ニ於テ、軍艦商船ニ出会候節ハ、下賤ヨリ高位ニ対シ恭敬之為、商船其記旗ヲ引揚、礼義ヲ尽シ候義ニ有之候、

一若商船記旗ヲ建不申候節ハ、軍艦襲ヒ候テ不苦候、

一各外国ノ人乗組居候弐艘之軍艦洋中ニテ行会候節、右一艘之方ヨリ記旗引揚候テモ、外一艘ヨリ不相答時ハ、両国人平和ヲ破候徴トシテ、石火矢之備ヲ立、其船ニ近寄闘戦之用意ヲ成シ、記旗引揚不申謂ハレヲ糺明致候、

一港内ニ繋居勤務ニ預リ候軍艦ハ、其記旗ヲ朝引揚、日ノ入ヲ限トシテ卸申候、

一港内ニ繋居記旗ヲ引揚、又ハ卸候節ハ、武家之作法トシテ音楽ヲ奏シ、或ハ太鼓ヲ打申候、此時当番并小銃ヲ携候者ハ、其銃ニテ礼義ノ手前ヲ致、其記旗ヲ国民且国主ヘ擬ヘ、恭敬イタシ候義ニ有之候、

一右ニ付、諸国民共国旗ヲ極テ肝要ノモノトイタシ候義、顕然ニ有之候、

一帝国日本モ国旗有之候哉、相知不申候、

一未タ無其儀候ハヽ、日本国ニモ最早海軍備ニ可相成候ニ付、国旗拵ニ相成候事至極肝要ト存候、

一右之通ニ相成候ヘハ、記旗ヲ拵ヘ、或ハ変改イタシ候国ハ、何レモ各判之証拠書ヲ以テ、外国政府ニ掛合候風儀ニ有之、右ハ混雑ヲ防キ候為ニ候、

一右日本記旗之義相済候上ハ、引続キ帝国日本海軍士官并乗組之装束之義ニ付可申述候、

一右之桁々、貴君無御心置、日本政府之聴ニ達候様、恭

敬ヲ以テ御申立有之度候、

日本ヘ差越候指揮役

船将次官

グ、フアビユス

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

卯七月

伝習教示方并軍艦記旗船将心附義申出候横文字和解

差上候儀申上候書付

荒尾石見守

和蘭国王ヨリ蒸気船献貢仕候付、伝習受候者被遣候儀ニ御座候ハ、惣督ハ一船之指揮致、船上之事共無残心得居不申候テハ不相成職務多端之赴ニ付、相当之者弐人撰可被遣候段、并乗組人数之儀ハ先便申上置候処、此節右船御受納相成候段申達候ニ付、教示方并軍艦記旗船将心附之義申出候書面、カピタンヨリ差出候間、和解申付候処、昨年同人渡来之節教示致シ候儀ハ唯大概耳ニテ、当節ニ至候テハ順序ヲ立教示可仕、就テハ乗組人数立相定、銘々手ヲ分ケ、別人交替不致様無之候テハ、修業速成不仕、就中指揮役共可相成者ハ、天文・算学等研究致シ、船中諸般之事無残心得居可申、第一等士官ハ右ニ差続候者ニテ、同様諸事心得可罷在事共委細申立候赴、此度伝習受候為被遣候惣督初士官ニ可相成者、御人撰之御見合ニモ可相成、且ハ右書面之赴惣督之者江御達相成、当人義職務之大意兼テ弁居候ハ、、着崎之上教示受候心得ニモ可相成奉存候、軍艦記旗之儀ハ、追々大船御製造有之候ニ付テハ、御当国之船印蒸気船将ヘモ申聞置候方可然旨、昨年御沙汰御座候得共、和蘭ハ勿論外国ニテモ承知致シ居候由、船将噂有之候間改テ不申達候処、此度船印之儀申出候ニ付テハ、昨年被仰付候通、御当国惣船印ハ白地日ノ丸幟相用、

公儀御船ハ白紺布交吹貫帆中柱ヘ相立、（帆ハ脱カ）白地中黒御定之趣、委細可申達処、船将此度申出候外国軍艦記旗ト振合違居候故、申達候ハ、必定異存可申出ト存候、当時船将モ気乗能出精教示致居、不遠伝習受候者モ可被遣折柄、蒸気船御受納相成候初発ヨリ、右一儀ニ付、万一論柄ヲ生シ、彼之気ヲ挫候様之儀モ有之候テハ不宜候ニ付、船印之儀ハ、先其侭ニ差置、様子見計、追テ談判仕候方可然奉存候、右之赴永井岩之丞江モ申談候処同意ニ付、依之右和解四冊相添、此段申上候、尤横文字ハ追便宿次ヲ以差上可申候、此外伝教之蘭人士

官滞崎中取扱振、并一ケ年給料之儀共追々申出候間、取調猶追便可申上候、以上、

卯八月　荒尾石見守

二六九　幕府海軍創設及規程〔海軍歴史抄〕

二六九の一

安政二年卯十月廿四日、〔尚志、目付〕永井岩之丞西役所ニヲイテ、総督・矢田堀景蔵・〔勝脱カ〕麟太郎・永持亨次郎立合、岩之丞相渡書付

海軍御取立ニ付テハ、追々被　仰出之〔趣〕赴モ有之、元ヨリ御創製之儀ニテ、諸事是迄之仕来難泥段ハ、銘々其心得モ可有之、乍然業前之義ニ至リ候テハ、専門之所長ヲ恃ミ、〔モ脱カ〕動スレハ他ヲ誹議スルハ、世俗一己之私偏可賤事ナレ共、世俗一般之通習ニテ、夫ヨリ確執ヲ生スル事間々有之、其方共ハ此度格別之御人撰ヲ以被差遣候義故、右等之弁有之ハ勿論ニ候得共、是迄組々之仕来モ有之事故、万一心得方区々之義モ有之候テハ、自然修業捗取兼、厚キ御趣意ニモ相背、大切之御用勤不遂次第ニモ可及間、此旨厚心得、銘々切磋琢磨之道ヲ専トシ、一己ヲ不立、心腹ヲ開、互ニ不及ヲ扶合、海軍御取建之御趣意相貫キ候様、役前之業精々研究可致候、

十月一覧済之印、銘々名前書取揃、附札ニテ差出可申候〔海軍歴史〕〔勝海舟全集〕にて校訂〕

二六九の二

船中課程

一朝夏ハ五時前冬ハ六時貝・太鼓之合図ニテ、一同起出可申事、

一鐘之合図ニテ一同朝飯ヲ引可申事、

但定リタル場所ニテ食事致シ、水主ハ小頭一人、配下十人宛ヲ引纏メ同食可致事、

一朝飯相済候ハヽ、船内外掃除イタシ、銘々受持之諸道具洗磨キ、風取引明ケ、畢テ着替之事、

一朝半時〔朝は五ツ半時〕〔海軍歴史〕貝之合図ニテ水主小頭役之モノ御船印引揚候節、当番組頭人数相改、太鼓打、小筒調練致、帆懸卸帆桁引上可申、此節船手奉行鏡板ニテ候間、当番組頭夜中有無申立、船手奉行上段見廻リ退去之事、

一稽古人相揃候ハヽ、順序ヲ以上段左右ニ立並、組頭銘々配下之人数行装相改、其段船手奉行ヘ相届ケ可申事、

但当病之モノハ、其都度々々届ケ差出可申事、

一船手奉行指図ニテ笛ヲ吹候ハヽ、蘭人之迎船指出シ、昼九ツ時迄稽古イタシ、上段取片付可申事、

但太鼓ハ端舟ニテ打方稽古可致事、

一九ツ時、鐘ノ合図ニテ一同昼飯ヲ引可申事、

但食器取片付候ハヽ、昼後稽古可致、諸道具取揃置、八ツ時前迄休息可致事、

一八ツ時前船手奉行指図ニテ笛ヲ吹立候ハヽ、蘭人之迎船出シ、夕七ツ時迄稽古可致事、

一薄暮貝之合図ニテ御船印引卸候節、朝引揚候節之通リ太鼓ヲ打、小筒調練イタシ、帆桁引卸、諸道具取片附、端舟引揚可申、此節船手奉行鏡板ニ出候間、当番組頭人数并大小銃トモ整居候哉相改メ、其段船手奉行江可申出事、

一夜五ツ時、貝太鼓之合図ニテ、当番之外ハ銘々相休、当番組頭船中不残見廻リ、見守番揃居候哉、竈之火元宜候哉、制禁之場所火気無之哉、喞筒ニ水何程上リ候哉、燈籠用意有之哉、大風雨之節添錨之用意宜哉、柁之進退故障無之哉相改メ、其段船手奉行ヘ相届ケ可申事、

一昼夜共鏡板上ハ当番之モノ相心得、一時限交代イタシ、其都度々々垢入有無、火所之用心、又ハ製禁之場所ニ火気無之哉相改、三器合図之手筈相心得可申候、且日記ハ当番組頭専ラ心得、天気風并等迄書記シ、姓名認置可申事、

一伝習休日ハ、御船印引揚候様、後大小銃其外小道具手入、帆綱類石炭等風入レ、絵具摺剝ヲ取繕、鏡板砂磨致シ、船中総体ハ大掃除可致事、

但御船印揚卸夜中手順等ハ、平常ノ通リタルヘシ、尤当番之外ハ、当日ニ限リ九ツ時退散、銘々放学勝手タルヘシ、且平常遅参・不参又ハ懈怠イタシ候之モノハ、放学差留可申、平常格別出精之モノハ、当番ニ候共、両三輩ハ放学差許可申事、

二六九の三

船中章程

一海軍御取立之儀ハ、格別之御趣意有之、御新創之事ニ付、水主共ニ到ル迄相励出精イタシ、一時モ早ク成業候様心掛可申、殊ニ外国人ヨリ伝習請候ニ付テハ、聊モ不取締之義有之間敷、若懈怠イタシ候モノ有之、稽古不捗取候テハ、厚御趣意ニ戻リ、且ハ御外聞ニモ拘リ候義ニ付、銘々存寄違無之様心付可申事、

一飲酒・口論・雑談等堅制禁タルヘキ事、
一定リタル場所之外ハ、煙火一切差置申間敷事、
一飲食ハ賄役之者厚心ヲ用ヒ、下輩之モノタリ共、不調味之モノ差遣申間敷事、
一火薬并銃丸囲場之鍵ハ、船手奉行預リ、開閉致間敷事、
一稽古人之外、印鑑無之者ハ船中出入為致間敷、伝習人召連候家来モ同断之事、
但奉行・御目付罷越候節、用人壱人・給人壱人、両人（侍脱カ）ニ限リ、其余ハ差留可申候、伝習人家来之モノ仮令印鑑有之候トモ、船手奉行差図無之テハ、鏡板ヨリ下ニ入ルヘカラス、印鑑ハ下船之節取揚可申候、奉行・御目付召連候家来之内、御朱印持并給仕壱人之外ハ、船手奉行部屋江差置申間敷事、
一本船左右階子下ニハ、奉行・御目付之船タリ共繋置申間敷事、
一御船并大小銃ハ勿論、錨・鎖・帆瑣細之モノタリトモ、総テ御品ニ候得ハ、破損・紛失等無之様扱方精々心付、一日タリ共手入怠リ申間敷事、
一船手奉行ハ、船中惣体之取締ハ勿論、稽古人之勤惰其外諸役之事トモ都テ心付、部屋々々臨時見廻リ、石炭燥湿并役々受持之諸具等心ヲ配リ、折々船底之諸貯物ヲモ相改可申事、
一第一等組頭ハ、前同様心付、就中蒸気機械之磨キ、釜掃除、車輪之錆、煙出之雨除、石炭風入等重ニ相心得、其主役之モノヘモ心付可申事、
一第二等組頭ハ、大小銃・火薬・諸武器類重ニ相心得、其主役之モノ江モ心付（可脱カ）申事、
一第三等組頭ハ、御船并諸道具重ニ相心得、其主役之モノヘモ心付可申事、
一第四等組頭ハ、薪・水・食料又ハ地図・書籍・時計・大工鍛治諸道具重ニ相心得、其主役之モノヘモ心付可申事、
一船中破損箇所、諸道具ノ損、又ハ御買入相成ヘキ品数等、銘々請持之モノ、巨細帳面ニ認置、発揮ト相分リ候様致シ置可申事、
一五節句・八朔・三元日・中元ハ、当番之外出席ニ不及、放学之義伝習休日ニ準シ候事、
一前箇条ニ背キ、又ハ如何之所業アラハ、身分有之モ

ノトイヘトモ厳重沙汰ニヲヨヒ、其段關東ニ可申上事、

二六九の四　課程附録

一其筋掛リ之モノ出勤イタシ候迄ハ、船中泊番之者申合、仮ニ手割相定可申候、尤毎朝差出候当名面帳江、右手割之義認差出可申事、

二六九の五　章程附録

一第一〔等脱カ〕、第二等ハ、其日当番筆頭之者ヲ以、第一・第二ト相定可申事、

覚

一当番之節、船手奉行差支節〔候脱カ〕ハ、其日当番之士官役筆頭之〔者脱カ〕ニテ代リ相心得、其士官役差支之節モ、右ニ準取計可申事、

一船手奉行之者ハ泊リ之節、自分家来老人宛召仕可申、尤兼テ名前書出置可申事、

一御役所ニ於テ稽古有之候節、船中泊リ明ケ之者ハ、九ツ時ヨリ出席致候テモ不苦候事、

一御役所ニ於テ稽古相始候刻限義、月番之士官役下等士官役之内江向ケ案内可及候間、夫々申通候様可被取計、且其外臨時達事モ同断取計可被申候事、

泊人数覚

船手奉行三人之内
老人宛

士官十三人之内
但下曾根治郎助ハ泊リ方相心得ニ不及、
四人宛

下等士官役三十二人之内
七人宛

一人数割之通、当番順相立置可被申候事、
但運用稽古等之節、機関役并運用方ハ不残乗組、其余ハ多人数不相成様順番相立置、順番之者而已乗込候様可被致候事、

一船中二之日・七之日ハ諸藩家来稽古ト定メ、当日ハ一同船中ヘ出勤之事、

二六九の六　掛割覚

中島三郎助

右士官一体之心得モ修業致、軍艦修業方重ニ相心得可被申候、

佐々倉桐太郎

右士官一体之心得方修業可被致候、

尾形作右衛門
三浦新十郎
松島鐸次郎
蜷川藤五郎

右大小銃之業前専務ニ修業可被致候、

岩島源八郎

右士官一体ノ心得方修業可被致候、

望月大象

右士官一体之心得方モ修業致、蒸気機械重ニ相心得可被申候、

長澤鋼吉

右士官一体之心得方修業可被致候、

石井修三

右士官一体之心得方モ修業致、軍艦製造重ニ相心得可被申候、

鈴藤勇次郎

右士官一体之心得方修業可被致候、

白石藤三郎

右公用方心得重ニ修業可被致候、

高柳兵助
福岡金吾
土屋忠次郎
小野友五郎

右天文・地理・測量等之術、専務ニ修業可被致候、

兼松龜次郎
竹内卯吉郎
吉田鶴次郎
小島羊太郎

右蒸気機関等之術専務ニ修業致、且火焚トモ取締方相心得可申候、

春山辨藏
池邊龍右衛門
緒方賢次郎

右軍艦製造方専務ニ修業可致候、

岩田平作
濱口與右衛門

山田八郎
武井茂四郎
竹内勝三郎

右帆前運用之業前専務ニ修業致、水夫共取締方之義相心得可申候、

飯田敬之助
川下作十郎
中村泰助
小笠原庄三郎
鈴木儀右衛門
小川喜太郎
關川伴次郎
近藤熊吉
村田小一郎
伴梅吉郎
中尾若次
佐々木門次郎
金澤種米之助

右大小銃之業前専務ニ修業可致候、

關口鐵之助
福西甚平
吉邨虎次

右ハ太鼓打方之業前専務ニ修業可致候、

山本金次郎

右ハ帆縄等之結方・縫方等、専務ニ修業可致候、

白石藤三郎
川下作十郎
小笠原庄次郎

右ハ諸雑費出納方等心得可被申候、

關川伴次郎
邨田小一郎
濱口與右衛門
鈴木儀右衛門

右両人ッ、隔月ニ書記掛相心得可申候、

十月　永持亨次郎
十一月　矢田堀景藏
十二月　勝麟太郎

右之割合ニ月番相心得候間、諸般之事月番ニテ取扱候様ニ有之事、

〔海軍歴史（勝海舟全集）にて校訂〕

二七〇　海軍伝習令〔海軍歴史抄〕

安政二卯年八月廿四日達

大船製造掛へ

覚

此度長崎表へ被差遣候面々、御軍艦起立ニテ海外万国ニ関係致シ候御用柄、国家之御為、当今第一之事業講究致シ、往々一廉御用相立候様可相心掛儀ハ勿論之義ニ付、平生清廉潔白ニ致シ、天下後世迄之口議〔口議ニ干ラサル様〕干サテル様可有之ハ申迄モ無之候得共、諸家之家来其外夫是手筋ヲ求メ、密々申込、贈物等致シ候向モ追々可有之、右等之辺ヨリ、以之外之弊源相開、公義御外聞ニモ相成候義モ出来候義ニ付、彼地在留中ハ勿論、途中往返共、私ニ諸家之家来へ引合贈物等一切受用致間敷旨一同厚ク申合、万一心得違之向モ有之候ハヽ、聊無用捨永井岩之丞へ可申立候、若乍存押隠シ居候向モ有之候ハヽ、後日同様之御沙汰可有之候間、急度相心得可申候事、

右之通、長崎表へ相越候者共へ相通シ、其段永井岩之丞へモ可被達置候事、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

二七一　蒸気船伝習之儀上申書〔海軍歴史抄〕

永井岩之丞

一大砲ハ献貢之蒸気船ニ備付有之候得共、西洋小筒ハ当所御囲ヒ筒無之候間、此度商売船持渡候六千挺（燧石機ヲ改造シテ雷管機ナリ）之内、伝習稽古用之方へ振向候様仕度、尤日々多人数之稽古、損等モ出来可仕候間、其表へ御廻シ相成候内、弐百挺程モ当所へ残置、私御預ニ仕度、且其段長崎奉行へモ被仰渡候様仕度奉存候、

一大小砲ハ、是ヲ取廻シ方而已之稽古致シ候故、自然銘々差ハマリモ薄候間、放発為致度船将ヨリ兼テ申立候趣モ有之候間、此度被遣候者共着崎伝習受候節ハ、猶又可申出ト奉存候、発放差留之港法ハ、外国へ対シ候之義ニテ、稽古ニ発放仕候ハヽ、船中陸地同様之義ニ可有之、且御台場御備筒モ年限定有之、港内両御番所脇ニテ、港ヲ打越火通致候仕来モ御座候間、別段之廉ヲ以、稽古之節ハ船中発放為致度、就テハ合薬ハヽ、御鉄砲方へ申達受取候様可仕候、尤異国船渡来致候節ハ、是迄之通取廻シ耳ニテ放発見合可申候、

一教授致候蘭人士官之内、四五人滞留為致候様、奉行ヨ

リ兼テ加比丹ヘ申聞置候処、士官之外夫々専務有之、水夫ニ至迄残置不申候テハ、教示不行届由ニテ、総人数二十二人滞留為致候段ハ、別冊船将差出候横文和解之通御座候、此度私儀右御用取扱被　仰付候ニ付テハ、是等之処可成丈人数減少可仕様、船将ヘ掛合可申候得共、右之内欠候テハ教示行届兼候趣ニモ候ハヽ、申立ニ相任セ候心得ニ御座候、右ニ付テハ、其者共給料総体高四万両程之見積ヲ以取計候様、昨秋奉行ヘ御下知御座候処、此度残置候者共ハ、和蘭国ヨリモ夫々給料受居候得共、総人数弐拾弐人ニテ、弐百拾貫目脇荷銀ヲ以、此方ヨリ増方致候様致度段ハ、是又別冊加比丹申出候横文和解之通御座候、然ル処、阿蘭陀ハ他之国々ト違ヒ、通商御免相成、此度之御用相勤候付テハ、不一通心ヲ用候哉ニモ候間、同国ヘ被対候処ハ如何有之候共、一体之給料他国ヨリ為差出、此方ニテハ僅カ其増方ヲ致、大切之御用為勤候ハ筋合不穏、外国ヘ之聞ヘモ有之、僅カ之御入用ヲ以テ、御国体ニ拘候様之評説モ有之候テハ如何之儀、殊ニ加比丹申出之処ニテハ、是迄和蘭ヨリ請居候給料、并此方ヨリ御弁相成候増給料、双方ニテ一ケ年七千両以内ニ相成、昨年奉行ヘ被仰渡候員数ヨリハ、莫大之御減ニ相成居候間、和蘭ヨリ差出候処ハ、彼之意ニ任セ置、不残之給料御当国ヨリ御弁ニ相成候方筋合可然奉存候、且又平常御取扱振之品ニ寄、教示之蘭人安心滞留致シ申間敷趣、別冊書面中ニ有之、加比丹ヨリモ取扱振之儀追々申出候儀モ御座候得共、右ハ当所在留総体之和蘭人御取扱振大変革之事故、取調之上追テ奉行ヨリ可申上義ト奉存候、

一伝習ニ付テハ一同之者共勤惰ニ寄、時々褒賞等遣シ、誘掖鼓舞致シ不申候テハ、自然怠惰気緩モ生シ可申、蘭人ヘモ教示之様子ニ寄遣物等仕候ハヽ、一段出精可仕、且右御用ニ付テハ、時宜ニ寄、節々町便差立申上、伺等仕候義モ可有御座候、其都度々々ニ相成候様ニテハ、当所是迄之振合モ有之、手数モ相掛候耳ニテ時々渡シ可申、尤諸雑費可成丈御入用嵩不申候様取計可申候得共、前以員数見込申上兼候間、巨細之義ハ、両三ケ月相試取調、追テ見込可申上候間、右諸入用トシテ差向五千両程モ別段御下金相成候欤、又ハ奉行ヘ断次第会所ヨリ無異儀差出候様相成候欤、右両様之内何レトモ御入用出方伺置、差含取計候様仕度、会所ヨリ出

方ニ相成義ニ御座候ハヽ、其段奉行ヘ御達御座候様仕度奉存候、

一鹽飽島水夫旅中入用ハ相除、御手当浦賀表ニテハ粮米一日壱升一ヶ年拾両被下候間、右ヲ以勘弁仕候様奉行ヘ御沙汰御座候処、浦賀表之方ハ、平日御用暇之節ハ漁猟手稼等モ可仕候得共、伝習稽古之儀ハ、帆柱之登降等危キ業前ヲ常ト致シ、大砲取廻シ手伝等日々余暇無之、殊ニ右等之者共ハ、固ヨリ義心モ薄ク利耳相計候輩ニ候得ハ、少々之利潤モ無之、只管日々危キ業前為骨折候テハ、差ハマリ出精致間敷候間、何レニモ御手当増相願不申候テハ、修行届申間敷奉存候、

一此度為伝習被遣候者共之内、稽古中差ハマリ薄ク、卒業無覚束、又ハ船法ヲ背候者有之候節ハ、其次弟ニ寄右御用差免、其御表ニ差下シ候義モ可有之、且病気等ニテ急速本愈之程難計者共御座候ハヽ、是又同断取計候儀モ可有御座候、

一永持亨次郎ハ元ヨリ配下之事ニ候得共、矢田堀景藏・勝麟太郎両人之者ハ、頭支配モ有之、其以下之者モ同様之儀ニ御座候処、諸般勤向等ハ私進退仕候義ニ付、勤名目其侭ニ据置候テハ、自然不都合之筋可有御座候間、伝習御用出役抔相唱候様被仰付度奉存候、

一右之廉々先ツ奉伺候、何レモ急速心得居不申候テハ、伝習御用御差支ニモ相成候間、早々御下知御座候様仕度、此之外之儀ハ猶追々申上候様可仕、依之和蘭蒸気船々将并加比丹ヨリ差出候、教示之為相越候蘭人総人数、右之者給料并大砲放発等之儀ニ付、加比丹蒸気船々将ヨリ申立候横文和解四冊相添、此段奉伺候、以上、

八月　　永井岩之丞

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

二七二　軍艦昇平丸長崎ニ航ス（海軍歴史抄）

安政二年八月、伝習トシテ長崎ヘ被差遣候ハ、昇平丸（本藩献上軍艦）ニテ可被遣旨申渡有之、伝習生総員二分ンテ半ハ乗船、半ハ陸行トナル、

其乗船之各員

矢田堀景藏

右ニ附属

塚本恒輔

堀貞次郎

高橋昇吉

外従者

勝　麟太郎
従者、
江川太郎左衛門手代
岩島源八郎
望月大象
長澤鋼吉
石井修三
鈴藤勇次郎
浦賀奉行組与力
中島三郎助
佐々倉桐太郎
同心
土屋金次郎（忠力）
春山辨藏
濱口與右衛門
岩田平作
山本金次郎
金澤種米之助
飯田敬之助
船大工
熊藏
長吉
砲術師範金三郎伴
下曾根次郎助
同時陸行シテ長崎ニ到ル各員
鉄砲方田付四郎兵衛組与力
尾形作右衛門
松島鐸次郎
同心
川下作十郎
關口鐵之助
關川伴次郎
近藤熊吉
村田小一郎
同井上左太夫組与力
三浦新十郎
蟷川藤五郎
同心
中村泰助
小笠原庄三郎

鈴木儀右衛門
小川喜太郎
福西甚平

天文方出役
福岡金吾
小野文五郎（友カ）
高橋兵助（柳カ）

昇平丸ハ薩摩ニテ製造セシ三桅帆前船ナリ、運転方ハ同家之船手水夫并鹽飽島水夫十五人、（海軍歴史（勝海舟全集）にて校訂）

船将次官ヨリ教授之為、士官其外残シ置候義ニ付、加比丹ヘ差遣シ候書面添書横文字和解

長崎御奉行
荒尾石見守様ヘ

一加比丹於日本和蘭領事官儀、当第九月七日（当七月廿六日）日本差越シ指揮役船将次官グ、フアヒュス（人名）ヨリ差遣シ候書面差上申候、右ハ第七月廿六日（去ル六月十三日）附同人ヨリ之書面、当第九月六日（七月廿五日）私書面相添差上候続ニ御座候、

一右書面ハ、スームビンク（船号）ヘ乗組相成候日本人ヘ、要用之伝授仕候タメ、相残候義必用ニ有之候士官・下等士官・機関方等数人之義ニ付相認有之候、

一右伝授仕候面々、爰許滞在為致候義ハ、私ヘ任セ有之、何レモ日本滞在中ハ出島ヘ住居可仕候、右ニ付要用之住所ハ和蘭商館之入費ニテ、私取計可申候、

一右士官其外之者共、和蘭政府ヨリ給料請取可申候得共、何レモ自分賄方并用事等相弁候処、御当地ニ於テハ、諸色外場所ヨリ高価ニ有之候得共、致シ方モ無之義ニ付、何レモ給料増方定約不仕テハ相叶不申、就テハ右増給料、日本政府ヨリ和蘭商館ヘ御償相成候義ト奉存候、日本政府ニ於テ、御弁相成候様之書面近々差シ出可申候、

一指揮役之書面ニ有之候通、和蘭政府ニ於テ満足致候様、和蘭国ト日本ト取極、長崎ニテ和蘭人御取扱振御決着不被下以前ハ、指揮役伝授之面々、御当地ニ残シ候儀相成間敷、私ニ於テモ滞在為致候出来カタク候、

一右ニ付可成丈差急書付差上度奉存候、此段謹テ申上候、

加比丹
於日本和蘭領事官
ドンクル・キユルンユス

出島、千八百五十五年九月七日（卯七月廿六日）

右之通和解差上申候、以上、

卯八月

本木昌左衛門
志筑龍太
名村八右衛門
荒木熊八
西慶太郎
本木昌造
楢林榮左衛門
西吉十郎

二七三　汽船伝習生給金等和蘭甲比丹上申書〔海軍歴史抄〕

伝授トシテ居残候士官、受用銀之義ニ付
差出候横文字和解
長崎御奉行
荒尾石見守様へ

一加比丹於日本和蘭領事官、当七月廿六日之書面ニ、スームビング并御誂捻仕掛コルフエット船運用必用之伝授之為、船将之存寄ヲ以、士官并乗組之者数人日本へ相残シ候義ニ付申上置候、

一日本政府ヨリ和蘭商館ヘ脇荷銀ヲ以御弁ニ可相成受用増高ハ、居残リ候総人数分一ヶ年脇荷銀弐百拾貫目ニ相成申候、

一右高ハ如此算用仕候、士官・機関方・下等士官ハ、和蘭国并日本ヨリ同高宛致受用、即二重之給料ニ有之候、尤水夫・士卒ハ三重之給料ニ有之、即其一ハ和蘭国、其二ハ日本ヨリ受用致シ〔脱カ〕〔候、此者共ハ纔之給料ヲ受用致シ、〕爰元諸色高直ニ候間、右之通有之候儀要用ニ御座候、右定ニテ日本政府御承諾ニ相成可申哉、御沙汰被下度奉願候、此段恭敬申上候、

加比丹

於日本和蘭領事官
ドンクル、キュルシュス

於出島、千八百五十五年第九月八日（安政二年卯七月廿七日）

右之通和解差上申候、以上、

卯八月

本木昌左衛門印
志筑龍太印
名村八右衛門印
荒木熊八印

西　慶太郎印
本木昌造印
楢林榮左衛門印
西　吉十郎印

（大日本古文書（幕末外國關係文書）にて校訂）

二七四　軍艦昇平丸長崎港ニ入ル（海軍歴史抄）

安政二年九月朔日乗組、同月三日解纜、此船遲々ニシテ数十日ヲ経過シ、竟ニ十月二十日長崎港ニ達シ同日上陸ス、此航海中、長門国下ノ關ニ入ルヲ得タルハ、十月十一日也、上陸ノ薩士大坂ヨリノ来信アリ、云、本月二日二更、江戸大震、邸屋傾倒スルモノ十ニンテ八九、深川・本所・下谷・淺草・神田所在火ヲ失ス、圧死スルモノ無数、翌日火熄ト雖トモ震ハ尚止マス云々、衆聞此報、惘然如醉、

（海軍歴史（勝海舟全集）にて校訂）

二七五　海軍伝習所ヲ長崎ニ設ク（海軍歴史抄）

一七五の一

長崎海軍伝習所ハ、西役所ヲ以テ之ニ充ツ、是奉行之別役宅ニシテ、監察ノ此地ニ在勤為ス者、此宅ヲ以テ旅館トス、当時永井氏爰ニ住居ス、今仮ニ之ヲ教場トナシテ別ニ教場ヲ設ケス、我輩上陸マタ此邸中ニ居ス、後五六日ヲ経テ、永井氏諸士ヲ率ヒ、出島和蘭館ニ至リ、入門之式ヲ行フ、皆礼服ヲ用ユ、

一七五の二

教師之人名官職給俸

	一ケ月	一ケ年	
和蘭海兵指揮役	四百五十ギュルデン二貫八百十二匁五分	五千四百ギュルデン三十三貫七百五十目	第一等士官ク、セセ、ペルス、レイケン
士官筆頭	二百五十ギュルデン一貫五百六十二匁五分	三千ギュルデン十八貫七百五十目	第二等士官ア、ア、スガラウエン
第二等士官	二百廿五ギュルデン一貫四百六匁二分五リ	二千七百ギュルデン十六貫八百七十五匁	セ、エーグ
第二等公用方士官	同	同	セ、ハ、ブ、デヨング
第三等機関方	百廿五ギュルデン七百八十一匁二分五リ	千五百ギュルデン九貫三百七十五匁	セ、イ、ドールニキス
同	同	同	ハ、イ、エーフエラールス
水夫頭	百ギュルデン六百廿五匁	千二百ギュルデン七貫五百目	プ、クリユムプケ

同	同	兵卒組頭	同
同	同	イ、イ、シキンケレンベレトグ	同
七十五ギュルデン四百六十八匁七分五リ	九百ギュルデン五貫六百廿五匁	第一等水夫頭格プ、ウールセンビユルグ	同
百ギュルデン		第二等大工ム、ム、ヘルフイン	同
同	七百八十ギュルデン四貫八百七十五匁	第二等帆縫セ、ア、ファンウエールト	同
六十五ギュルデン四百六匁二分五リ		第一等水夫ク、ドイド	同
同		同ル、デコロウ	同
同		同セ、ホプペンブロウウル	同
同		同フ、ブラーウ	同
同		同ブ、イ、カラームル	同

同		第二等水夫イ、イ、ミツキマン	同
同		同ル、イ、ヘフテイ	同
七十五ギュルデン四百六十八匁七分五厘	九百ギュルデン五貫六百廿五匁	第一等火焚プ、ハ、レイスト	同
同	同	同ト、カラース	同
同		同イ、ク、ドールナール	同
同		同イ、ウスコツトマンス	同

一ケ年
三万千五百六十ギュルテン
百九十七貫二百五十目
金ニシテ
三千〇三十四両銀四十目

二七五の二　教授之学科

航海術　船将　兼松龜次郎
運用術　スガラウ氏　高松彦三郎
造船学　砲術　宮崎寛三郎
船具学　測量術　エーグ氏　伊澤兵九郎
算術　デヨング氏　伝習掛之地役人
機関学　機関司
砲術調練　セルジアント

我水夫ハ、讃岐国鹽飽島之民ヲ以テ、艦内陸上ニ就テ学ハシム、此島民ハ、元来我カ廻船ヲ乗ルヲ以テ常業トス、是昔ヨリノ慣習ナリ、故ニ此島ニ令シ、若年ノ者ヲ選ミ、以テ軍艦乗組ノ水夫トス、

池邊龍右衛門
緒方賢次郎
竹内勝三郎
伴　梅吉郎
佐々木門次郎
山本辰彌
中村六之助
土屋修藏
吉村虎二
武井茂四郎
中尾若次
磯部春平
近藤又兵衛
本庄寛次郎
戸瀬榮之進

二七五の四

会計及ヒ雑務取扱

徒目付
中臺信太郎
小田切鋼一郎
飯田孫三郎
石川周三

小人目付
山田八郎

上原源六郎
牧　斐之助
〔嘉カ〕喜悦平兵衛
横山喜三太
竹内卯吉郎
兒島半太郎
吉田鶴次郎
森田壽兵衛
城島左太郎
倉田錦三
松下豐三郎
武井孝三郎
成田郡三郎
東原清次
塚原英次郎
尾山與一郎
笠山東吾

伝習掛通弁官

岩瀬彌七郎
荒木熊八

西　慶太郎
木本昌造
楢林榮左衛門
西　吉十郎
末永猷太郎
横山又之丞
志筑禎之助
三島末太郎
石橋庄次郎
西　富太
荒木卯十郎
植村直五郎

二七六　諸藩伝習生人名〔海軍歴史抄〕

鹿兒島藩

木脇賀左衛門（後権一兵衛）
沖　直次郎（後二一平）
本田彦次郎
川南清兵衛
五代才助（友厚）

鎌田諸右衛門
加治木清之丞　波江野名糺スベシ
二之方良右衛門
成田彦十郎
磯永孫四郎
税所四郎左衛門篤敬
川村與十郎純義
北郷要人
近藤七郎左衛門
松本十兵衛

熊本藩

池部啓太
小佐井才八
奥山静叔
荘林吉太郎
荘林助右衛門

福岡藩

津田權四郎
平賀磯三郎

香西少輔
中上源八
伴新
西川吉郎左衛門
山崎雄
原田勝太夫
大原傳作
臼井鐵（鐵カ）次郎
立花五藏
大塚五郎大夫
河野禎造
原勝太郎
山路仁右衛門
松尾惣平
森十左衛門
小島傳次郎
磯山勝七
上田佐平
久我鬼平
中山半八

鹽川長次
山田與七
西村利平
川崎勘七
金子才吉
永野延助

萩藩

郡司千左衛門
正木市太郎
山田七兵衛
戸田龜之助
梅田寅二郎
波江（多カ）野藤兵衛
山本傳兵衛
戸倉豐之進
藤井百合吉
桂　右衛門
香川半介
栗屋與三
道家勝次郎

野村彌吉
原田熊五郎

佐賀藩

石田善太夫
佐野榮壽左衛門常民
池尻勘太夫
島内榮之助
秀島　轉成績
田中源右衛門
田中大之進
本島喜八郎芳武
宮田巳之助
宮地平太夫
秀島藤之助
石井茂左衛門
馬渡七太夫
千布右喜太
伊東兵左衛門
高岸兵次
小部松五郎

川副與八
中野助太郎
田口忠藏貞通
岡鹿之助喜智
澤野虎六郎種鉄
增田左馬進明道
眞木安左衛門長義
中牟田倉之助武臣
馬渡八郎俊邁
片江久一郎
增田孫作
原元一郎
小出千之助
龜川新八
石丸虎五郎安世
松村一郎助安種
松永壽一郎
倉永十三郎
武雄左平太
本島藤太夫

中野喜右衛門
石黑寛二
田中近左衛門
田中彌三郎
福谷啓太
馬場磯吉
石井健一
村山又兵衛
田崎内藏之進
平方治三太
坂田孫一郎

津藩

市川清之助
村田佐十郎
管野秀二（管カ）
渡邊七郎
橋本左源太
水谷八十八
瀧本重吉
深井半左衛門

山名正太夫
堀江鍬次郎
柳　宗五郎
水沼久太夫

福山藩

前田藤九郎
前田徳十郎
竹島猪八郎
内田松藏

掛川藩

甲賀郡之丞

〔以下、「海軍記事」にて補〕
〔前記中諸藩伝習生、右ノ人員ニテ完全調整トハ云ヒ難シ、必ズ脱遺セル者数名アラン、尚捜索シ得ルニ従ツテ記入スベシ、〕
〔海軍歴史（勝海舟全集）にて校訂〕

二七七　米国人ニ沿海測量ヲ許ス

○この文書は、本文第五〇号文書の安政二年八月十三日付老中達と同文により略す。よつて末部の注記のみを収む

十月廿二日、米国船一艘下田ニ来リ、測量願ハ軍船ヲ以テ答ヲ聞ク可キ旨ヲ云ヘリ、

若夫此時ニ先ンシ、我邦ニ於テ海岸測量ニ着手シアリシナラハ、焉ンソ彼等ノ請求ヲ拒絶スルニ甚タ難キコト有ランヤ、惜ム可キノ至リナリ、是ニ後ルヽ数年ニシテ、漸ク海岸測量之業、初メテ功ヲ起スニ致レリ、

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年
市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十五枚）」の記載あり〕

目録

大地震ニ就テ救恤
江戸大地震
齊彬公御事蹟抄
書類料紙ノ布達
軍備ノ為メ非常節倹ヲ令シ玉フ
大地震江戸中ノ惨状及謡歌
卯十月二日夜四ツ時大地震火災厄払ヒ

二七八　大地震ニ就テ救恤

二七八の一

濃州高須
松平攝津守比義

領分地震ニ付、陣屋住居向其外家中町郷共破損ニ付、拝借之儀被相願、可為難儀ト被思召候、当時御事多ニハ候得共、出格ノ訳ヲ以金千両拝借被　仰付候、

六月廿四日

右於御白書院縁頰、老中列座和泉守申渡之〔大垣藩主〕松平乗全

戸田采女正氏正

同文言

居城住居向櫓多門其外家中町郷共破損ニ付、金千両

松平遠江守忠栄

同文言

居城住居向所々櫓多門其外大破ニ付、金千両

〔柳沢保申、郡山藩主〕松平時之助保申

名代　初保德

柳沢民部少輔

同文言

居城住居向所々櫓多門其外大破ニ付、石垣崩所々
有之候付、金五千両
〔戸田光則、松本藩主〕
松平丹波守光則

同文言
金三千両
〔膳所藩主〕
本多隱岐守康融

名代
本多下總守
後主膳正

同文言
居城本丸天主并住居向所々櫓多門其外大破、石垣
崩所等モ有之候付、金三千両
〔大給近説、府内藩主〕
松平左衛門尉近説

名代
中野監物

同文言
居城天主台其外石垣并住居向櫓多門等破損ニ付、
金二千両
〔挙母藩主〕
内藤山城守政文

同文言
堀内住居向大破櫓多門等破損ニ付、金二千両
〔田原藩主〕
三宅對馬守康保

同文言
堀内櫓多門其外住居向等大破ニ付、金二千両
〔柳本藩主〕
織田安藝守信陽

名代
織田出羽守

同文言
陣屋住居向其外破損ニ付、金千両
右於波之間列座同前同人申渡之、
〔大河内信古、吉田藩主〕
松平伊豆守信古

同文言
居城本丸櫓多門其外大破、石垣崩所々有之候付、
金三千両
〔浜松藩主〕
井上河内守正直

同文言
城内櫓多門并住居向所々破損、石垣崩所等モ有之
ニ付、金三千両
〔田中藩主〕
本多豐前守正寛

同文言

城内多門并住居向大破、石垣崩所等モ有之候ニ付、金二千両

〔横須賀藩主〕西尾隱岐守忠受

同文言

居城住居向大破、石垣崩所等モ有之ニ付、金二千両

〔杵築藩主〕松平市正親良

同文言

居城住居向大破、石垣崩所等モ有之ニ付、金二千両

〔刈谷藩主〕土井大隅守利善

名代

三浦美作守

同文言

居城住居向其外多門等大破、石垣崩所等モ有之ニ付、金二千両

〔飯田藩主〕堀石見守親義

名代

本多大膳

同文言

居城住居向櫓其外大破、石垣崩所モ有之ニ付、金千両

右於芙蓉之間列座同前同人申渡之、

二七八の二　八月十三日

〔盛岡藩主〕南部美濃守利剛

従来勝手向不如意之処、近来打続領分損毛等ニテ、難渋ニ及ヒ、窮民共其外手当行届兼候由ニ相聞得候付、当時諸般御事多ノ折柄ニハ候得共、別段ノ思召ヲ以金五千両拝借被　仰付候、

右於御白書院縁頰、老中列座伊賀守申渡之内藤信親

二七九　江戸大地震

十月二日、江戸地大ニ震フ、死スル者二十余万本月ヨリ三ケ月間府下諸寺院埋葬ノ数二十一万余、是夜水戸藩家老戸田忠大夫・側用人藤田彪モ震死ス、二人ハ徳川齊昭ノ股肱タリ、曩キニ上田侯ニ謀リテ二人ヲ黜ケントス、然レトモ遂ニ成ラス、是ニ至テ死ス、故ニ大勢復タ変ス、

二八〇　齊彬公御事蹟抄郷友会諸氏所記

藤田彪、亦水戸藩邸ニ死ス、公コレヲ聞召シ西郷隆盛ニ謂テ曰ク、藤田ノ一死独リ水戸ノ不幸ノミナラス天下ノ不幸ナリト嘆惜コレヲ久ス、公井水悉ク塩気ヲ含ムヲ異トシ、又晴雨計ニ拠テ其将ニ変アラントスルヲ知リ、予メ有司ニ命シテ、布屋ヲ前庭ニ作ラシム、三五日ヲ隔テ、果シテ地大ニ震ス、公乃チ難ヲ布屋ニ避ケ、有司ニ命シテ邸内ヲ巡検セシム、還リ報シテ曰ク、家屋破ル、コト甚シ、公叱シテ曰ク、吾汝等ヲ遣ス所以ノ要、家臣ノ死傷ヲ検シ、傷ク者ニハ速ニ医ヲシテ薬セシメント欲スルノミ、家屋ノ破ル、問フ所ニアラサルナリト、又使ヲ高輪ニ使〔遣〕シ、齊興公ノ安否ヲ問ハシメ、公亦恙ナキヲ聞キ意始テ安シ、明日又使ヲ縉紳先生ノ家ニ使ハシ金若干円ヲ齎シ、存問セシム、公急難ニ臨ミ親ヲ愛シ民ヲ恤ム、彼交際ニ於ルト一ツ欠ル所アルコトナキ此ノ如シ、隆盛嘗テ従容トシテ公ニ謂テ曰ク、人皆君洋癖アリト称ス、臣窃ニ君ノ為ニコレヲ惜ム、敢テ問フ何ソヤ、公直ニ西人ニ得ル所ノ利銃ヲ取リ、跣シテ庭ニ出テ隆盛ニ謂テ曰ク、吾今卿ト闘ハン、卿何ソ卿カ嗜ム所ノ棒ヲ振フテ我ニ臨マサル、隆盛匍匐シテ地ニ伏シ額ニ汗ス、公声ヲ励シテ曰ク、卿今我ト闘フコト能ハスンハ速ニ退キ去レ、明日隆盛ヲ召ス、隆盛曰ク、吾今日朝ニ死セント、隆盛既ニ死ヲ決シテ朝ニ至ル、公召見テ座ヲ賜ヒ、諭スニ万国形勢ノ変ヲ以テシ、且曰ク、西人用ユル所ノ銃砲素ヨリ実戦ニ利アリ、今彼ノ長ヲ取リ我ノ短ヲ補フ、亦善カラスヤ、初メ隆盛郡吏ニ従テ遊フ、名ヲ知ラル、所ナシ、去テ江戸ニ遊ヒ芝邸ニ在リ、公其賢ヲ知ルニ未タ甚タ任用セス、纔ニ庭方トナン、常ニ隆盛ニ命シテ樹木ヲ移植セシメ、公自ラ莅ミ、園林ニ在テ窃ニ与ニ倶ニ天下ノ事ヲ議ス、人皆以テ林泉ノ為メナリトシ、漢昭烈ノ諸葛ニ於ケルカ如クナルヲ知ルモノ鮮シ、

茲ニ記ス処、甚誤マレリ、公ハ西郷カ言ヲ聞キ玉ヒ微笑シテ、万国ノ形勢及ヒ我国ノ将来ヲ憂慮セラル、旨ヲ示サレタリト、詳ナルハ第〔ママ〕巻ニ記スカ如シ、利銃ヲ取リ庭ニ下リ云々、公如此青年者ノ挙動ヲナシ玉フ御性質ニ非ラサルナリ、、点ヲ付シタルハ誤ヲ匡ス、

二八一　書類料紙ノ布達

諸向ヨリ差出候書附類、麁紙相用候様相達置候得共、此節柄ノ儀ニ付、猶更在合ノ何紙ニテモ相用、且又字体並文言ノ儀モ如何様トモ相略シ、趣意ノミ相分候様

認差出候テモ聊不苦候段、向々へ可被達置候事、
十月〔十二日〕

右之通従公義被仰渡候条、此旨向々へ可申渡候、
十月十五日安政二年　石見島津久浮

二八二　軍備ノ為メ非常節倹ヲ令シ玉フ

一近年異国船手当ハ勿論、万端及入価候折柄、又候今度稀成地震ニテ、芝屋敷ヲ始メ諸屋敷大凡及大破、修覆其他莫大ノ入価差見得当惑ノ至候、右ニ付テハ出銀等不申付候テハ難相成時節ニ候得共、近年一同及困窮候折柄故、出銀ノ儀一切不申付候間、弥節倹ヲ守リ〔相守カ〕、士道厳重ニ心得候様、分テ可相達候、

一江戸長屋向、近年ハ自然ト広大ニ相成、各ヲ初メ手広ニ住居候様、第一節倹ノ為メ不可然候間、以後何役ハ何間、何人賦ハ何程ト申儀、長屋間数相極候様吟味第一ニ存候、定府ノ義ハ家内ノ者モ有之候間、一様ニハ難相成儀可有之候得共、是又大概ノ定相立候様吟味可致候、〔第一ニ候〕〔順〕

一家老用人以上、交代ノ節ノ為メ西向屋敷へ長屋有之候得共、以来上屋敷内へ取立〔建〕、西向屋敷へハ家老用人ノ長屋不拵様可取計候、

一近年ハ殊ノ外物入打続候上、以後如何様ノ臨機〔臨時〕〔順〕ノ儀到来モ難計候間、弥無用ノ費無之様可心掛、当時迚モ格外ノ倹約相用候事ナカラ、他家ニ競候得ハ十分共難申訳モ有之哉ニ存候間、膳所向入用ヲ始メ万端心付候儀ハ其向々ヨリ為申出候テ、節倹ノ道行届候様吟味専一〔第カ〕ニ存候、右ニ付存寄有之者ハ、無遠慮存寄書差出候様能々可申達候〔渡カ〕、

〔脱カ〕〔順は「（十月）二十四日公手書論重臣以邸舎制限等」と記す〕〔卯十二月〕

是月家老島津久寳ニ命シテ、更ニ風ヲ変シ、俗ヲ敦フスル〔順聖公年譜（京都大学所蔵）にて校訂〕ノ令ヲ発セシム、公嘗テ武田某（伊賀）ヲ召見テ語言ヲ賜フ、武田ハ水戸ノ家老ナリ、出テ人ニ語テ曰ク、吾薩侯ノ賢明ヲ耳ニスル久シ、我今日幸ニ侯ニ見ルコトヲ得、其賢実ニ古今ニ卓越ス、水戸ノ士コレヲ聞キ、亦皆崇奉景慕シテ已ム能ハス、

二八三　大地震江戸中ノ惨状及ヒ謡歌

安政二年十月二日夜地震、

天災ノ免カレ難キコトハ、堯舜ノ御代ニ九年ノ洪水アリ、湯ノ時ニ七年ノ大旱アリト云ヘハ、非常ノ天災ハ聖朝ノ

御代トテモ遁レ難キ事知リヌベシ、然レハ方今万民太平ノ　御代之御恩沢ニ浴シ、往古ヨリ種々ノ天災アリテ、厄ヲ蒙リ、非命ニ没シタル事ヲ聞ト雖トモ、只モノ、本・年代記ノ上、或ハ老翁ノ茶話ト而已思ヒ居タルヲ、近年畿内ヨリ東海道相模辺迄地震津嘯(ツナミ)ノ災厄アリテ、人民多ク死亡セル由ナレトモ、大江戸近クニハ其憂患ナク、諸人快楽安逸ニ恒ノ産(ナリワイ)ヲ守リテ、晨夕余処ノ事トノミ聞過シ居タリシニ、今年安政二年十月二日夜亥時大地震アリテ、大江戸近国四方二十里計ハ皆此災ニ罹レリ、其カ中ニモ取分大江戸中ヲ以テ太酷(ハナハダ)ト言ハンカ、抑其地震ノ発スルヤ、地底ニ大砲ノ音ノ如キ響アリテ、忽地上激浪(アラナミ)ノ拍ツ如ク震動シ、地裂天墜ルカト驚カレ、見ル々々百万ノ人家・倉庫・神社・仏寺傾覆シ、是カ為ニ打殺サレシモノ幾何ト云フ数ヲ知ラス、或ハ梁ニ押サレ、或ハクジケシ柱ニ狭マレ、又瓦屋根二階ノ下ニ敷カレ、土蔵ノ壁ニ埋モヒ抔シタル男女老少泣サケビ、助ケ呉レヨ起シテ給ハレト、ヨバハル声物スゴキ、火又四方ヨリ炎々ト燃ヘ出(ホノホ)ス天ヲ焦スト雖トモ、人々畏レ周章(アハテ)タル折柄ナレハ、心神混乱シ酔ルカ如クニテ、防キ消サントスル念ナシ、火ハ四方遠近難計ト雖トモ三十余処計ニ見ヘ、何レノ方ヨリ風吹来ルトモ、市中残ル方ナク焼ケナン事必セリトミエシサマヲ、其夜幸ヒニ風常ヨリモ静ニシテ、火勢弱ク火先キ遠キニ及ハサレハ、火消人足抔モ甚少カリシカ、暁近クナル頃悉ク消シオヲセタリ、是乍併災ノ中ノ幸ニシテ、此夜風ナキハ産土(ウブスナ)之神々ノ守リ給ヘルナルベシト諸人言ヒ合ヘリ、扨夜明ケテ後遠近ノ有様ヲ聞クニ、其噂トリ〳〵ニテ虚実トリ交ヘテ証ト難キ事而已多カレハ、已レ四方ノ知己ヲ訪フ序、其所々ノ様ヲ見ルニ随ヒ是ヲ図シ、聞クニ随ヒ是ヲ記シ、後世ノ児輩ニ此災死ヲ知ラセ、枕高ク安ラカニ眠レル　御代之辱ナサヲ知ラシメントテ、一ノ冊子ニ綴リ置キヌ、同シ大江戸ノ中ニテモ其災厄ニ軽重アルコト抔読ミモテ知リ給ヘト云、

日本橋ヨリ南方中橋迄、表側破損少シ、同所西方西河岸ヨリ、呉服橋数寄屋町・檜物町・上槇町・桶町辺破損、同東方四日市平松町・小松町・箔屋町・福島町新肴場埋立地・大鋸町・松川町・本材木町六丁目迄之中、家蔵共大破損、崩家、潰家多シ、

南鍛治町狩野屋敷・五郎兵衛町・北紺屋町・疊町大根河岸・常盤町・太田屋敷・具足町・炭町・因幡町・柳町・材木町八丁目河岸迄焼ル、右之町々土蔵一ケ所モ残少ナ

シ、
海賊橋坂本町牧野様上屋敷北東方破損、九鬼様上屋敷表側所々大破損也、細川様中屋敷破損、神田代地崩家アリ、越中様上屋敷大破損、河岸ノ土蔵五ケ所潰レ、松屋町高輪新規代地破損崩家ナシ、本八丁堀通五丁目迄破損、河岸通物置所石垣等破損、金六町ヨリ日比谷町ノ間大破損崩家潰家アリ、亀島町八丁堀御組屋敷破損崩家アリ、同年十二月八日夜、水谷町ヨリ出火、同南方水谷町四丁目・上地町・竹島町弐丁與作屋敷・地蔵橋通迄焼此辺野原ノ如シ、△北方茅場町薬師堂破損、山王社燈籠側石鳥居其外大破損、同所裏茅場町大破損、半丁余潰家アリ、同所河岸通酒蔵大破損ナリ、霊岸島川口町・霊岸島町・長崎町・白銀町大破損、東湊町越前様大破損、同所越前堀潰家アリ、
深川ハ他ニ勝レテ、武家町家共ニ崩家多ク、安休ナルハ一軒モナシ、諸人共生タル心地モナカリシカ、
公ノ御救志有人ノ助力シテ、困民ヲ救ハレシカハ、周章ノ体モ改、玉ノ春ヲ迎ヘ門松ノ色深ク仮宅ノ賑ヨリ限ナキ愁サヘ鮮シ、客ハ実ニ多ク移変人心モイヤマシ勇マシク、是普ク大君ノ御慈愛ヨリ起ル所ナレハ、唯々御国恩ヲ忘レサル様ニ心掛ベシ、
同所南方阿州様中屋敷・戸田采女正様中屋敷・松平下総守様下屋敷大破ニテ火災ナシ、△同所三拾三間堂棟ノ中ニテ烈ケ、軒口崩、瓦前後ヘ七部落、其外大破損、其後同三辰年　月　日夜大風雨ニテ皆潰洪水ノ由、△同所木場ヨリ此四方武家・町家共崩家潰家多ク悉ク記シ難シ、
同処和倉佐賀町代地・本所石原代地町平野町添地共焼ル、同北西方今川町・永堀町・萬年町・正覺寺橋通崩潰有リ、富岡橋北方陽嶽院・法禅院・心行院・海福寺・増林寺・惠然寺等大破損、此四方武家・町家共崩潰家甚多シ、海浜大工新町御救小屋建、△同寺町通浄心寺表門中門潰レ、門前看題石倒レ折ル、塔中三軒及手水舎潰レ、其外破損、本堂祖師堂無異、△同所霊岸寺及ヒ塔中悉ク潰レ、其外大破損、同所萬祥寺・善福寺・貞光寺・宜雲寺等大破損、右之内諸寺院燈籠碑石等悉ク倒レ折ル事甚多シ、
同所伊勢崎町一丁目焼ル、△東方洲崎弁天社無異、境内僧房其外茶屋等破損、△六万坪細川様下屋敷・小笠原様下屋敷・相摸様下屋敷・林様中屋敷・増山様中屋敷・出羽様中屋敷、同北方石島町一橋様下屋敷・本多豊前様下屋敷・大久保佐渡様中屋敷・肥後様下屋敷・戸田因幡様

下屋敷、此四方小屋敷民家共大破損崩家多シ、同所八右衛門新田民家多ク崩ル、同砂村龜高大塚逆井（サカリ）元八幡小名木川迄ノ内崩レ家多シ、△同東方一ノ江村八十六軒崩ル、深川柳橋近所ニテ、伊賀様下屋敷・秋元様中屋敷・隱岐様下屋敷・永井様中屋敷・越後様下屋敷・大黑田様下屋敷、此辺武家・町家崩レ多ク悉ク記シ難シ、

上橋辺ニテ、仙臺様藏屋敷・久世様中屋敷等、又町家大破損、河岸ノ石垣等落チサル処ナシ、同処牧野備前様中屋敷・秋田様・朽木様・本田日向様等大破損、△同北方萬年橋近辺大破ニテ、崩家多シ、同本所一ツ目石垣崩レ暫之内舟渡ノト成、同所弁天社大破、其外諸碑等悉崩ル、新大橋東方御舟藏無異、其翌年安政三辰年（マヽ）月（マヽ）日、月日紀ス、大風雨ノ荒ニテ、御藏潰レ七ケ所残リ、御舟等多ク御破損ト成、△御舟藏前町ヨリ、地震ノ節出火、同所舟役屋敷・八幡旅所同御旅町再幸寺焼ル、同所南方要津寺小屋敷数軒焼ル、六軒堀町三丁・八名川町二丁同所御籾藏ハ半焼、一ケ所潰、歯神社火ノ中ニテ残ル、小屋敷数軒焼ル、此辺悉崩ル、

同所川向東方北森下町三丁焼、同処長慶寺ニテ止ル、南方北六間堀町・南六間堀町四町南森下下神明宮火ノ中ニテ残ル、同処小笠原佐渡様下屋敷・井上河内様下屋敷焼ル、深川元町常盤町三丁目同所太田攝津様焼ル、東方三軒町南方高橋様ニテ止ル、此近辺大破大小崩類焼ス、

同東方深川西町焼ル、此間武家・町家共大ニ崩ル、同北方德右衛門町二丁焼ル、此辺武家・町家共同断、同所河岸石垣悉ク崩ル、△本所兩國回向院本堂ハ前年類焼ニテ無之、鐘楼堂潰レ諸碑倒レ、家其外僧房等大破損、此東方北方武家・町家共大破損崩家甚多シ、

本所東方相生町四丁目ヨリ緑町一丁目・二丁目迄焼ル、同断河岸石垣崩、同北方津輕様中屋敷迄ノ内小屋敷大破損崩等多シ、同東方松平筑後様下屋敷・永倉町・長崎町迄武家・町家共大破崩所多シ、

同東方緑町一丁目・二丁目焼ル、三丁目残、四丁目・五丁目花町迄焼ル、同北方松平能登様下屋敷・植村帶刀様北方武家町家大破損、所々崩家多シ、

北本所石原牛御前旅所弁天小路一丁余焼ル、△此辺武家・町家共大破損崩レ数ケ所、

本所中之郷石原町二丁目焼ル、南割下水辺ヨリ、所々武家小屋敷崩レ家ヨリ寺院等ノ破損、土蔵安体ナルハ一ケ所モナシ、△同北方石原町・荒井町二丁焼ル、

同北方北割下水瓦町一丁目焼ル、同所松平周防様中屋敷
越前様下屋敷・細川能登様中屋敷焼、料理屋小倉庵焼ル、
同東方柳島妙見堂無異、外ハ潰ル、此辺勤士堀辺其外四
方ノ小屋敷民家潰レ家多シ、小梅村常泉寺本堂・祖師堂
無異、境内大破損、
東南方本所五ツ目渡シ場際五橋町半町余焼ル、此辺以ノ
外破損焼失、同所石垣ハ大川迄崩所甚多ク、川端物置崩、
薪其外川中ヘ落込散乱スルコト云フ計モナン、
亀井戸天神社無異、境内大破損、同所門前町一町焼ル、
又同町角自身番所ヨリ出火、此辺小火所々ニアリ、猶又
近辺小屋敷民家崩家潰家多ク、凡焼失同様ノ処多シ、
吾妻森木下川辺五百羅漢其外此近辺四方崩家甚多ク、潰
家等悉ク記シ難ク、榊原様下屋敷大破損、
同西方法恩寺門前出村町其外両側共焼ル、△三圍稲荷白
髭社内木母寺梅若塚・向島一円隅田川西方千住宿五橋向
之分ハ略之、南方民家・旅籠屋大破損、中程ニ崩レ家ア
リ、
小塚原町両側焼ル、此地最揺強ク土蔵等残所ナシ、同南
方中村町大破損潰家多ク焼失同前、南方山谷浅草町二丁
目、同南方元吉町新鳥越町四丁目東禪寺・春慶寺・道林
寺、同東側教傳寺・福壽院・宗林寺・惠念寺・光照寺・
源照寺同三ケ寺、同二丁目大秀寺・善白寺、同所東側源
壽寺・端泉寺・安一寺・遍照寺、其外境之池辺迄ノ中德
宗寺院本堂僧房碑燈籠一切破損ノ儀多ク、悉ク記シ難ノ、
北東ノ方ヨリ西ノ方ヘ所々、
吉原中之町道ヨリ、伏見町・江戸町二丁目、同南方十二
軒揚屋町北方西河岸角町、同南方三日月等長屋家七ケ所、
京町二丁里俗云新町等廓中悉ク焼失、尤五ケ所土蔵大破
損ニテ残ルト云ヘトモ、一円其跡野原ノ如シ、
吉原西方大音寺前町々大ニ崩レ焼失同前ナリ、田中新鳥
越辺潰家多シ、△千束長國寺鷲大明神本社破損、僧房碑
等大破損、此辺小屋敷町家共大ニ崩ル、△龍泉寺其外此
四方崩家多シ、
吉原日本堤田町編笠茶屋両側二町、袖摺稲荷同一丁目三
谷堀ノ口迄焼ル、同所西之方残ル、町家大破損焼失同前、
吉原東方隅田川眞崎稲荷本社無異、鳥居燈籠砕ル、同所四
方民家多ク崩ル、同所橋場舟渡場南方銭座迄大川際焼ル、
同所西河岸福壽院法源寺大破損、僧房崩レ、同所門前町
焼ル、同所今戸町蓮宗寺・妙高寺・長昌寺本堂破損、僧
房大破、其外崩多ク、安昌寺・稱福寺潰所多シ、同所西

今戸橋北方今戸町東側一丁焼ル、同西側松林寺・本意寺・慶養寺大破損崩多シ、右之寺院等何レモ碑燈籠悉ク倒レ散乱之体、悉クハ記シ難シ、

同西方三谷橋砂利場・新鳥越一丁目・瓦町・待乳山東方村方悉ク崩ル、

新吉原ハ五町トモ潰家多ク、所々ヨリ一時ニ出火シテ、遊女ハ元ヨリ、客人抔多ク死セシ中ニ、毎夜此ニ入来ル按摩タチ、其人数モ多カルニ只二人死セシト云フ、盲人乍ラ能クモ逃出セシモノナリ、遊女屋ノ内ニハ、京町一丁目岡本楼・同二丁目松葉屋、角町若狭屋、江戸町二丁目岡田・伊勢屋・三浦屋・吉右衛門等ハ別シテ潰レ夥シク、抱遊女抔モ過半焼死シタリ、中ニモ三浦屋ノ家ニテハ、遊女ヲ撰ミ穴蔵ヘ入レ助ケントセシニ、火入テ皆々焼死ストカヤ、廓内焼亡人御調ノ高六百三拾余人ト云フ、

浅草馬道道哲木戸際ヨリ焼、同所谷中天王寺門前代地町・山川町焼、同所西方寺々大崩ニテ止ル、同南方西側不二下少シ残リ、夫ヨリ吉祥院高裏・徳應院庚申堂、延命院地蔵堂・誠心院・無動院・鳥寺教谷院ト申寺等、何レモ数百軒ノ裏店悉ク焼ル、同南方浅草寺随身門前居酒屋マテ焼ル、同向側ヨリ西方南馬道迄一丁半焼ル、右前書道頭ヨリ是迄南北九町余焼ル、

浅草寺本堂無異、諸堂僧房大破損、△五重塔九輪曲ル、又同町馬道東側ニテ、又南方辨天堂青龍院百觀音堂・泉凌院・泉藏院・富士宮修善院・寅藥師妙德院迄焼ル、同南方廿三夜堂□(不明)タラ堂姥ガ池旧跡一ノ權現マテ焼ル、同随身門通リ東方ニテ金剛院・覺善院・法善院・妙音院・顯松院、同南側自證院地蔵堂迄焼ル、

猿若町芝居座一丁目中村勘三郎・二丁目市村羽左衛門・三丁目河原崎權之介、又操座大薩摩吉右衛門・結城孫三郎焼、同楽屋新道役者数百軒裏店悉ク焼ル、

浅草寺境内ハ観音堂西ノ破風大イニ損ス、五重塔九輪曲ル、荒澤堂奥稲荷・西ノ宮稲荷・日音院太神宮金比羅・松尾社老女辨天寺不残潰ル、雷神門ノ雷像コロビ落ル、ヌレ仏倒ル、、坊中崩甚多シ、観世音ハ奥山花屋敷ェ立退カセ奉ル、田町又ハ聖天横町ヨリ出火ハ馬道ヲ限リ、少シモ境内ヘハ入ラス、

北谷中ノ寺院悉ク潰ル上焼失ス、南谷ハ潰多シト雖トモ火ナシ、十月中大方奥山ヘ諸人野宿スルモノ多ク、又猿若町ハ普請新シキ故ニカ土蔵ノ外イタミ少シ、類焼セシハ吝ムベキナリ、

淺草門前東西仲町・竹町・材木町大破損崩家多シ、同南方駒形觀音堂南方ヨリ焼ル、同所駒形町初富士ト云フ料理屋同南方ヨリ南側焼ル、諏訪町諏訪明神焼ル、黒舟町両側谷中清水稲荷焼ル、同門前谷中八軒町代地三好町御馬屋河岸渡口迄焼ル、同所西側榧寺門前残リ是レニテ止ル、

此辺総テ大破損崩処多シ、同処ヨリ南方旅籠町・森田町、御蔵前天王橋天王町・瓦町・茅町等大破損、右町々西裏通リ其外崩レ多シ、同南方柳橋両國吉川町裏通リ迄大破損、福井町久右衛門町鳥越天文台三筋町小揚町三軒町田原町等大破潰家アリ、

三絃堀佐竹様七ツ蔵破損、此四方武家・町家大破、同年〔マ〕月〔マ〕日下谷廣徳寺前里俗源助横町ト云所アリ、出火ニテ小屋敷・組屋敷、佐竹様・立花様・加藤様裏長屋十間程焼ル、曲淵様小笠原若狭柳沢村松平下總様向河岸御徒組屋敷焼ル、是ニテ止ル、△七曲リノ辺崩所多シ、△淺草西方ニテ新鳥越加藤様上屋敷・南方慶印寺・幸竜寺堂無異、僧坊破損、日輪寺・天嶽院・東光院・同門前海禪寺・下谷山崎町迄武家・寺院・町家共崩所多シ、△同所蛇骨長屋・誓願寺・淺草坂本町・淺留町大破崩所多シ、△西方善徳寺・慈源寺・源願寺・源空寺崩ル、

東本願寺添地大破崩所多シ、同処愼隨院門前町大破潰家多シ、焼失同前ナリ、

乞胸（コウムネ）山本仁太夫構内一丁余焼ル、△東本願寺堂少シ破損、僧坊大破、同所田原町口裏門同西門潰レ、塔中三院崩ル、其外大破損東方焼失同前也、

新寺町通菊屋橋西方寺行安寺東國寺門前町一丁焼ル、同向側ヨリ堀端手前迄焼ル、△同寺町通リ本藏寺・廣大寺・東嶽寺大破損、同門前町崩家アリ、△同所西光寺・西照寺下谷辻番屋敷等大崩、△同西方永照寺門前・宗源寺門前町・廣徳寺・下谷車坂町北方武家諸寺院町家等大ニ崩レ、潰レ所悉ク記シ難、

入谷庚申堂北方正覺寺・良源院等大ニ崩レ、諸碑等散乱ス、三崎稲荷同所金杉上下町隨徳寺坂本東裏町通迄悉ク崩レ、下谷山崎町弐丁目御切手町焼ル、同坂本町ヨリ御具足町車坂町ヨリ正寶寺門前町迄武家共大ニ崩ル、

上野東叡山寛永寺本堂無異、輪王寺宮泰平、同所火除地宮様ヨリ御救小屋建施行人多ク有之、略之、

二八四　卯十月二日夜四ツ時大地震火災厄払ヒ

ア、ラ、デツカイナ〳〵、今晩今宵ノ天災ヲ、神之力デ払ヒマセウ、十月二日三日町並御門ヲ眺ムレハ、三国一夜ノ其内ニ、土蔵ヤ壁ノ不事ノ山、斯ルウキメニ相生ノ、松丸太ヤラ杉丸太、飾リ立タル諸道具ヲ、御庭ノ外ヘ持運ヒ、野宿スル身ノ苦ハ、病ヒ五七カ雨ト降リ掛ル、瓦ヤ石ノ目ニシミテ、涙ニシメル焼原ノ、昼夜ネズ番自身番、火ノ用心ヤ身ノ用心、春ナラネドモ皆人ノ、万歳楽ト歌ヒ染メ、数ヘタ柱モ折レロノ、御目出度ナル人ノ山、是レモ世直シ出雲カラ、立返リタル神々ノ、踏ミ固メタル芦原皇国(ミクニ)、千代ニ要石ノ盤トナリテ、苦ノハスユルガヌ御代ヲ憚カラズ、又モヤヒマヲ嗅キ付ケテ、ヌラクラ物ノ鯰メカ、ユルグ尾鰭ヲ動カサバ、鹿島ノ神ノ名代ニ、此事フレガ圧シ付ケ、高天カ原ヲ打チ越シテ、ミモスソ川ヘサラリ〳〵、

二八五　市川難十郎外郎売(ウイロウ)ノセリフ

拙者上方デ動(ウゴ)シハ、先達テ御存ノ御方々モ御座リマセウ、御江戸ヲ始テ二十里四方騒動、畑原一二町中右ヲ左ヘ乱ケ間敷、蔵ヤ土塀モ大破ニ致シ、唐人国ハ沙汰モナク、我朝ニモ稀成狼敗、外郎動天香ト名ハ賜リ、只今此崩レ世上ニ広マリ、方々ヲ大道ヘ出シ、米俵ヤ炭俵ヲ敷テ屏風障子ヲ御立掛ケ、御立合モ浮説ヲ信シ外ヘ飛出ス、折カラハ親方抔ハ右リノ方、女中ヤ下郎ハ左リノ方、八方ニ野宿ヲナサレ、八ツ棟作リモ堂作リモ、破風モヒサシモ、ギツクリト夥敷崩レテ御座ル、扨此崩第一奇妙ニハ、銭金入ラズ〳〵デ逃広庭明地、小棒ヲ突立テ莚ヲ引張、ソリヤ〳〵〳〵〳〵震テ来ハ、小米・生米・飯櫃イビツ、親モ抱ヘ子モ抱ヘ、親カラ子カラ長夜乍ラ青天井、今日ノ雨空ナラナマ中ニ、チヨコト四五万軒外ヘオチヤタチヨ、町数八百蔵数万瓦ハガラリカラ〳〵〳〵〳〵、高ノ山夕部コボシタ又コホシ、壁土ゴマカラ又ゴマガラ、凸凹(デクボク)〳〵三凸凹、オツト合点ジヤ心得田甫ヤ藪ノ中、貴賤群集ノ、花ノ御江戸ノ花ヤカニ、枝モナラサス静ニナレバ、皆々御心カ御和ラギヤウト云フ、産子這子ニ至ル迄心落附、御慈悲ノ御救桶出セ鉢ダテ摺鉢バチ〳〵算盤勘定永当々々、東方世界息セイ引張リ呼ダモ欠ダモ忽治リ、シヅゲク世直シ喜ヒザ、メク万歳楽、桁梁取テ照覧アレト、此敬ツテ家ノ曲リヲ直サツシヤリマセンカ、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に表紙の文字の外に「元国事軼掌史料（紙数九十三枚）」の記載あり〕

目録

梵鐘鋳換官府ニ対ス議案ノ二
諸国寺院之梵鐘大砲小銃ニ可鋳換旨内慮伺
梵鐘為差出方之手続評議案
梵鐘鋳換触書案
梵鐘鋳換諸宗触頭へ諭書案
梵鐘鋳換勘定奉行へ達書案
梵鐘鋳換大小監察へ達案
梵鐘鋳換事件水戸殿御城附へ達書案

諸宗触頭共ヨリ諭書案

二八六　梵鐘鋳換官符ニ対スル議案ノ二

安政二年卯六月廿六日指上候分

寺院之梵鐘御引上方等ノ儀御調、三奉行始ヨリ御懸合之書面、并評定所一座寺社奉行存意申上候書附写

水戸公御老中へ被　仰達候御書之写

梵鐘ノ書類急キ昨日返上之節認落候間、左ニ御相談申候、

一御勘定奉行評議ノ中ニ、一円ト相成候テハ人気ニ拘リ云々、一ト通尤ニ候得共却テ不平ニ相成可申候間、ヤハリ本山并古来ノ名器当節時ノ鐘ニ不用分ハ一円、半鐘迚モ鐘ニ相違無之候間、御引上ケ可然候、

一於公辺ハ御役人正候得共、侶僧ハ兎角量（墨カ）魯同様計策ヲ以欺キ候間、寺社奉行家来抔不平不正之扱無之様致度候、

一天下中ノ大小梵鐘凡テ其数ヲ調候上、

一旦ハ公辺ノ御品ニ御引上ケ、諸大名（其後諸大名〔水戸藩史料〕）海岸ノ多少ニヨリ被下

ニ相成可然、此儀ハ早ク御達出候方可然候、

一第一ニ両山（両山ハ寛永寺芝増上寺ヲ云）ヨリ御手始メ、

公辺ニテ諸国ノ手本ヲ御出シ肝要ト存候、

御付札

本文鐘何程此貫数何程ト相分リ候上、不残折キタキ（打クダキ）（水戸藩史料）海岸ノ多少ニ寄可然程宛被下ニ可相成候、左候得ハ自領ノ鐘ノ外、他領分ノモ被下、又ハ自領ノ分モ半被下、残ハ外々ヘ被下候様相成可申、

左候時ハ

公辺ヨリ拝領之廉相成候間可然候、扨被下候名目ハ、武備為手当銅材何万何千貫被下ト申振可然哉、（水戸藩史料（吉川弘文館）にて校訂）

シラベ

梵鐘為差出方之儀ニ付、別紙之通寺社奉行相伺候趣勘弁仕候処、古来之名器之差別兼テ差定モ無之候ハ、追テ心得方可相伺トノ趣、夫々見込モ可有之哉ニ候得共、素々古来之名器ト申ハ稀ナル儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分并

公武格別之

御由緒等有之候品ハ、名器ニモ准シ取扱候テモ可然哉、併右ハ追テ巨細取調之上、夫ニ向ヒ尚勘弁之上相極候方ニ可有之哉、本寺之儀ハ諸家本山其外格別大寺之分ニテ可然哉ニモ候得共、大小ニ不拘平日本寺ト唱来、諸事右之取扱ニ相成候上ハ、触面ヘ対シ、右様ニモ難相成、且ハ世上之梵鐘今般一時ニ御取上ニモ及間敷、先ツ此度ハ混雑無之承服為致候方専要之儀ニ付、伺之通大小ニ不拘本寺之分、并触頭懸所等ハ相除候方可然乎、梵鐘ニ換候品之儀、半鐘迄御取上ニテハ差支之筋出来可致哉トノ趣無謂儀ニモ無之、余リ厳酷ニ過候モ穏ナル間敷候間、半鐘之儀ハ取上ニ不及、在来之分為相用候儀ハ苦カル間敷哉ニ付、太鼓或ハ在来之半鐘、板木等為相用候儀、伺之通ニテ可然哉、且梵鐘為差出方取扱之儀ハ寺社奉行ヘ一手ニ被　仰付、触書取調之儀モ寺社奉行ヘ被　仰付候様ニトノ儀ハ、至極尤之筋ニ付、何レモ伺之通相心得候様相達候方ニ可有御座候哉、左候ハ別紙之通相達可申哉之事、

可相達趣

伺之趣古来之名器之差別兼テ差定ハ無之候得共、素々古来之名器ト申ハ稀ナル儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分并

公武格別之　御由緒等有之候品ハ、名器ニモ准シ取扱候テモ可然哉、右ハ巨細取調之上、夫ニ向ヒ尚勘弁致シ取調可被申聞候、本寺并梵鐘ニ換候品之儀ハ、伺之通可被心得候、且又梵鐘為差出方取扱之儀ハ、寺社奉行ヘ被　仰付候トノ儀、至極尤之筋ニ付、何レモ窺之通相心得精々入念御趣意行届候様、厚ク可被相心得候事、

巻紙表付札
最初之達　大目付海防掛御目付　評議末出

覚

右ニ同

三奉行
大目付海防掛
御目付海防掛

梵鐘鋳換之儀被
仰出候ニ付、諸寺院ヨリ梵鐘為差出方其外取計振之儀評議致シ、触書案ヲモ取調、早々可被差出候事、

巻紙表付札
二度目之達　大目付海防掛御目付　評議末出

右ニ同

三奉行
大目付海防掛
御目付海防掛

梵鐘鋳換之儀被
仰出候ニ付、諸寺院ヨリ梵鐘為差出方其外取計振之儀評議致シ、被申聞候様相達置候処、大意左之通相極候テハ如何可有之哉、

一御府内并国々御料所之分ハ、　公儀ヘ為差出可申候、
一万石以上領内之分ハ、領主之存寄次第為取計可申候、
一万石以上知行所ノ分ハ、　公儀ヘ為差出可申候、
　但自分ニテ鋳換之儀相願候ハ、其通ニモ可被　仰付候、

右之通ニテ不都合之筋モ有之間敷哉、一体御国内ニ壱挺モ多ク大砲出来候ハ、則
御国之強ミニ付、不残
公儀ヘ御引上ケニモ及ヒ申間敷哉ニ候間、右之趣ニテ

異存モ無之候ハ、取計方巨細之儀早々取調可被申聞候事、

二八七　諸国寺院之梵鐘大砲小銃ニ可鋳換旨内慮伺

寺社奉行

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘、本寺之外、古来之名器当節時之鐘ニ相用候分相除、其余可鋳換大砲小銃之旨、被仰出候儀ニ付テハ、評定所一座ヨリ追々評議致シ申上置候次第モ有之候得共、寺院取扱向之儀ハ素ヨリ、私共職掌之儀ニ付、最前ヨリ深心配仕被　仰出候御趣意柄諸国一般ニ貫通イタシ、僧侶ハ勿論門徒之モノ共迄モ聊異儀無之敬承イタシ穏順ニ差出、万一心得違之輩モ有之候ハヽ、如何様ニモ教諭致シ御趣意相立候様仕度、依之猶熟考勘弁仕候所、梵鐘之儀僧徒ニ於テハ法具之内ニモ第一之重器ト相心得居、殊ニイツレモ大小之檀那祖先菩提等之為鋳造寄進之品ニ付、海岸防禦之御備向御用ニ立候儀ト相弁候トモ、偏固之僧侶・頑愚之門徒共ニ至候テハ利非弁別致シ兼、品ニ寄リ差出方難渋致シ候族モ可有之、一応申諭候トモ屈伏不致節ハ難捨置厳敷吟味ヲ遂、御仕置ヲモ申付取上候次第ニ可立至ハ勿論之儀、左候テハ幾万之諸寺院多輩之者共、其身之不届ハ差置不平ヲ唱候モノ数多出来、終ニ不容易御手数相掛候ノミナラス、万一御触之段不被行様相成候テハ以之外ニテ、右御触ハ実ニ動静ニモ拘リ可申哉ニ付、得ト御趣意之程合同イタシ候上ニ無之候テハ、御触案取調伺候場合ニモ至兼候処、先達テ御渡被成候此書付之内、古来之名器ニ有之、古代、古来意味同様ニ存候得共、年数決シ兼候テハ差支候間、私共心得迄ニ林大學頭ヘ承合候処、古ヨリ今ニ至ル迄ヲ古来ト相唱、古代ト相唱候ハ、村上天皇康保年以来ヲ可申哉之由申聞候得共、右ハ同人心得迄之儀、且名器ト唱候モ古代之品ハ世上ニ於テモ相弁無紛訳ニ候得共、中古以来近頃ノ品ニテモ、

勅命　台命ヲ以テ御造立ノ鐘、又ハ　宮門跡方公卿并国主城主之面々ヨリ鋳造イタシ相納候モ数多可有之、右ハ其檀那々々之寄進ニ付、寺院僧侶之取計ニモ難相成品等古代之名器ニ不相立、取上鋳潰候儀ハ品々差支モ可有之哉、左候迚右類之梵鐘ハ為相除、其余ノ分ノミ鋳換候モ不平ヲ生シ候一廉ニモ可有之哉、右ハ私共

限差極候儀ニモ至リ兼候間、若右等之廉兼テ御差定モ無御座候ハ、右御文段ニ基ツキ、追テ心得方相伺候様可仕候哉、

一本寺之儀取調候処、大本寺・中本寺・本寺並抔夫々次第階級モ有之候得共、何レモ本寺之儀ニ付、大小之差別ヲ不相立相除、右之外ニモ触頭又ハ録所ト唱候寺々本山掛処之類ハ、仮令末寺無之候トモ本寺ニ准シ候モノニ付、同様相除候積取調相伺可申候哉、

但全之末寺而已ニ相成候テハ寺数モ格別相減、右之内ニハ撞鐘無之分モ多分ニ可有之、左候得ハ、取上可相成鐘ハ纔ニ可相成モ難量候得共、門末壱ケ寺有之候テモ本寺之儀ニ付、

本文之通相伺申候、

一梵鐘取上候得ハ、法要之節差支可相成筋ニ付、右ニ換候品之儀勘弁仕候処、太鼓或ハ在来之半鐘・板木等ヲ以テ勝手次第取替為相用候積、取調相伺候様可仕候哉、

但半鐘モ梵鐘ニハ候得共、夫迄御取上相成候テハ、余リ微細ニ相互ニ品々差支之筋出来可致哉ニ付、

本文之通相伺申候、

右ハ差向差支候廉々ニテ、右等之処御治定相成候上ニ無之候テハ、御触案取調ハ勿論、梵鐘員数等為書出候場合ニモ至兼候間、猶又勘弁之上相洩候儀ハ追々可相伺候得共、一体今般之儀ハ海防掛専務之事ニ付、先達テ評定所一座ヨリ海防掛之面々ニ於テモ、一座并大目付・御目附同様御書取ニ随ヒ、評議致シ申上候迄ニテハ、重復ニ成、取調候モノ無之、必不都合之事共出来可申候間、先海防掛ニテ引請主本ニ相成、寺社奉行申談取調相伺候方可然旨ヲモ申上置候得共、猶再応熟慮仕候処、梵鐘為差出候ニ付テハ、御触之趣敬承為致候迄ハ、私共主ニ成取扱不申候テハ、迚モ行届申間敷哉ニ付、此上向々ヘ御書取ニテ、評議ニ御下ケ相成候テハ、銘々区々ニテ急速相整候様ニモ至間敷候間、梵鐘差出方取扱之儀ハ、私共一手ヘ被　仰付候ハ猶又心得方ヲモ相伺、又ハ海防掛御勝手方御勘定奉行・大目付・御目付其外可引合向々ヘモ掛合、凡見居モ付候上ニテ勘弁取捨イタシ、可成丈差支無之様御触案取調相伺候様相成候ハ、諸向ハ勿論、追テ御触之趣ヲ以テ寺院共申諭候ニモ不差障様可相成哉、右之通取計、寺院共何レモ敬服イタシ請書差出候上、右請書一同取扱トモ海防掛ヘ引渡候ハ、夫々重役之筋モ相立、却テ便利之御

所置ニモ可相成哉、何レニモ　叡慮之趣被遊
御感戴候御趣意ニ候得ハ、外々御触トモ違ヒ、早々御
沙汰無之候テハ相成間敷、勿論前書之通被　仰渡候テ
モ、寺院共申諭候場合ニ至リ、速ニ御請可致哉ハ難量
候得共、右ハ私共ニテ精々及利害、猶始末次第伺之上
取計候様可仕候間、先梵鐘差出方取計御触案等取調之
儀、私共へ被　仰付候テハ如何可有御座候哉、此段
御内慮相伺申候、
卯六月

二八八　梵鐘為差出方之手続評議案

二八八の一

評定所一座

去ル三日、評議致シ可申上旨被　仰聞、御渡被成候御
書取一覧仕候処、梵鐘鋳換之儀被　仰出候ニ付、諸寺
院ヨリ梵鐘為差出方其外取計振之儀評議イタシ、御触
書案ヲモ取調可差上ト之儀ニテ、水戸前中納言殿（徳川斉昭）御書
取之趣ハ、本山并古来之名器、当節時之鐘ニ不用分ハ
半鐘迚モ御取上ケ相成、天下中之大小梵鐘凡テ其数ヲ
調候上、一旦ハ
公辺之御品ニ御引上ケ、諸大名海岸之多少ニ寄被下ニ
相成、右被下方ハ鐘何程、貫数何程ト相分リ候上、残
ラズ打砕キ、海岸之多少ニ寄リ可然程ツヽ被下ニ相成
候得ハ、　公辺ヨリ拝領之廉相成候間、被下候名目ハ武
備為手当銅材何万何千貫被下候旨申振合ニ相成可然、
右ハ先ツ第一ニ両山ヨリ御手始メ、　公辺ニテ諸国之
手本ヲ御出シ被成候方肝要ト之御儀ニ御座候、
此儀天下中之梵鐘不残
公辺之御品ニ御引上ケ、諸家海岸之多少ニ寄リ被下候
ハ、拝領之姿ニ相成可然旨、前中納言殿御書取之趣御
尤ニハ候ヘトモ、右様相成候得ハ、海岸ニ領分知行無
之面々ハ、領分知行寺院之梵鐘残ラス他家之大砲等ニ
相成候儀ニテ、尤右様相成候トモ海岸防禦之為メニ候
上ハ、自他ノ差別無之儀故、一ト通不平ヲ可申謂有之間
敷候得共、海辺ニ領分無之面々モ仕儀次第加勢可致旨
兼テ御触モ有之、一体之処ニ於テ領分海岸有無之差別
ハ無之、且寺院并檀方之モノ共モ差出候梵鐘、其領主
地頭之用ニ不相立ト申候ハ、猶更人気ニ拘リ可申候間、
先達テ梵鐘鋳換之儀評議仕候節申上候通、万石以上以
下等ニテ差別ヲ立、万石以上ハ手限ニテ鋳換、万石以
下ハ悉ク

公辺へ可差出トカ何ト乎御仕法ヲ立、格別人気ニ不拘様之御沙汰ニ相成候方可然、其余両山上ヨリ御手始ニ相成可然トノ儀モ御尤ニテ、御書取之趣モ梵鐘為差出方其外取計振之儀評議イタシ、御触案ヲモ取調可差上ト之儀ニ付、取計方見込之趣、巨細取調可申上筋ニ候得共、

被仰出之趣ハ、本寺之外古来之名器及ヒ当節時之鐘ニ相用候分相除、其余可鋳換ト之儀ニ付、右取捨ニ付テモ必ス混雑可致儀、殊ニ可差出梵鐘之員数銅材之大数不相分内ハ、素ヨリ何レモヘ差出可然之目当モ附兼候間、容易ニ差出方等御触相成候ハ、諸国之寺院惑乱而已イタシ、無益之運送ニ入用ヲ費シ、終ニハ難被行次第ニ至ル間敷トモ難申、其上海防掛之面々モ、私共并大目附・御目付同様之御書取ヲ以テ、評議イタシ申上候迄ニテハ重複ニ成、取調候モノ無之、必ス不都合之事共而已出来可申候間、イツレニモ最前申上候通、先ツ海防掛之面々ヘ取調被　仰付、尤寺社奉行可申談旨ヲモ被　仰渡候ハ、海防掛ヨリ談判次第寺社奉行ニ於テ猶得ト勘弁イタシ、諸国之寺社可成丈惑乱不致様申渡、銅材之太数ヲモ取調、右等相分リ海防掛見込之趣取調出来之上、猶評議ニモ御下ケ被成、其上御治定之節ニ至リ向々エ御触達相成候方、可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候　御書取二通返上仕候、以上、

卯三月

二八八の二

先達テ評議イタシ可申上旨被　仰聞、御渡被成候由之御書取、去ル十四日海防掛ヨリ相廻候間一覧仕候処、梵鐘鋳換之儀被仰出候ニ付、諸寺院ヨリ梵鐘為差出方、其外取計振之儀評議イタシ申上候様御達被置候処、御府内并国々御料所之分ハ公辺へ為差出、万石以上領内之分ハ、領主ノ存寄次第為取計、万石以下知行所之分ハ、

公儀へ為差出、尤自分ニテ鋳換之儀相願候ハ、其通ニモ被　仰付候積、大意御取極相成不都合之筋モ有之間敷哉、一体

御国内ニ壱挺モ多ク大砲出来候ハ、則

御国之強ミニ付、不残

公儀へ御引上ニモ及申間敷哉ニ候間、右之趣ニテ異存モ無之候ハ、取計方巨細之儀、早々取調可申上トノ趣

ニ御座候、

此儀勘弁評議仕候処、万石以上領内之分ハ、領主之存寄次第取計、万石以下知行処之分ハ

公儀へ為差出候ト之儀ハ、先達テ梵鐘為差出方之儀評議仕申上候通之儀、万石以下ニテモ自分ニテ鋳換之儀相願候ハ、其通可被　仰付ト之儀モ、至極御尤之筋御座候間、イツレモ右之通被　仰出可然、就テハ御料之分ハ夫々支配御代官、万石以下知行之分、是又最寄御代官ニテ取集候方ニモ可有之乎、或ハ場処ニヨリ、其所ニ於テ直ニ鋳換候様イタシ候ト乎、其余取計方御触案等ヲモ、巨細取調可申上筋ニ候得共、諸国一般多端之儀、殊ニ前書評議之節モ申上候通、一体被　仰出之趣、本寺之外古来之名器及ヒ当節時之鐘ニ相用候分相除、其余可鋳換ト之儀ニ付、右取捨ニ付テハ、必混雑可致筋ニ付、心得方差別之儀ハ、別段寺社奉行ヨリ取調相伺候様可仕候間、其上ニテ御触之儀、御治定相成候方可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候御書取一通返上仕候、以上、

卯六月

二八八の三

本文伺書之帳、表紙へ左之通御請書仕差上候ニ付、九月廿七日御登城之節被差上候間書入置候様、猶又本書之内直リノ面、見合候様被　仰付候、

書面見込之通相心得可取計旨　御触書之儀ハ、　御案文へ御掛ケ紙之通御取直之被成御触候筈ニ候間、可得其意段被仰聞承知仕候、

卯九月二十日

安藤長門守

寺社奉行

二八八の四

諸寺院梵鐘之儀ニ付、当三月中被

仰出候御触書、御文段心得方其外見込之趣御内慮相伺候処、古来之名器之差別兼テ御差定無之候得トモ、素々古来之名器ト申ハ稀成儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分并

公武格別之御由緒等有之候品ハ、名器ニ准シ取扱候テモ可然哉、右ハ巨細取調之上、夫ニ向ヒ猶勘弁イタシ取調可申上旨、其余ハ伺之通心得、精々入念御趣意行届候様相心得、且此程評定所一座始ヘ御尋問有之候御別紙

御書取之趣ニ相心得、御触書案其外猶取調可申上、且又向々評議ヲモ為心得見置候様被仰聞、右御書取并向々評議書トモ御渡被成候ニ付、御沙汰之趣ヲ以テ取調熟考仕候処、御書取之内万石以上領内之分ハ、領主之存寄次第為取計可申ト之廉、向々評議同様先達テ一座ヨリモ申上置候得共、猶勘弁イタシ候処、右之通相成候ハ、大家之向ハ品ニ寄領内之人気ヲ考、国器充実之趣等申唱、又ハ寺院共歎願等ニ寄、梵鐘ハ領内一円其侭差置候様相成候儀出来致間敷トモ難申、左候テハ御料所ハ御取上、私領ハ不取上ト申様相成、何トナク不公平之姿ニ相当リ、且ハ御国内ニ壱挺モ多ク大砲出来候ハ、御国之強ミニ付、領主ニテ鋳換被　仰付候トノ御趣意貫キ不申ハ勿論ニテ、自然私領ヘ而已人気相離キ候様可成行モ難量、左候テハ以之外之儀ニ候得共、領主心次第ト被　仰出有之候上ハ、領内寺院小寺ニ至ル迄其侭ニイタシ置候テモ、別段御沙汰モ難相成、旁御不都合ニ可有之哉、一体日本国中ヘ拘リ候儀ハ御料・私領之差別無之、

公儀ヨリ御世話可有之ハ勿論之儀ニ付、一旦

公儀ヘ可差上旨之御沙汰ニ相成、其上ニテ私領之分ハ領主ヘ被下候ト申方、御体裁モ相整、且ハ寺院之梵鐘大炮小銃ニ可鋳換旨被

仰出候ト計ニテハ、寺院之品ヲ其侭

公儀ニテ鋳換被　仰付候筋ニモ相聞可申哉之処、前書之通相成候得ハ、一旦寺院之手ヲ離レ、　公儀之御品ヲ公儀ニテ鋳換被　仰付候訳ニ相当リ、名分モ発輝ト相立、ヲノツカラ不服ハ唱候儀モ有之間敷哉、其上大家ニ至候テモ、

公儀ヘ可差上ト有之候上ハ、右廉ニ於テ彼是可申立様、領内万石以下知行之分、其外御代官・御領所領主地頭ヘ附属ニ無之寺院并其寺社領之寺院トモ取計方凡見込之趣、左之通御座候、

一御府内寺院之事、

是ハ

公儀ニテ鋳換被　仰付候分、今度之御触出候得ハ、諸家触頭呼出シ原常御触出候節之通、御触書写相渡、別紙之通被　仰出候間其旨相弁、其筋ヨリ呼出有之候節届出可請差図旨、諸国寺院ヘ不洩様早々可申達段申渡、請書申付、

此儀御触書相渡候節定例請書帳ヘ、

右御書付壱通御渡被成慥ニ奉請取候、今般御沙汰之趣不容易儀ニ付、御別紙御書取之趣相含、其筋ニヨリ御呼出之節心得違無之、早々罷出可請御差図段、一家限末々寺院迄不洩様可申達、且御代官御預所領主地頭へ附属ニ無之寺院並其寺社領之分ハ、梵鐘有無、本末之訳取調、最寄次第寺社御奉行所、又ハ遠国御奉行所・御代官御預所之内へ申出御差図請可申、尤品ニ寄附属之寺院同様其筋ニヨリ御呼出相成候儀モ可有之候間、是又違失無之様可申達旨、被　仰渡奉承知候、

右之通認請印申付候積、

其砌御府内寺院之分ハ寺社奉行所ニテ取扱候間、一家限其触頭被呼寄、本末并梵鐘有無、名器・時之鐘之訳取調書面可差出旨申達、右書面触頭ヨリ差支候ハ、御府内寺社帳其外諸家本末帳等、奉行所書物ニ引合、其上ニテ寺々呼出、紛之上梵鐘可差出寺々へハ、追テ請取ノモノ差遣次第可相渡旨申渡、請書申付、名器其外ニテ難決分ハ伺之上取極、尤伺之上名器ニ難立類ハ、是又前文之振合ニ請書申付、可差出分相揃候上寺院名前相認、右之分請取之モノ差出方并鋳換之儀、海防掛へ被　仰渡候様仕度段申上候積、

但御触書相達候ハ、上野執当、増上寺役者、其外諸家触頭共モ、万一御門主又ハ宮方等思召伺候上ニ無之候テハ御請難致、又ハ本山へ申達候上否申立度抔申立、猶予相願候儀有之間敷トモ難申候得共、右ハ御門主等御存慮之次第モ候ハ、別段被　仰立候ハ格別御触之請印、猶予ハ難相成筋之旨申諭、何レニモ請書申付、且別紙諭書之趣ヲモ差含、向々心得違無之様、可申達旨ヲモ申渡候様可仕、尤追テ御門主被　仰立、其外ヨリモ品々申立可有之モ難計候得共、宮門跡方等ハ伺之上御沙汰不被及方ニ心得、其外ハ時宜次第伺又ハ手限ニテ申諭、

書面差戻候積、

一御料所寺院并寺社領之寺院、

是ハ

公儀ニテ鋳換被　仰付候分、御触書ニ有之候通御代官御預所・遠国奉行ニテ其支配所

寺院并始末次第檀家惣代之モノヲモ呼出、

此檀家惣代之儀在方ニテハ、寺院へ拘リ候儀ハ、檀家之者引請取計候風俗多ク、寺院共計ニテハ迚モ請印等可致場合ニ至兼候向モ可有之哉ニ付、本文之通取調候

儀ニ御座候、

一万石以下知行之分、附属ニ無之寺院一同別紙心得方書取之趣相含本末糺之上、本寺之分ハ梵鐘有無并寺号計糺置、末寺之内梵鐘無之分是又同様取計、本寺一同帰寺申付、相残候末寺之分モ古来之名器、当節時之鐘ニ相用候旨申立候分ハ勿論、由緒其外難渋之趣遮テ申立候類ハ先ツ相除、全無異儀梵鐘可差出寺々ト治定イタシ候分計ヘ、追テ請取之モノ差遣次第可相渡旨申渡、請書申付、右名器・時之鐘其外難渋申立候寺院ハ、追テ可及沙汰旨申渡、一同帰寺申付置、右請書写相添、支配所并万石以下知行之寺院其外附属ニ無之分トモ、惣寺院何箇寺、内本寺何箇寺鐘幾ツ、

此儀本寺之分ハ相除候儀ニ付、梵鐘有無ハ勿論寺院ヲモ呼出不申候テモ可然筋ニ候得共、最初ニ本末之訳奉行所於テ取調候得ハ、右ニモ不及相分可申之処、左候テハ御料・私領之弁別等容易ニ難相分、何レ之寺院何レノ向ヘ相達可然トノ旨、目当モ急速付兼、却テ混雑可仕哉ニ付、本文之通其向々ニテ為相糺、追テ書出候節奉行所留記ヘ引合、本末治定イタシ候積、且梵鐘有無之儀モ此度惣寺院御改之上、何程ハ鋳換、何程ハ相残居候ト申儀モ、一ト通御聞被置候方ニモ可有之哉ト見込、本文之通取調候儀ニ御座候、

一末寺何箇寺内何箇寺ハ鐘無之、何箇寺ハ請書差出、何箇寺ハ名器之鐘之趣等申立候段之届書、直ニ寺社奉行所ヘ差出、右名器・時之鐘其外難渋之由等申立候分別紙ニイタシ、心得方之儀是又寺社奉行所ヘ申出可請差図旨、御代官御預所役人ヘ申渡候様、心得方書取相添御勘定奉行ヘ相達、遠国奉行ヘモ同様之趣取捨イタシ相達、右向々ニテ為取計、追テ夫々ヨリ糺之上書面ヲ以申聞次第、其品ニ向ヒ勘弁イタシ、手限又ハ難決分ハ伺之上及差図、勿論請書一ト通取揃候得ハ、御府内寺院同様海防掛ヘ御沙汰之儀申上候積、

但遠国奉行支配場ハ、先ハ町方計ニテ在方ハ小（少）ク、京・大坂町奉行支配国之分モ、御代官領主ニテ為取計、尤日光・山田之類ハ神領一円、佐渡・箱館・下田・新潟等ハ、其支配場限在町共為取計候積、

一御代官御預所領主地頭附属ニ無之寺院并其寺社領之寺院之事、

是ハ

公儀ニテ鋳換被　仰付候分、本末之訳梵鐘之有無、早

々寺社奉行又ハ遠国奉行・御代官御預所等へ、最寄次第為申立、右向々於テ御料所之寺院同様為取扱、追テ私共へ申聞候節御料所之分一同及差図、寺社奉行所へ申立候分モ御府内寺院同様取計、勿論申立方及延引候類可有之哉モ難量候間、右類ハ時宜次第其向々へ為呼出セ候積、

是ハ万石以下知行之寺院ニ准シ、一体ニ御代官御預所へ為呼出候テモ宜候得共、附属ニ無之ト之訳ヲ以、兎角呼出難渋等申立候儀毎々御座候間、本文之通取調候儀ニ御座候、

一万石以下知行之寺院并其寺社領之寺院、

是ハ

公儀ニテ鋳換被　仰付候分、御料所同様最寄御代官御預所へ寺院呼出為取調候積、勿論自分鋳換之儀願出候得ハ其通ニモ可被仰付儀ニ付、右之分ハ願相済次第私共へ問合候ハ、万石以上之振合ヲ以及挨拶、其節最寄御代官御預所へ可申断旨ヲモ相達候積、

一万石以上領分之寺院并其寺社領之寺院、

是ハ一円領主へ被下、領主ニテ鋳換候分都テ寺院呼出、取調方等ハ御料所同様之振合ニ、心得方書取相添、夫々取計方及差図、追テ届書為差出候積、

此儀御料所同様及差図候ニハ及申間敷哉ニ候得共、取計振区々相成候テハ、寺院共差拒候節不都合之儀モ出来可仕、殊領主限勝手侭ニ取捨致シ候様成行候テハ、一挺モ多キ方御国之強ミト之御趣意ニモ不叶、自然不平ヲ生シ候モ難量、其上御国内ニ寺院何箇寺・梵鐘何程、内何程ハ鋳換、何程ハ相残リ居候ト申ス大数ヲモ、御聞被置候方可然哉ニ付、御触書之内へ本末取調其外取計方之儀、長門守方へ可問合旨之御文段ニテ、諸家ヨリ為問合、夫々一様ニ及差図候積、本文之通取調候儀ニ御座候、

右一ト通取調候趣、書面之通御座候、勿論梵鐘之儀ハ仏門ニ於テハ重キ法器ト相心得居候処、今般鋳換之儀被仰出候ニ付テハ、右之外無用之銅鉄等モ世上ニ可有之処、其侭ニ被成置テハ、僧徒必用之鐘而已鋳潰相成候儀ト、不平ヲ唱候モノ有之候テハ不可然筋ニ付、無用之銅鉄類モ、追テ何ト乎御沙汰有之候趣之御触書相成候方可然哉ト見込、別紙御触書案取調并諸向へ相達候心得方書取、触頭共へ差示候諭書案トモ相添、此段相伺申候、

卯八月

二八九　梵鐘鋳換触書案

二八九の一

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺并古来之名器、当節時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ不残大砲小銃ニ可鋳換旨、先達テ叡慮ヲ以被　仰出候、一体梵鐘之儀、其寺々之法器ニ候得共、〔者カ〕容易ニ御沙汰可有之品ニ無之候得共、近来諸夷引続入津イタシ、武備専要之御時節、大砲小銃トモ急務之品ニテ、御国備御堅固ニ被成置度格別之叡慮モ有之被　仰出候事ニ候条、寺院ハ勿論大小之檀越寄進之輩ニ至迄、厚御趣意之程相弁、法用之儀ハ在来之半鐘、又ハ盤木・太鼓等相用、本寺并名器当節相用候時之鐘之外、撞鐘之分ハ一同公儀ヘ可差上候、勿論万石以上領内之分ハ、其所之領主ヘ被下、領主ニテ鋳換、万石以下知行并御代官・領主地頭ヘ附属ニ無之寺院其寺社領之分トモ、御料所寺院一同公儀ニ於テ鋳換被　仰付候間、御府内ハ寺社奉行、其余ハ最寄遠国奉行・御代官・御預所領主ニテ、寺院本末并梵鐘有無、名器・時之鐘之訳等糺之上取計、尤時宜ニ寄檀家惣代之者呼出候儀モ可有之候、一万石以下知行之分モ、自分ニテ鋳換之儀相願候ハ、其通ニモ可被仰付候間、早々願書可差出候、

但自分ニテ鋳換被　仰付候得ハ、公儀ニテハ御構無之候間、万石以上之振合ニ准シ、知行所寺院一手ニ取計候儀ト可心得候、

右之通被　仰出候間可被得其意、尤諸寺院ヘハ寺社奉行ヨリ申渡候間、本末取調其外取計方之儀ハ、安藤長門守ヘ承合可被取計候、

右之趣向々ヘ不洩様可被相触候、

右之通被　仰出候間、可被得其意候、

卯　月

二八九の二

御代官
御預所　相達候分

心得方書取

諸寺院梵鐘之儀ニ付御触之内、古来之名器ト有之候ハ稀成儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分計相除キ候積、

一鐘銘之内

勅願

台命　宝祚長久　御武運悠遠其外
天下泰平・国家鎮護等之文字有之候トモ不及斟酌事、
一御由緒并諸家由緒等有之候由之銘文有之候趣ニテ、用捨之儀申立候トモ容易ニ可取用筋ニハ無之、尤格別訳立候分、其外遮テ難渋申立候分ハ、長門(安藤)守方ヘ可申聞事、
一本寺ト唱候内、大本寺・中本寺・小本寺・本寺並等之名目有之候得共、一二ケ寺ニテモ末寺門徒有之候分ハ相除候積、
但諸国録所掛其外末寺ハ無之候トモ、本寺モ無之一本立候類之大地或ハ寺格宜分ハ、時宜次第是又長門守方ヘ可申聞事、
一御朱印地之分差別無之事、
一塔頭地中モ門末無之候得ハ、末寺同様ノ事、
但神社之別当社僧モ同断之事、
一御代官御預所領主地頭附属ニ無之寺院并其寺社領之寺院ハ、最寄次第御代官御預所ヘ為申立候筈ニ付、右之分ハ御料所寺院同様取調、尤訴方及延引候ハ、程合見計呼出相尋可申事、
一寺院之内無住之分、留守居僧等ニテ難相決節ハ、其寺兼帯之本寺、又ハ法類組合寺等相糺請印可申付事、
一梵鐘差出方持運ヒ等之儀、寺院共難儀不相成様、追テ請取之者被差遣、夫々於
公儀御取計可有之儀ニ付、右等ニ付心配イタシ候向モ候ハ、前書之訳差含可申諭事、
是ハ差出方持運ヒ等迄寺院共ヘ被
仰付候テハ難渋ニ及ヒ候趣、心配罷在候向不少哉ニモ相聞、実以右体相成候テハ迚モ可行届様無之、容易ニ御請可致儀トハ不奉存候間、右ハ海防掛進退ニ相成候上之儀ニハ候得共、寺院共伺出候向ヘハ前以古之趣申諭置候ハヽ、安心モ不仕、請書難渋之廉ニモ可相成儀ニ付、右廉ニ於テハ兼テ被　御聞置候様仕度、本文之通取調候儀ニ御座候、
右ハ凡之心得方ニ付、難決儀ハ長門守方ヘ可申聞事、
遠国奉行并御三家方御城付・御両卿家老・其外領主家来ヘモ右之趣取捨イタシ相達候積、

二九〇　梵鐘鋳換諸宗触頭共ヘ諭書案

諸国寺院有之候梵鐘之儀、本寺之分并古来之名器・時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ大砲小銃ニ鋳換候儀ニ付、今般再応被　仰出候通、梵鐘之儀ハ仏門之重器ニ付、

尋常之訳ヲ以テ可被及御沙汰筋ニハ無之候得共、近来異国船度々渡来致シ不容易御時節ニ付、格別之叡慮モ有之、右体重キ法器ヲモ鋳換被仰出候儀ニ付、此上難渋ケ間敷儀ハ勿論、非常用等申立歎願等イタシ候テモ、御取用可相成筋ニハ無之、乃一心得違之輩モ有之候ハ、於奉行所吟味之上厳重之御沙汰ニモ可被及候条、御触之趣厚相弁心得違無之様、末々寺院ニ至迄不洩様早々可申達事、

二九一　梵鐘鋳換勘定奉行へ達書案

二九一の一

諸国寺院梵鐘之儀ニ付、今般御触有之候ニ付、右御触之通相心得、御代官御預所ニテ、其支配所并最寄万石以下知行之寺院并其寺社触ノ分トモ御呼出、附属無之寺院并其寺社領ノ寺院ヨリ之訴又ハ呼出候儀モ候ハ、別紙心得方書取之趣相含、品ニ寄檀家惣代之モノ共ヲモ呼出、本末糺之上、本寺之分ハ梵鐘有無并寺号計糺置、帰寺申付、末寺之内、梵鐘無之分モ同様取計相成候、末寺之分ハ古来之名器・当節時之鐘ニ相用候旨申上候分ハ勿論、御由緒其外遮テ難渋申立候類ハ相除、全無異儀梵鐘可差出寺々ト治定イタシ候分計、追テ請取之モノ差遣次第梵鐘可相渡旨申渡、請書申付、右名器・時之鐘其外難渋之由申立候寺院ハ、追テ可及沙汰旨申渡、一同帰寺申付、右請書写相添支配所并最寄万石以下知行所之寺院、其外附属ニ無之分トモ、惣寺院何ケ寺、内本寺何ケ寺ハ請書差出、何ケ寺ハ名器・時之鐘其外難渋之趣申立候段之届書、直ニ長門守方ヘ差出、右名器難渋之由等申立候分別紙ニイタシ、取計方之儀、是又長門守方ヨリ申出請差図勿論、附属ニ無之寺院、其寺社領之寺院モ訴延引イタシ候ハ、程合見計呼出相尋、支配所寺院同様取調、尤右之分ハ私領ヘ（孕カ）朶リ候モ多分ニ可有之候間、其最寄々々之領主役場ヘ掛合相尋、調落無之様可取計旨、御代官御預所役人ヘ御申渡有之候様存候、別紙心得方書取差進申候、右ハ伊勢（老中、阿部正弘）守殿ヘ伺済之趣ヲ以テ及御達候、（ママ）

本文達書之趣取捨イタシ、遠国奉行并御三家方ハ御城附、御両卿方ハ家老ヘ相達、私領之分ハ御触之通向々ヨリ間合有之候節、及挨拶候積御座候、

二九一の二

梵鐘鋳換之儀ニ付先達テ差上候伺書之内御尋之廉々取調申上候書付

安藤長門守
寺社奉行

昨十四日御書取ヲ以被　仰聞候梵鐘之儀ニ付、別冊取調相伺候件々之内、御触書案ニ梵鐘之儀ハ仏門第一之法器ト有之、出家ニテハ右様申候トモ、公辺ヨリ右様被　仰出候ハ如何ニ付、御掛紙之通御取直相成可然哉、但諸家触頭共へ諭書案之内ニモ、梵鐘之儀ハ仏門之重器ト有之候処、是又同様御掛紙之通御取直有之候方ニモ可有之哉、取調可申上旨　被仰聞候、此儀御沙汰之趣御尤ニ奉存候、一体梵鐘之儀仏門ニ於テハ重器ト相心得候得共、素ヨリ公辺ニ於テ右様被　仰出候モ、如何ノ様ニハ候得共、右体仏門必用之品ニテモ、御国備ノ為メ御鋳換相成候ト之儀ヲ相顕示候迄之儀ニテ、素ヨリ外ニ趣意等モ無御座候間、御触出之方ハ御掛紙之通相成候テモ、私共ニ於テ差支之筋無御座候得共、諭書之方ハ元来寺院共気配ヲ量リ候儀ニ付、都テ伺之通御据置相成候テハ如何可有御座哉ニ奉存候、

一御触書案ニ、法用之儀ハ在来之半鐘云々ト有之、半鐘迚モ大小種々可有之候間、表向半鐘ヲユルシ候ハ、小振之梵鐘ハ皆半鐘ト可申立候間、大サ何程目方何程以下ヲ半鐘ト相定可然哉ニ付、在来之半鐘之文字ハ先ツ相除候方ニ可有之哉、乍然在来之半鐘之文字相除候得共、半鐘之儀何トカ（ハカ）御達無之候テハ、御取上之否難相分、遠国等ニテハ彼是手数相掛リ、且ハ行違之儀出来可致哉モ難計候間、次之条心得方書取之内へ、大サ何程目方何程以下之半鐘ハ差上ニ不及ト書載候方ニモ可有之哉、

但半鐘之儀ハ、此以後モ火之見櫓等ニテハ相用可申儀ニ付、寺院之儀モ在来ニテ大振ニモ無之分ハ、其侭被差置可然哉ニ付、右半鐘大サ目方等之儀モ勘弁イタシ取極可申上旨被　仰聞候、

此儀小振之梵鐘ハ、半鐘ト可申立哉トノ御沙汰ニハ御座候得共、半鐘之儀ハ指渡凡二尺程迄ヲ半鐘ト相唱候由ニハ候得共、聢トノ取極ハ無之、目方等之儀モ銅性ニ寄リ差別モ可有之候間、治定イタシ取極被　仰出候儀ハ如何可有之哉、一体寺院之軒端等へ掛、手木打ニ致シ候ヲ一般ニ半鐘ト相唱来、撞鐘トハ自然差別モ有之候儀ニ付、余リ微細ニ相成候テハ品々差支モ出来、却テ混雑モ可致哉ニ付、取調申上候通被　仰出候方可

然哉奉存候、

一御触書案之内梵鐘之外、

公儀ハ勿論、武家方・在・町共銅鉄等ニテ製候貫目多シ品之儀モ、追テ御沙汰可有之筈ト申上候得共、此後之儀ハ梵鐘為差出方一筋之御触面ニモ御座候間、右文言無之候テモ差支ハ有之間敷、此所ニテハ僧侶ヲナヤマシ候迄之御文言ニ候トモ、後ニ右之御沙汰ニ被及候ニハ梵鐘ヨリハ更ニ不容易次第、品ニ差支之儀モ可有之哉、銅鉄等之儀ニ付テハ先般御触面之趣モ有之、銅鉄等猥ニ不費御趣意之程ハ、一同相弁居可申儀ニ付、旁右一ケ条ハ御除相成候方ニモ可有之哉之段被仰　聞候、此儀御沙汰之趣御尤ニ奉存候、勿論私トモ見込之趣ハ、僧侶ヲタヤシ候迄之心得ヲ以テ、取調申上候儀ニハ無之、僧侶ニ於テ必用ト相心得候品ヲモ、鋳換被　仰付候程之儀、世上ニ於テ無用ト相見ヘ候銅鉄之器等モ不少儀ニ付、右等之類モ其侭ニ不被差置、追々鋳換被仰出候ハ、炮銃之数モ相増シ、是以テ御国之強ニ相成、且ハ公平之御処置モ相整可然哉ニ奉存申上候儀ニハ候得共、梵鐘為差出一筋之御触面ニ付、右御文言無之候テモ、私共ニ於テハ差支之筋無御座候、

右夫々勘弁評議仕ケ条限取調候趣、書面之通御座候、尤伺書之内在来之半鐘之文字相除候ハ、撞鐘之分之四字モ相除候方ニ可有之哉之段、御附札ヲ以被　仰聞候得共、前書半鐘ハ見込之趣夫々申上候儀ニ付、右御附札之廉ハ、見込之趣夫々申上候儀ニ付、右御附札之廉別段評議不仕候、御渡被成候壱通一冊返上仕候、

卯九月

二九二　梵鐘鋳換大小監察ヘ達案

大目付
御目付　ヘ

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺并古来之名器、当節時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ不残大砲・小銃ニ可鋳換旨、先達テ叡慮ヲ以被　仰出候、一体梵鐘之儀其寺々之法器ニ候得ハ、容易ニ御沙汰可有之品ニ無之候得共、近来諸夷引続入津致シ、武備専要之御時節、大砲小銃トモ急務之品ニテ、御国備御堅固ニ被成置度格別之叡慮モ有之被　仰出候事ニ候条、寺院ハ勿論大小之檀越寄進之輩ニ至迄、厚御趣意之程相弁、法用之儀ハ在

来之半鐘又ハ盤木・太鼓等相用、本寺并名器、当節相用候時之鐘之外、撞鐘之分ハ一同、
公儀ヘ可差上候、勿論万石以上領内之分ハ、其処ノ領主ヘ被下、領主ニテ鋳換、万石以下知行并御代官領主地頭ヘ附属ニ無之寺院、其寺社領之分トモ御料所寺院一同、公儀ニ於テ鋳換被　仰付候間、御府内ハ寺社奉行、其余ハ最寄遠国奉行・御代官・御預所領主ニテ、寺院本末并梵鐘有無、名器・時之鐘之訳等糺之上取計、尤時宜ニ寄リ檀家惣代之モノ呼出候儀モ可有之候、
一万石以下知行之分モ、自分ニテ鋳換之儀相願候ハ、其通ニモ可被　仰付候間、早々願書可差出候、
但自分ニテ鋳換被　仰付候得ハ、
公儀ニテハ御構無之候間、万石以上之振合ニ准シ、
知行所寺院一手ニ取計候儀ト可心得候、
右之通被　仰出候間可被得其意候、尤諸寺院ヘハ寺社奉行ヨリ申渡候間、本末取調其外取計方之儀ハ、安藤長門守ヘ承合可被取計候、
右之趣向々ヘ不洩様可被相触候、
九月
右書付伊勢守渡之、

九月廿七日
右惣扣　御側衆ヘモ一通被遣之、
書付渡方
一御三家御城附ヘ一通
奥書
右之通相触候間、其段可申上候、
一御両卿家老衆ヘ一通
同
同断可被申上候、
一三奉行ヘ一通
同
右之通相触候間可被得其意候、
一海防掛ヘ
同
同断
在府之
一遠国奉行ヘ一通
同
同断
一京・大坂・駿府・甲府・長崎・下田

右次飛脚ニ遣シ、

於当地相触候書付差越候間、被得其意、其地之面々并内藤豊後守・戸田能登守（正縄、岩村田藩主）（氏著）へモ可被達候、以上、

九月廿七日　　連　名

脇坂淡路守殿（安宅・龍野藩主）

今般別紙ヲ以申進候、諸国寺院之梵鐘大砲小銃ニ鋳換ニ付、取計方之儀相触候書付之趣、伝　奏衆へモ被相達可然候ハ、為心得被達置候様ニト存候、以上、

九月廿七日　　連　名

脇坂淡路守様

右之外ハ表御右筆所ニテ調之、

二九三　梵鐘鋳換事件水戸殿御城附へ達書案

寺社奉行

諸国寺院梵鐘之儀ニ付、今般御触有之候ニ付、右御触之通相心得、御領内附属之寺院呼出、別紙書取之趣相含、品ニ寄檀家惣代ノ者ヲモ呼出、本末糺之上本寺之分ハ、梵鐘有無并本山又ハ本寺・小本寺等之訳、其外国郡村宗旨寺号ヲ記置帰寺申付、末寺之内梵鐘無之分モ同様取計、相残候末寺之分ハ、古来之名器、当節時之鐘ニ相用候旨申立候分ハ勿論、御由緒其外遮テ難渋申立候類ハ先ツ相除、全無異儀梵鐘可差出寺々ト治定イタシ候分ハ、御勝手次第鋳換被御申付候積、請書申付、右名器・時之鐘其外難渋之由申立候寺院ハ、追テ可及沙汰旨申渡、是亦帰寺申付置、御領内惣寺院何ケ寺、内本寺何ケ寺鐘幾ツ、末寺何ケ寺、内何ケ寺ハ鐘無之、何ケ寺ハ請書差出、何ケ寺ハ名器・時之鐘其外ノ趣申立候段ノ届書、直ニ長門守方へ差出シ、右名器難渋之由等申立候分別紙ニイタシ、取計方之儀是又長門守方へ問合、得差図可取計、勿論末寺之分モ何宗何国何郡何村何寺、何国何郡何村何寺末、何国何郡何村何寺ト相認可差出旨、其筋之役人中へ通達有之候様存候、依之別紙心得方書取、并拙者共ヨリ諸宗触頭共ヨリ申諭候趣モ有之候ニ付、是又為心得諭書写相添相達候事、

卯十月

二九四　諸宗触頭共ヨリ諭書案

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺之分并古来之名器、時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ大砲小銃ニ鋳換候儀ニ付、今般再応被
仰出候通、梵鐘之儀ハ仏門之重器ニ付、尋常之訳ヲ以テ可被及御沙汰筋ニハ無之候得共、近来異国船度々渡来イタシ、不容易御時節ニ付、格別之
叡慮モ有之、右体重キ法器ヲモ鋳替被　仰出候儀ニ付、此上難渋ケ間敷儀ハ勿論、非常用等申立歎願等イタシ候テモ御取用可相成筋ニハ無之、万一心得違之輩モ有之候ハ、於奉行所吟味之上厳重之御沙汰ニモ可被及候条、御触之趣厚相弁心得違無之様、末々寺院ニ至迄不洩様、早々可申達事、

心得方書取

諸寺院梵鐘之儀ニ付、御触之内古来之名器ト有之候ハ稀成儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分計相除候積、

一鐘銘之内

勅　願

台命　宝祚長久　御武運悠遠

其外

天下泰平・国家鎮護等之文字有之候トモ不及斟酌事、

一御由緒并ニ諸家由緒等有之由之銘文有之趣ニテ、用捨之儀申立候トモ容易ニ可取用筋ニハ無之、尤モ格別訳立候分、其外遮テ難渋申立候分ハ、長門守方ヘ可申聞事、

一本寺ト唱候内、大本寺・中本寺・小本寺・本寺並等之名目有之候得共、一二ケ寺ニテモ末寺門徒有之候分ハ相除候積、

但諸国録所掛所其外末寺ハ無之候トモ、本寺モ無之一本立候類之大地、或ハ寺格宜分ハ時宜次第、是又長門守方ヘ可申聞事、

一朱印地之分差別無之事、

一塔頭地中モ門末無之候ヘハ末寺同様ノ事、

但神社之別当社僧モ同断之事、

一領主附属ニ無之寺院ハ、仮令領内ニ孕リ居候トモ公儀ニテ取調被　仰付候間、私領ニテハ相除可申候事、

一寺院之内無住之分、留守居僧等ニテ難決節ハ、其寺兼帯之本寺、又ハ法類組合寺写相糺、請印可申付事、

一梵鐘差出方持運ヒ等之儀、寺院共難渋不相成様、追テ請取之モノ差遣、万端領主方ニテ取計可申事、

右ハ糺之心得方ニ付、難決議ハ長門守方ヘ可申聞事、

目録

梵鐘鋳換官府ニ対スル議案ノ一
梵鐘鋳換砲銃触案
〔脱カ〕林大學頭申出書付〕
梵鐘鋳換三家方始万石以上以下向々ヘ可相達議案
梵鐘鋳換触案
大砲製造及梵鐘鋳換制度議案

以上五条

二九五　梵鐘鋳換官府ニ対スル議案ノ一

去ル十一日、評儀イタシ可申上旨被　仰聞、御渡被成候諸国寺院ノ梵鐘ヲ以テ大砲小銃ニ可鋳替旨之官符之写并向々ヘ御達案詳略二通リ、其外林大學頭申上候書面トモ一覧仕候処、右　宣下之趣、月次御礼後等ニ出仕之面々留置席ニテ、御達相成候方ニ可有之哉、且京都ヨリノ官符前後御掛紙之分相除、写相添御達相成候方ニ可有之哉、又ハ写ハ御達ニ不及方ニモ可有之哉、并寺院ヘ之被仰渡ハ官符写相添候方可然哉、是モ前後御掛紙之分ハ相除候方ニ可有之哉トノ御儀ニテ、大學頭取調申上候趣ハ、右御達案聊筆削イタシ、御達方之儀ハ月次御礼後等出仕之面々留置、席々ニテ御達相成、京都ヨリノ官符御掛紙之分相除、御三家方溜詰并上野執当増上寺ヘハ写相添御達有之、寺社奉行ヘモ為心得御渡相成、其余ハ都テ不及其儀方可然ト之趣ニ御座候、此儀勘弁評議仕候処、諸国寺院ノ梵鐘ヲ以テ、大砲・小銃ニ可鋳替旨被　仰出候儀、事柄ニ於テハ一ト通之御触達ニ相成可然哉ニ候ヘトモ、今般之儀於京都宣下御座候儀ニ付、大學頭取調申上候通リ、月次出仕後等席々ニテ御達相成候方ニ可有之、然処一体官符之御文段、御政事筋ヲ京都ニ於テ御差綺〔ママ〕紬之筋ニ相聞、殊更御掛紙下五畿内七道諸国司云々ト有之候ハ、当時ノ御政体ニハ不都合ニテ、追々右様之振合ヲ以毎事宣下有之候様成行候ハ、以テノ外ニ可有之候間、御掛紙抔ノ儀ヲ論スル迄モ無之、第一其侭御留置相成候テハ、後々ノ為メ不可然義ニ付、關東迄宣下有之候積リノ御文段ニ御取直、御引替相成候様仕度、尤右之通御引替ニ相成候トモ、向々ハ勿論寺社奉行ヘモ写御渡ニハ及ヒ申間敷、

且寺院之内ニハ御三家方・国持大名領分ヲ初メ、小給所等ニ至迄領主地頭附属之類モ有之、一段之取計ニハ難相成儀ニ付、万石以上以下抔ノ辺ニテ差別ヲ立、万石以上ハ手限ニテ鋳替、海辺領分有之面々ハ枢要ノ地ニ相備、其余居城又ハ陣屋許抔便利之地ニ差置、万石以下之面々ハ

公辺ヘ可差出ト欤何ト欤、右等御仕法ヲモ取調候上ニ無之候テハ、差極可差出旨難

被　仰出、　其上世上玩具ハ勿論、左モ無之品ニテモ必ス銅鉄ニ無之候トモ差支不申類不少候処、右之分ハ其侭差置、僧徒ニ於テハ必用ノ品ト心得候梵鐘ノミ、前書之通被　仰出、鋳潰シ相成候テハ、何分公平之御処置ニ無之候間、必不服ヲ唱ヘ、折角被　仰出候トモ半途ニ廃絶之憂可有之候間、右等之場合兼テ御裁許被成置度、乍去銅鉄之器物必用之外ハ不残砲銃ニ鋳替候様一時御達相成候ハヽ、人気ニ拘リ候而已ニテ、是又容易ニ被行間敷、殊ニ彼是トモニ諸国惣体之事ニ付、深ク取調候ハ品々差支モ可有之儀、存寄而已ニテハ難決候間、先ハ海防掛ヘ得ト取調方被　仰付、其上猶向々存寄ヲモ御尋被成候方ニ可有之、尤右様取計且前書之通官符御引替等ニ相成候ハヽ、彼是時日モ相遷リ可申候間、今般之儀ハ梵鐘ヲ大砲ニ鋳替候様

宣下有之候旨、并右ニ付テハ世上銅鉄之器物玩具ハ勿論、左様之品々無之候トモ、銅鉄ニ無之候トモ差支不申分ハ、売買禁止之趣而已被仰出置候方可然、右之外官符ニ本寺之外ヲ除キ古来ノ名器云々ト有之候ハ、諸国寺院本寺之外ハ古来之名器・時ノ鐘ヲ相除キ、其余ハ一般ニ差出候様ニトノ儀ニ可有之候処、御達案ニ本寺之外并古来之名器云々ト有之、右御文意ニテハ本寺之外、末寺之分ト古来之名器・時ノ鐘等ヲ除キ候様ニ相聞可申、其余前書評議ノ趣ニ見合、御文意不都合相成候廉々ハ、別紙御達案写ヘ掛紙イタシ、且銅鉄器物類停止之儀ニ付、御触案ヲモ取調差上申候、

右評議仕候趣書面之通御座候、乍然右ハ梵鐘鋳立等一ト通停止被　仰出候儀ト違ヒ、全以非常之御処置ニ有之候間、銅鉄等之カナク類売買停止而已ニハ無之、万端右ニ准シ候御制度ニ不相成候テハ、大砲・小銃モ無益ニ相成、其上万一急遽ニ銅鉄入用抔ノ期ニ臨ミ、却テ差支ニモ相成可申哉ニ付、本文之通リ被

仰出候儀ニ候ハヽ、前々申上候通右ニ準シ諸事御改革

御座候様仕度儀ニ御座候、御渡被成候書付五通返上仕候、以上、

卯正月日迭ス

二九六　梵鐘鋳換砲銃触案

二九六の一　向々へ可相達趣　手訳奥御右筆調ニ見ユ

海岸防禦之為メ、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以為鋳換大砲小銃之旨、京都ヨリ被　仰進候ニ付、本寺之外并古来之名器及ヒ当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余悉ク為差出、大砲小銃ニ鋳造致シ、海国枢要ノ地ニ可備置旨被仰出候、尤右之趣諸寺院へハ、寺社奉行ヨリ申渡候間被得其意、取計方等委細之儀ハ追テ可相達候、

正月日迭ス

二九六の二　寺社奉行江

同文言

於京都

宣下有之、別紙之通被　仰出候間、本寺之外并古来之名器及ヒ当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余悉ク可差出旨、諸寺院へ不洩様早々可被申渡候、尤差出方等委細之儀ハ、追テ可相達候、

二九六の三　下書　向々可相達趣　此分モ奥御右筆調ニ見ユ

御三家方始万石以上以下向々へ可相達趣

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・小銃之旨、旧臘廿三日（安政元年甲寅十二月）於京都宣下有之候、近来異船度々渡来、御備向之儀品々御計画被為在候折柄、

叡慮之趣御尤之儀被　思召候、於当地モ兼々御内存モ被為在候儀、別テ深ク

御感戴被遊候御事ニ候間、一同厚相心得、海防筋之儀弥可相励旨被　仰出候、尤本寺之外并古来之名器、及ヒ当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余悉ク可差出旨、寺社奉行ヨリ諸寺院へ申渡候間、被得其意、取計方等委細之儀ハ追テ可相達候、

正月日迭ス

二九六の四　下札　一本文之趣、月次御礼後等ニ出仕之面々留置、席々ニ於テ相達候方ニ可有之哉、

一京都ヨリ差越候官符、前後掛紙之分相除、写相添

相達候方ニ可有之哉、又ハ官符写ハ相達候ニ不及
方ニモ可有之哉
一寺院ヘノ申渡ハ官符写相添候方可然哉、是モ前後
掛紙之分ハ相除候方ニ可有之哉之事、

二九六の五　寺社奉行ヘ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・
小銃之旨、旧臘廿三日（仝上）於京都
宣下有之、別紙之通被　仰出候、近来異船度々渡来、
御備向之儀品々御計画被為在候折柄、
叡慮之趣御尤之儀被　思召候、右体重ク被　仰出候条
厚ク相心得、本寺之外并古来之名器、及ヒ当節時ノ鐘
ニ相用候分相除、其余ハ悉ク可差出候、万一遠境辺土
之者等、不存時勢御趣意柄難相弁ヨリ、心得違之者モ
出来候テハ不容易事ニ付、末々迄能々会得致シ候様入
念可説示候、尤差出方等委細之儀ハ、追テ可相達候、
右之趣諸寺院ヘ不洩様早々可被申渡候、
正月日迭ス

二九六の六　上野執当ヘ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・
小銃之旨、旧臘廿三日（仝上）於京都
宣下有之、別紙之通被　仰出候、此段日光御門跡ヘ可被
申上候、尤委細之儀ハ寺社奉行ヨリ可相達候間、可被
得其意候、
正月日迭ス

二九六の七　増上寺ヘ手紙

同文言

別紙之通被　仰出候、委細之儀ハ寺社奉行ヨリ可相達
候間、可被得其意候、

二九六の八　三奉行（寺社・勘定・町ノ三奉行ヲ云フ）

海防掛
大目付
御目付

同文言

旧臘廿三日於京都
宣下有之趣今日被　仰出候、右鐘為差出方之義、早々
評議致シ可被申聞候事、

外ニ
太政官符写一枚添

二九七　林大學頭申出書付

二九七の一
海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以大砲・小銃ニ可鋳換之旨、京都ニ於テ旧臘宣下有之候ニ付、向々ヘ御触達御案文拝見仕、懸意（愚カ）少々相加、別紙ニ相認差上申候、可然御取捨被下置候様奉願候、且又御下ケ札之三ケ条

一月次御礼後出仕之面々留置、席々ニ於テ御達方ト奉存候、

一京都ヨリ差越候官符御掛紙之分相除、御三家方溜リ詰右ヘハ写添御達ニ相成候方ト奉存候、其余寺社奉行ヘハ為心得御達シ、且上野執当并増上寺ヘモ御達ニ相成、其外之面々ハ不及其儀方ト奉存候、

一寺院ヘノ被　仰渡官符写ハ無之方ト奉存候、尤両山ヘ御達相成候上ハ、追々伝聞モ可仕儀ニ候、御案文之内上野執当并増上寺ヘ被　仰達之条、別ニ愚意可申上儀無御座候、依之御下ケ之書類不残返上、此段申上候、以上、

卯正月日迭ス　　林　大學頭

二九七の二
大學頭差出候別紙

向々ヘ御達之案

御三家始万石以上以下向々ヘ可相達趣

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・小銃之旨、旧臘廿三日（仝上）於京都宣下有之候、於当地モ兼々　思召被為在候儀ニ付、叡慮之趣深ク御感戴被遊候事ニ候間、一同厚相心得、海防筋之儀弥可相励旨被　仰出候、尤本寺之外并古来之名器、及ヒ当節時ノ鐘ニ相用候分相除キ、其余悉ク可差出旨、寺社奉行ヨリ諸寺院ヘ申渡候間、可得其意、取計方等委細之儀ハ追テ可相達候、

寺社奉行ヘ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・小銃之旨、旧臘廿三日（仝上）於京都宣下有之、別紙之通被　仰出候処、於当地モ兼々　思召被為在候儀ニ付、叡慮之趣深ク御感戴被遊候事ニ候、右ハ格別重キ被

仰出ニ候条厚ク相心得、本寺之外并古来之名器、及ヒ当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余ハ悉皆可差出候、万一遠境之者等末々ニ至リテハ、御趣意柄難相弁者モ可有之候間、能々会得致シ候様入念可説示候、尤差出方等委細之儀ハ追テ可相達候、

右之趣諸寺社院へ不洩様、早々可被申渡候、

但別紙官符写ハ、其許共心得迄ニ相達候事候、

表書

林大學頭取調申上候触案写ヘ、掛紙朱書ヲ以懸(愚カ)意認加、夫々加冊仕候書付、

大目付

御目付

海防掛

大目付

御目付

二九八　御三家方始万石以上以下之向々へ可相達趣

二九八の一

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲小銃之旨、旧臘廿三日（仝上）於京都

宣下有之、既ニ　公辺ニ於テモ金銀銅鉄等之諸御道具類、御当用ニ不被為在分ハ都テ御取毀、御実用ニ御充被成候筈ニ付、一同厚ク相心得、海防筋之儀弥可相励、右等之儀ニ付テハ被　仰出候品モ可有之トノ事ニ候、尤本寺之外并古来云々、

二九八の二

寺社奉行

海岸防禦之為ヨリ　宣下有之迄、

既ニ　公辺ニ於テモ金銀銅鉄等之諸道具類、御当用ニ不被為在分ハ都テ御取毀、御実用ニ御充被成候筈ニ候、右ハ格別重キ被　仰出ニ候条、厚ク相心得、本寺之外ハ古来云々、

末分

但別紙官符写ハ其心得迄ニ相達候事、

二九九　梵鐘鋳換三家方始万石以上以下向々へ可相達議案

二九九の一

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺之外ハ古来之名器及ヒ当節時之鐘ニ相用候分相除、其余悉皆可鋳換大砲小銃之旨、於京都

宣下有之候、右ハ近来夷船度々渡来、御備向之儀品々御世話有之候ニ付テハ、兼々　御内存モ被為在候折柄、叡慮之趣御尤之儀被　思召、其段寺社奉行ヨリ諸寺院ヘ申渡候間可被得其意、委細之儀ハ追テ可相達候、

正月

二九九の二　寺社奉行ヘ

同文言

宣下有之候ニ付、諸寺院ヘ不洩様早々可被申渡候、尤委細之儀ハ追テ可相達候間、其段モ申渡可被置候、

二九九の三　上野執当ヘ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲小銃之旨、於京都宣下有之、此段日光御門跡ヘ云々上同前、

正月

二九九の四　増上寺ヘ手紙

二九九の五　三奉行海防掛大目附御目付ヘ達

右御書面梵鐘為差出方之儀ハ、別紙評議致シ申上候通リ、先ツ海防懸ヘ取調方被　仰付、其上ニテ向々ヘ御下ケ被成可然哉ニ奉存候、

三〇〇　梵鐘鋳換触案

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鋳換大砲・小銃之旨被　仰出候、右ハ畢竟武備御充実之御趣意ニ候間、此外銅鉄ハ勿論、錫鉛硝石等何レモ必用之品ニ付、花火并硝石細工、其余銅鉄錫鉛之諸具都テ無益之玩物ニ渉リ候分ハ勿論、日用器物之内ニモ右等之品相用不申候テ差支無之分ハ、自後一般ニ売買停止被　仰出候間、可被得其意候、

右之趣向々ヘ可被相触候、

月日

三〇一　大砲製造及ヒ梵鐘鋳換制度議案

三〇一の一　大砲御鋳立ニ付、

硝石・鉛等御制度之儀、評定所一座ヘ掛達書壱通、寺院梵鐘大小砲ニ鋳換之儀ニ付、

一御三家方并万石以上以下達案写、

一寺社奉行へ達案、
一大目付・御目附・海防掛共評議申上候書付写、
一御勘定奉行始吟味共同断之写、

三〇一の二　評定所一座へ

覚

砲術之儀追々被　仰出之趣モ有之、世上盛ニ成行キ、其上　公儀ニテモ大砲数挺御鋳立相成候処、硝石・鉛・錫等殊之外払底之趣ニ相聞候、然処国々ニ於テハ品ニ寄リ大造之花火相催候場所モ有之由、右ハ当節武備必用之品ヲ無益ニ費シ候儀ニ付、一般ニ花火御禁制被仰出テモ可然哉、且又硝石細工之儀モ無益之玩物而已ニ候処、硝石・鉛等多分ニ費シ候趣ニ候間、是亦当分差留候方ニ可有之哉、得ト致勘弁可被申聞候事、

御三家始万石以上以下向々へ御達案

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘ヲ以テ鋳換大砲・小銃、海国枢要ノ地ニ置キ不虞ニ備、速ニ諸国之寺院へ時勢ヲ示シ、本寺之外古来之名器及ヒ報時之鐘相除、其他悉可鋳換、辺海無事之時ニ相成候ハ、兵器ヲ以鐘御再興可被成旨、旧臘廿三日、
宣下有之候、海防之儀ニ付テハ、兼々御世話被為在候折柄、
叡慮之趣深ク　御感戴被遊候事ニ候間、一同厚ク相心得、銃材差支候ハ、、右之趣ニ可取計旨被　仰出候、尤寺院へハ寺社奉行ヨリ申渡候間、可被得其意候、

三〇一の三　寺社奉行へ

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘ヲ以テ可鋳換大砲・小銃之旨、旧臘廿三日
宣下有之、
叡慮之趣深ク　御感戴被遊、今般別紙之通被　仰出候、若遠境末々ニ至リ、御趣意柄難相弁者モ有之候ハ、能々会得致シ候様、本寺触頭ヨリ入念可説示候、
右之趣諸寺院へ不洩様、早々可被申渡候、

三〇一の四　伊勢守殿

大目付
御目付
海防掛

大目付
御目付

諸国寺院之梵鐘ヲ以テ、大小砲ニ鋳換可申旨之官符、同断之儀ニ付御触達案并御下札之趣、林大學頭取調候書面御触案等、都合五通御下被成候ニ付、一覧勘弁仕候処、御下ケ札之廉々ハ大學頭申上候通ニテ、御差支モ有之間敷、一体梵鐘ヲ以大小銃ニ御鋳換被成候迄之儀ニ候得ハ、当今之御時勢、元ヨリ一ト通御触渡シ相成候迄ニテモ可然哉ニ候得共、

宣旨ヲ被為重候廉ニ対シ、月次御礼後等ニ出仕之面々留置、席々ニテ御達シ方ニ可有之、官符ノ儀ハ別段御書付ヲ以御触達有之候ノ上ハ、是又同人申上候通、御三家方・溜詰衆、其余寺社奉行并上野執当・増上寺ヘハ格別、其他ノ向ヘハ御写等被為流候ニハ及申間敷哉、御触案詳略弐タ通之内、大學頭加冊仕差上候方、別テ御趣意柄貫徹可仕哉奉存候得共、本寺之外并古来之名器云々ト申御文段、本寺之外并ニモ有之候テハ、末寺モ除キ候様ニモ相聞、御文意聊了解仕兼候ニ付、矢張勅書御原文之通、本寺之外ハ云々ト御認替相成候方ニ可有之、且又御当地ニ於テモ兼々ト申御文段之一行ハ、元ヨリ御沙汰御座候迄モ無之儀ト奉存候、尤梵鐘御鋳潰等ニ相成候上ハ、諸般之事共右ニ準シ候御取計振モ、夥多可有之筈ニテ、差向候テハ向後都テ実用無之諸器什ヘ金銀銅鉄類相用ヒ、又ハ新規銅仏鋳造及仏具類ヘ金銀等妄ニ費候儀等ハ、一切御制禁被為在候様仕度、乍去即今一時ニ被　仰出候ヨリハ、無言教化之御処置率先躬行之道ヲ以、御当用ニ不被為在、金銀類之御道具等御取潰之上御実用ニ被為充、猶梵鐘等為差出候頃合御見計、其時機ニ応シ逐々御沙汰之品モ有之候ハ、御都合宜敷カルヘク候間、右等之御意味合御認添御触達相成候得ハ、御内存被為在候段ハ顕然之儀ニ付、別テ右一行之御文段ハ御省キ相成候テ可然哉ト存候、依之別紙大學頭取調申上候御触案写等、掛紙朱書ヲ以愚意認加ヘ差上申候、此外上野執当等トノ被　仰渡案等、別段可申上廉無御座候、私共評議仕、御下之書面類相添返上、此段申上候、以上、

正月　大目付
御目付

海防掛
大目付

三〇一の五

御目付

〔近貞、勘定奉行〕松平河内守
〔聖謨、勘定奉行〕川路左衛門尉
〔忠徳、勘定奉行〕水野筑後守
〔範忠、勘定吟味役〕村垣與三郎
〔忠養、勘定吟味役〕岡田利喜次郎

当月十一日御下ケ被成候海岸防禦之為メ、諸国寺院之鐘ヲ以大砲小銃ニ可鋳換之

宣下ニ付テ、向々ヘノ御達案トモ解見勘弁仕候処、当時銅追々払底ニ相成候付、銃材ニ御差支、右ヨリ海防之御手当不足ニ相成候テハ如何ト、無御余儀ヨリノ御事ニ可有之哉ニ付、京都ヨリ被　仰越候品有之候トテ、心得違一概ニ手荒之次第ニ及ヒ候様之儀有之候テハ、従来仏法ヲ御立被置候風俗ト相成居候儀、人民之疑惑有之間敷トハ難申候ニ付、御触達之文面ニ聊其味相含、銃材差支候ハ、右之趣ニ可取計旨之文段認加候方哉ト、別紙ニ取調入御覧候、尤右ハ寺院之義ニ付、寺社奉行ニ於テ委細取調申上候儀ト奉存候間、御治定之上ハ、別段席々ニテ御達ニモ不及、一ト通之御触ニテ可然奉存候、且右之通相成候上ハ、仏像・半鐘・水鉢等ノ類モ追テ御沙汰有之候迄ハ、銅ニテ鋳造不致方相当之筋ニ付、得ト寺社奉行ニ於テ勘弁之上、御触案取調可申旨被　仰達方ト奉存候、但古代ヨリノ鐘鋳潰候テ兵器製作等之義ハ、専ラ關東之御職掌ニテ、右等之儀前広御内意等モ無之、表向被　仰出候様ニテハ、以後之御差支如何可有之哉ト深心配仕候、始末ニ寄候テハ、無御余儀御受モ難被為成御事等有之間敷トモ難申、其節ハ御不崇敬欤ト相疑候姿ニ、自然成行申間敷モノニモ無之候ニ付、今般之儀若御内沙汰等モ無之被　仰越候御事ニ候ハ、従来之御仕来モ有之事故、所司代之御存寄御尋ノ上、時宜ニヨリ其筋ヘ後来之処御通達被成置候方ニモ可有之哉、且太政官ヨリ五畿内七道之諸国司ヘ符到奉行トノ宣下ハ、御近例等有之、御認ニ相成候事ニ候ハ可然候得共、今般御初テノ事ニ候ハ、聊会得仕兼候様奉存候、左候ハ、御書面ハ表向之御達ハ無之方欤トモ奉存候、此段心付候儀ニ付申上候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、依之被成御下候書類ハ評定所一座ヘ相廻シ、御触案并寺社奉行ヘ御達案トモ相添、此段申上候、以上、

卯正月

三〇一の六

去々丑十一月十日、評議致シ可申上旨被　仰聞、御渡被成候御書取一覧仕候処、砲術之儀追々被　仰出之趣モ有之、世上盛ニ成行、其上　公儀ニ於テモ大砲数挺御鋳立相成候処、硝石・鉛・錫等殊之外払底之趣、然処国々ニテハ、品ニ寄大造之花火相催候場所モ有之候由、右ハ当節武備必用之品ヲ無益ニ費シ候儀ニ付、一般ニ花火御制禁被仰出候テモ可然、烈公評、大造ノ花火ニ候ハハ如何被成候哉、一体狼烟ニ、色々ノ業玉折ハ翫物同様也　且又硝子細工之儀モ無益之翫物而已ニ候処、硝石・鉛等多分ニ費シ候趣ニ候間、当分御差留被成候方ニ可有之哉、得ト勘弁致シ可申上トノ趣ニ御座候、

此儀勘弁評議仕候処、元来硝石之儀、国産余分ニ無之趣ニ候処、当今非常御用意ニハ、専ラ御宇御充実ニ無之候テハ難相成第一之品ニ有之候処、近頃砲術之儀ニ付テハ、追々被　仰出モ有之、世上一般格別盛ニ相成、諸向ニ於テモ日々ノ遣ヒ捨リモ不少、益払底可相成ハ当然之儀ニ付、花火之儀、御当地ハ夏秋ニ限リ候品ニテ、殊ニ格別大造之花火モ無之候得共、在方ニ於テハ神事祭礼出来、秋豊熟之祝ヒ抔ト唱ヘ、大造之製作等致シ、一時ニ多分之硝石ヲモ費シ候哉ニ相聞、素ヨリ無益之儀、既ニ前々ヨリ御曲輪近辺ハ勿論、在方ニテモ大造之花火立間敷旨度々御触モ有之、勿論右ハ硝石之捨リヲ御厭ヒ有之候儀ニハ無之、全ク花火之憂ヲ被為厭候御趣意ニハ候得共、右御触面モ有之候上ハ、旁以御沙汰之通御制禁被　仰出候トモ、差支有之間敷、非常過誤之御取締モ弥以行届可申、併右様被　仰出候テハ、水辺料理屋或ハ水茶屋向船宿等之衰微ニ可相成哉ニ候得共、質素節倹之御趣意行届、驕奢之風習一洗之場ニ至候ヘハ、右類出来可致ハ必然之儀ニテ無拠筋ニ候間、一般御制禁相成可然哉、且硝子之儀同様之製法イタシ、鉛・硝石等何程費シ候哉不相分候ニ付、市中硝子屋共年分之鉛・硝石遣高探索仕候処、硝子吹立候竈所持致シ候ハ、凡ソ拾壱人（当時硝子ノ流行僅少ナルヲ知ルニ足ル）有之、壱ヶ年鉛五十貫目余、硝石三十貫目程之由ニテ、瑣細之儀トモ難申候間、吹立方御差留相成候ハ、一廉之減シニモ可相成候得共、右細工之内眼鏡・薬器等之類モ有之、絶テ無之様成行

候テハ差支之儀モ難計候間、硝子ニ無之候テハ差支候品ハ格別、其外ハ一般吹立御制禁被　仰出候方ニ可有之、錫器物モ同様之儀ニ付、錫ニ無之候テモ差支不申品ハ、都テ売買難相成旨、被　仰出可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、尤本文之通被　仰出候儀ニ候ハ、今般御渡被成候梵鐘鋳潰之儀ニ付、評議仕申上候銅・鉄類無用之器物停止之儀ヲモ、一同被仰出候方可然候ニ付、右御触案ヘ花火并硝子・錫・鉛等之儀ヲモ認加差上申候、御渡被成候御書取壱通返上仕候、以上、

卯正月

目録

閣老阿部正弘水戸公ニ贈ル書牘
諸寺院梵鐘引上ケノ議水戸公阿部正弘ヘ与ル書翰
〔脱カ〕〔梵鐘鋳替ノ儀安政二卯正月阿閣ヘ御親翰〕
太政官符五畿内七道国司
梵鐘御触并京都ヘ御請振ノ義
梵鐘鋳替ノ儀
蝦夷地ノ儀
梵鐘ノ儀
梵鐘鋳替大砲ノ儀
梵鐘ノ儀
梵鐘ノ儀ニ付御手扣御直書
梵鐘ノ儀
奸僧誣説ノ儀
西本願寺掛所輪番ノ僧ヨリ京地同列共ヘ遣候書面ノ由ニテ京地ニ流布致シ候書付写
鵜飼吉左衛門書翰

三〇二　閣老阿部正弘水戸公ニ贈ル書牘〔安政元年〕

三〇二の一

以手紙奉申上候、追々寒気相増候得共、益御機嫌能奉恐悦候、陳ハ過日御相談御座候諸寺院釣鐘云々大砲ニ鋳替ノ儀、京都ヘ申遣案、甚不文ニハ候得共認試候間、内々御相談申上候、尤未同列ヘハ右案文相談致不申候間、右以前思召無御伏蔵御添削希候、其上認直シ同列ヘモ相談、京地ヘ申遣可申哉ト存候、

講武場モ先ツ三ケ所モ取建候積、未場所少々極リ兼居申候、一両日ニハ何ト欤可申出哉ト存候、右ハ一ケ所

七八千坪位ニテ、槍・剣并砲術稽古一ト場所ニテ出来候様致、御旗本・御家人等弁利宜、十分稽古出来候様致度ト見込承仕候、何レ御相談可申上候、短日取込乱筆申上候、万々御読分ケ奉願上候、以上、

十月二十三日〔安政元年〕　　阿部伊勢守

〔別紙〕

然ハ近年異国船度々渡来、昨年来ノ夷情別テ不容易、当節御備向之御手運ニ相成、御台場築立、大砲段々鋳造出来、此上枢要之場所ヘ御据付之大砲并水軍船備之御筒、又ハ野戦筒・小筒等迄段々御鋳増可相成、「申〔朱画〕〔頭注〕〔阿閣自ラ削ル分〕サバ日本ニ一丁モ数多大砲有之様ニ無之テハ、御実備トハ難申」、右ニ付テハ御入費モ又莫大ニテ、有限之御勝手向、此上何ト欤御仕法相立不申候テハ、迚モ御用途モ附兼候儀、乍去眼前ニ外寇ヲ引請候テ之儀、右之御武備ハ決シテ被捨置不申事ト、一同及評議、何レ〔朱書〕〔京都御警衛ヲ始メ諸国沿岸御手当等追々御処置モ〕〔頭注〕〔御添削ハ老公「追々御変革之儀」モ可有之候得共、差向大砲類、此上共被遊候分〕追々御鋳造無之テハ不相成候事故、品々致熟慮候処、積年由緒等モ可有之候得トモ、時勢不得止場合、諸寺院ニ有之釣鐘類、時之鐘ニ不相用分、「〔朱画〕〔頭注〕〔老公御削リ〕鋳潰シ」大砲ヘ鋳替ニ相成候様致度、全体当節柄之儀ニ候ヘハ、何卒外患ヲ相除度トノ志ハ人々可有之故、縦ヒ由緒有之寺院等ニテモ、穏ニ承伏可致筈ニ候得共、夫程迄ニ時勢ヲ〔不脱カ〕存候輩モ多ク可有之候間、右等之処モ再三評議ヲ尽シ、

台慮奉伺候処深御心配被遊、時勢不得止事候場合ニ候ヘハ、

叡慮之御沙汰ヲ以テ、諸寺院之釣鐘、本山之外、時之鐘ニ相用不申分「〔朱画〕〔頭注〕〔同断〕「鋳潰シ」」、大砲ニ鋳替候様被遊度、何卒右ハ

叡慮仰候トノ　上意ニ候、実以テ時勢無拠儀ニ付、御自分ニモ篤ト勘考被致候上、前文之趣関白殿エ折入被申述、御同人存意モ如何可有之欤、何卒速　御勅答相成、叡慮ヲ以テ被仰遣候ヘハ、万々御都合宜候間、左様相成候様致度、此段厚御取扱有之様存候、

三〇三　諸寺院梵鐘引上ケ之議水戸公阿部正弘ヘ与ル書翰〔安政元年〕

芳墨披誦、如来諭寒威漸隆愈御多祥南山々々、諸寺院ノ鐘大砲ニ鋳替一条、所司代ヘ御文通之案御相談之趣御至念之御事ニ候、近来之御決断敬服々々、扨御承知

之通、僧徒共党ヲ結ヒ居候勢故、表発致候ハヽ必種々流言申フラシ、或ハ後宮ヘ嘆キ、或ハ宮方等ヘ訴ヘ、其外愚俗ヲ誑惑致候儀指見ヘ申候、其時　廟議御動キ被成候様ニテハ、最初ヨリ表発不致ニモ劣リ申候間、兼テ確乎不抜ノ御心得勿論之儀、扨又仏ニ迷ヒ居候モノハ、憤リ候儀指見候ヘ共、非常之御時節故不被為得已云々ト申ス儀ヲ、人々奉承知候様致度、夫ニハ万端出格之御処置無之テハ相当不致、例ヘハ武器・食器等之外、銅器新製御停止被　仰出候類、其外格別之御取締被　仰出候得ハ、仏ニ迷ヒ居候者モ泣ヤミ可申欤、何事モ依然平穏ニテ無用ノ銅器新製致居候中ニテ、突然ト鐘引上ケ之儀ノミ表発候テハ、人心服シ兼可申、此処精々御評論、万事出格之御決断渇望致候、御別紙熟覧折角之御申聞故、心付左ニ相認候、

一変革ノ二字耳立可申欤、

一鋳潰シノ文字モ何トナク無惨ニ相聞ヘ、俗耳ニフレ可申、右文字御除キ候テモ、鋳替ニテ相分リ可申欤、

一別紙之内可然処ヘ、

皇居御造営之儀、遅々致シ候テハ決テ不相済、御武備之儀モ等閑ニ致シ置候テハ不相成、大小内外多端之御用途、尋常之事ニテハ御届ニ不相成候故、不被為得已右様釣鐘之事之評議ニモ及候儀、乍然釣鐘之儀、元来一寺ノ力ニテ出来候品ニ無之、施主関係ノ事故、可相成ハ其侭被指置度候、追々反射炉等御取建、鉄銃御製造ノ思召ニ被為在候得共、当節ニ至候テハ異船畿内近海ヘ迄渡来指向候御場合故無御拠云々ト申気味ノ御文言、御加ヘニテハ如何、

一講武場モ近々御決シニ可相成由、為

国家抃賀此事ニ候、此節新制之鑾海篇一覧之処、乍憚是迄ノ勢ハ、総テ滿清ノ悪シキテイタラクヲ、其侭ニ行ヒ居候姿御同様、実ニ恐入候事ニ候間、何分精々実事実效御勉励不堪至願候也、

十月二十四日　　水隠士

勢州殿

二白、所司代ヘ御文通ハ、各御連名ノ方ト存候、如何、昨日之貴案返璧御落手可給候、

三〇四　梵鐘鋳替之儀安政二卯正月阿閣ヘ御親翰（徳川斉昭より）

雨後一段春色ニ相成候、無御障精勤令大賀候、扨今日京師ノ消息ヲ得候処、梵鐘鋳替一条旧冬念三

勅命相発シ、彼地ニテハ追々伝播之様子ニ候、如何ナル訳ニテ此地ニテハ御表発無之哉、定テ表発ノ手数多端トハ相察候得共、右様出格ノ事道路ニ流布ノ上ニテハ響キ合不宜、且ハ重キ勅命三十日モ滞リ居候様ニテハ如何敷候故、先々一日モ早ク表発ニテハ如何、此段草々申進候也、

正月二十一日

別紙本文

勅命如何様ニ出候哉、右ニ付、御請様ノ事御指上ニモ相成事ニ候ハヽ、出様ニヨリテハ、是亦後憂無之様ノ御請方ニ致度候、

三〇五　大政官符五畿内七道国司

三〇五の一　応以諸国寺院之梵鐘鋳造大砲小銃事

右正二位行権大納言藤原朝臣實萬宣奉

勅、夫外寇事情、固所深被悩　宸襟也、況於緇素、何有差異、頃年墨夷再乗入相模海岸、今秋魯夷渡来畿内近海、国家急務只在海防、因欲以諸国寺院之梵鐘、鋳造大砲・小銃、置海国枢要之地、備不虞、速令諸国寺院各存時勢、本寺之外、除古来名器及報時之鐘、其他悉可鋳換大砲、為　皇国擁護之器、及辺海無事之時、復又宜銷兵器以為鯨鐘、不可存異議者、諸国承知、依宣行之符到奉行

権右中弁正五位上兼行左衛門権佐藤原朝臣花押修理東大寺大仏長官従四位上行中務権少輔主殿頭兼左大史小槻宿禰奉花押

安政元年十二月二十三日　〔孝明天皇紀にて校訂〕

三〇五の二　御朱書烈公親筆〔安政二年正月二十七日〕

伊勢守へ返候節書加へ遣シ候扣

拝見相済返璧仕候、御末文辺海無事云々、乍恐甚蛇足、他日ノ大患ニ候、後年ニ至リ　禁裏万々一仏法御信仰ニテ、復又鯨鐘御鋳立ト申時、關東ヨリ正議被　仰立候テモ、違　勅抔申事ニ相成候テハ、不容易候成事、遂事乍ラ何トカ御工夫有之間敷哉、

但辺海無事ニ候へ共、備不虞候儀ハ、万世無之テハ不相成、左候得ハ兵器ヲ銷候事ハ、迚モ出来不申理故、一応其段ハ　京師へモ被仰上、幕府ヨリノ御達ニハ右之意可被　仰出欤、

三〇六　梵鐘御触并京都へ御請振之義安政二卯正月二十六日阿閣始へ御書案

過刻ハ於営中得面晤、大慶致候、扨拝見被　仰付候書類ノ内梵鐘一条ハ、アマリ世間へ流布無之内、少シモ早キ方ト存候間、先ツ右書類而已熟覧返璧致候、

一向々へ御達之趣、夫々大同小異、何レニ相成候テモ深ク存意無之候得トモ、大小御目付ノ調ハ、梵鐘ノ事、銅・鉄・鉛・錫等ノ事混シ如何敷候欤、梵鐘ハ勅命重キ事故、一事而已被仰出、銅・鉄・鉛・錫等ノ事ハ同日別ニ御触可然哉

一官符ノ写ハ、一円ニ御下ケ無之方ト存候、近クハ改元ニ付テモ詔有之候由ノ処、夫サヘ御下ケ無之候間、官符ハ尚更ト存候

一旧臘廿三日ハ勿論御削リ可然欤、

一於京都　宣下有之モ御除キ、別紙ニモ相見候通、従京都被仰遣ト改候方可然哉ニ候ヘトモ、官符ノ面ヘ相当不致候ヘハ、従京都被仰出候ニテハ如何、

一評定一座ノ調、銅・鉄・鉛・錫云々ノ御停止、至極尤ニ候ヘハ、梵鐘ト同日表発ノ方ト存候、

一過刻モ御咄申候通リ、京都ヘノ御請肝要ト存候、御文体等如何ナルモノ欤ハ不存候得共、其御意味ハ梵鐘云々ノ儀、出格ノ勅命御感戴被遊候旨、扨御末文辺海無事ノ時復又銷兵器鋳鯨鐘ノ一条、無余儀右様被　仰出候哉ニハ候ヘ共、近来万国ノ形勢少シモ御弓断不相成、此上辺海無事ニテモ兵器ヲ銷候テハ、則此度勅命ノ内、備不虞ノ三字ヘ相当不致、右御末文有之候テハ、後年如何様ノ混雑ヲ生シ可申モ難測候間、可相成ハ御末文少々御差略、辺海無事国力充実ノ後別以銅材鋳鯨鐘ノ儀ハ勝手次第ト申様被成度云々、

但旧冬御内慮被仰進候時、其侭御請ニ相成候段、何ト欤御申訳有之可然ト奉存候也、

正月念六夜　　。。。

阿部殿始メ

右御案文得ト　御賢考奉仰候、　登城日被　仰出候由、所詮廿八日ニハ間ニ合申間敷候ヘハ、両三日ハ緩々御勘考モ可然欤トモ奉存候、

臣〔藤田〕彪

梵鐘之儀

安政二卯正月念八

梵鐘ノ書類急キ昨日返上ノ節認落候間、左ニ御相談申上候、

一御勘定奉行評議ノ中ニ、一円ト相成候テハ人気ニ拘リ云々、一ト通リ尤ニ候ヘトモ、却テ不平ニ相成可申候間、矢張本山并古来ノ名器、当節時ノ鐘ニ不用分ハ一円、半鐘迚モ鐘ニ相違無之候間、御引上ケ可然候、

一於　公辺ハ御役人正ク候ヘ共、僧侶ハ兎角墨・魯同様計策ヲ以テ欺キ候間、寺社奉行家来抔不平不正ノ扱無之様致度候、

一天下中ノ大小梵鐘、凡テ其数ヲ調候上、一旦ハ　公辺ノ御品ニ引上ケ、其後諸大名海岸ノ多少ニヨリ被下ニ相成可然、此儀ハ早ク御達出方可然候、

一第一ニ両山ヨリ御手始メ、　公辺ニテ諸国ノ手本ヲ御出シ肝要ト存候、

第三条ヘ御下ケ札如左、

本文ハ鐘何程此貫数何程ト相分リ候上、不残打砕キ先年於弊邑竹火ニテアブリ打砕キ候所容易ニ砕ケ申候事、海岸ノ多少ニ寄リ可然程ツ、被下ニ相成可然候自領ノ鐘ノ外他領ノ分モ被下、又ハ自領ノ分モ半分被下、残リハ外ヘ被下候様、左候時ハ　公辺ヨリ拝領ノ廉相成候間可然候、被下候名目ハ、武備為手当銅材何万何千貫目被下ト申振可然哉、

外ニ封シ遣候分、

極密申候、只今天下ノ様子ハ、乍恐譬ヘハ七ツ半時頃ト申様子ニ見ヘ候ヘハ、三家・御家門・御譜代・御旗本ハ、一ト通リニ心得候テハ決テ不相成候処、此度鐘ヲ以テ大小砲ニ相成候ハ、異船防禦ノミニハ無之、先日於営中モ一寸御咄申候ヘキカ、御手加減ニテ、　公辺ハ勿論、三家・御家門・御譜代大名・御旗本ノ武備整候様被成度、此後内地ノ戦争ハ大小砲少ク候テハ勝利ハ六ケ敷候半故、右之処能々御含ニテ御扱ニ致度、御調モ出来候ハヽ、拝見モ可仕、尚又心付候儀ハ登城ノ節、御相談可申上候得共、先ツ一通リ此段極密申進置候也、

梵鐘之儀

安政二年卯二月十日阿閣始ヘ御親書

快晴ニハ相成候得共、春寒ニ立帰候、弥無御恙欣抃々

々、過日於　営中御相談ノ梵鐘一条、尚又熟慮ノ処、
譬ニ引候モ恐多ク候得共、魯夷ノ条約ヲ直シ候サヘ六
ケ敷候処、一旦被　仰出候官符ヲ直シ候儀ハ恐入且ハ
難物ニ候ヘ共、御為筋ノ事故、何程　叡慮ニテモ再応
御覆議被遊候方、却テ御忠節ノ御筋ト奉存候間、所司
代ヘ御申遣案、試ニ認見申候、必スヽ此通リト申儀
ニハ無之候間、御参考ニ致シ度候、
一実ハ十七字改リ候上御触ニ相成候ヘハ無此上候得共、
所司代扱兼候モ難計、且ハ官符ノ写次第ニ流布致シ、
真偽マチ〳〵ノ風聞ニ候間、僧徒姦計等無之内、来ル
十五日早ク御触ノ方ト愚慮致候、
一同日御触ニ可相成別紙ノ内、末文ニ
　仏器ノ儀モ指支無之分ハ云々
ト申候テハ、必ス是モ指支、彼モ指支ト相成候間、
　仏器ノ儀竹木又ハ陶器等ニテ相済候分ハ
ト相成候方可然哉、例ノ癖説存分申進候也、

二月十日　　水隠士

勢州殿初

三〇七　梵鐘鋳替之儀安政二卯二月欽阿閣ヘ被遣候

親案

各方直書ニテ所司代ヘ御申遣振、試ニ認申候、
文儀等不案内、全ク大意而已ニ候、

上略

外寇事情深ク
宸襟ヲ被悩、諸国寺院ノ梵鐘ヲ以テ、大砲・小銃ニ鋳
替、海国枢要ノ地ヘ指置、不慮ニ備候様宣下候趣、実
以出格之叡慮感戴被遊候、然ル処官符ノ末文、及辺海
無事ノ時復又宜銷兵器以為鯨鐘ノ十七字、無余義御意
味ニテ、右様被　仰出候哉ニハ候得トモ、近来海外万
国ノ形勢少シモ弓断不相成、仮令此末辺海無事ノ時ニ
テモ枢要ノ地ニ台場無之候テハ、前文備不虞之
叡慮ニモ相当不致候処、右十七字有之候テハ、後年ニ
至リ僧徒共安政ノ官符ヲ証拠ニ致シ、是非大砲・小銃
ヲ以テ又々梵鐘ニ鋳替ノ儀、党ヲ結ヒ願出候様成行候
モ難計、混雑ノ基ニ候間、右十七字御除キニハ相成間
敷哉、旧冬　御内意被　仰進候節、御心不被為付、今
更御申立被成候ハ如何敷候得共、指見ヘ（本ノママ）後年ノ御不為
ニ相成候儀ヲ、其侭御奉行被成候テハ御不本意ニ候間、

今一応御自分ヨリ関白殿迄示談被致候様被　仰付候、

一右十七字御除キニ相成候テハ

叡慮ニテモ寺院気受ニ拘リ候トノ、御模様ニモ候ハヽ、無已候故、辺海無事国力充実ノ後、別ニ銅材ヲ以梵鐘鋳立候儀ハ勝手次第、ト申様ノ文儀ニ御改メニ相成候テモ可然哉トノ御事ニ候、

一於京都旧冬廿三日被　仰出候御儀故、於爰許早速向々ヘ相触候筈ノ処、十七字御除キニ相成候上相触候方ト、彼是致評議居候内、官符ノ写京都ヨリ泄候哉、専世上ニ流布致シ、此上遅々致兼候間、不得止此度別紙之通リ向々ヘ相触申候、且梵鐘ヲモ鋳替候御時節、銅・鉄・鉛・錫等無用ノ品ニ費シ候テハ不相済候間、尚又別紙之通相触申候、

一官符之儀、御旧格ヲ以テ認候文儀ニテ、重キ御事ニハ候得共、表向国々ヘ御触ニ相成候儀ニモ無之、此度世上ヘ流布ノ分ハ、全ク泄候迄ニ候ヘハ、今般右十七字御改ニ相成候分、京都御記録ト關東留記ニ相載置候ハヽ、此節流布ノ官符ヲ証拠ニ致候者ハ有之間敷、万一有之候迚モ、其本サヘ改リ居候ハヽ、混雑ノ患モ有之間敷トノ御事ニ候、

右件々、関白殿ヘ篤ク示談被致候様存候、云々、下略、

三〇八　蝦夷地之儀・梵鐘之儀

安政二卯三月十五日阿部閣老ヘ御親書

春暖御佳勝欣抃々々、扨ハ蝦夷地之儀、乍憚御姑息ニハ候得共、御引上ケ先々宜敷候処、右之御処置一日モ早ク無之テハ、当夏ノ間ニ合申間敷、是非当月ノ内御人撰等モ粗御治定、四月ニハ北地ヘ押出候様有之度存候、

一梵鐘之儀、京師ヘ今一応御覆議ノ事建白ノ処、右ハ夫ナリニ相成候哉、若又御覆議ニ相成候ハヽ、承知致度、且被仰遣候面ヲモ心得ニ拝見致度、右ハ此方ニ格別ノ証拠無之テハ、他日僧侶ヨリ彼是申立候儀差見ヘ申候、此段草々申進候也、

三月十五日　　水隠士

勢州殿

三〇九　梵鐘鋳替大砲之儀

安政二卯四月十四日阿閣ヘ御返書案

華翰披閲、梵鐘一条過日御咄申候儀、熟考被致候上、

縷々御論弁之趣、再三反復致候、愚老見込ハ、海岸ノ多少ト有来梵鐘ノ多少ニ寄甚幸不幸有之、不平ニ可相成哉トノ掛念ヨリ、平均ノ方ト思慮致候処、關八州位ノ事ト違ヒ、六十余州ノ上ニテハ、御書中之通リ　公辺ノ御手数、中々間ニ合申間敷、第一僧徒怨候上ニ、大名不服ノ廉御尤千万ニ候間、幸不幸ハ有之候テモ、有来ノ自然ニ任セ国主領主ヘ夫々御任セノ方御同意ニ候、但国主領主ヘ御任ニ相成候ハヽ、仏ニ対シ候向ハ俄ニ時ノ鐘又ハ謂レアル鐘多ク相成、又仏ヲ好ミ不申向ハ謂レアル古器迄ヲモ引上ケ候類、僧侶ノ方不平出来可申哉モ安心不致候得共、夫以面々ノ致候事故、於公辺ハ頓着無之候欤、遅巧ハ拙速ニ如カストヤラン、長キ中ニハ善キ事ハ無之候間、ドノ道速ニ御決断、一挺ツヽモ早ク大小砲出来候方御為ト存候、貴論逐一御尤ユヘ不及細答候、天下ハ天下ノ天下、一人ノ天下ニ非サルノ御見識、感心此事ニ候也、

四月十四日即刻認　　水隠士

勢州殿

二白、御料ノ分ノミニテモ、櫻馬場等一二ケ所ニテハ相済不申トノ儀、定テ左様可有之、江戸計ニテモ余程可有之、左候ヘハ大坂ハ大坂、蝦夷ハ蝦夷、最寄々々ニテ存分御鋳立ト存候、不一、

三一〇　梵鐘之儀

安政二年八月初六勢州ヘ口上覚トテ渡ス

梵鐘之儀、最初ヨリ申述候通中々不容易候間、是迄モ遅延ノ事故、此上例ヘ少ク御猶予ニ相成候共、始終ノ貫徹肝要ニ候間、急ニ僧徒ノ気ヲ激シ不申様致度、天下梵鐘ノ惣数モ不相分内、席上ニテ古来名器等ノ境論候ヨリハ、先ツ本山始メ惣釣鐘・半鐘等ノ数并寸尺・銘ノ文義等委細何月迄ニ書出候様被命、惣数分候上ニテハ、本山并掛所等迄ハ御用捨ニテモ、存ノ外鐘数沢山有之モ難計、又余リ御用捨ニテハ、鋳換可成分何程モ無之候ハヽ、全ク本山、当節時ノ鐘ノ外不残御引揚ニテモ、天下ノ御為故無已存候、本山迄為書出候ハヽ、気受ニ拘リ候ト申説モ可有之候ヘ共、右ハ書出候上ニテ、瑕ト御免ニ相成候訳ヲ申喩候ハヽ、可然哉、

但シ、万々一匿シ置候儀、後日ニ相分リ候ハヽ、其寺ハ破却ニモ可相成儀ト存候ヘハ、

叡慮ヲ違キ、　公辺ヲ欺キ候儀ハ有之間敷、有体

ニ可申上事ト存候、

三一一　梵鐘之儀ニ付御手扣御直書

安政二乙卯歟

九月晦日登城ノ節可申達致候処、先ツ扣置

梵鐘銃砲ニ鋳換一条、諸国ノ撞鐘一同　公儀ヘ差上、万石以上ハ其領主ヘ被下、領主ニテ鋳換、万石以下モ願候ハヽ、自分鋳換可被　仰付旨、委細過日ノ御触ニテ明白ニ候ヘ共、万一万石以上ノ領主等寺院ヘ狃合、私ニ致用捨候様ニテハ、　公儀ヨリ被下候銅材ヲ、私ニ寺院ヘ遣シ候モ同様ニテ、僧徒共　公儀ヲ奉恨、領主等ノ私恩ニ懐キ候筋ニ相成、甚不相済事ニ候間、領主等ニテ鋳換手余リ候歟、又ハ領分不相応ニ鐘数多ク鋳換行届兼候類、又ハ従来銃砲手厚ニテ梵鐘鋳替ニ不及分ハ、都テ公儀ヘ差出候様御達ニテ可然哉、

但シ書ヘ、鐘ノ貫数申出候様ニトノ事、并何時迄ニ出来候様達ノ事無之ハ、埒明不申而已ナラズ、引上候テ外用ニ致候モ難計候ヘハ、是等モ何トカ有之可然哉、

三一二　梵鐘之儀

安政二年歟閣老ヘ被遣候御存意書

公武格別ノ御由緒云々、

但シ是ハ全ク御懐ノ儀ニハ候ヘ共、

叡慮ヨリ相発、於　公辺被　仰出候御儀ニ候ヘハ、公武御由緒ノ品ハ勿論ト申位ニ無之候テハ、御響合不宜ト存候、

御触書案ノ内

梵鐘ノ儀ハ仏門第一ノ法器云々、出宗ニテハ右様申候共、　公辺ヨリ右様極メヲ付候ハ如何故、

梵鐘之儀、其寺々ノ法器ニハ相成居候ヘ共、多分檀越寄進ノ品ニ候ヘハ、容易ニ　御沙汰云々ト改メ候テハ如何、

法用之儀ハ在来ノ半鐘云々、

半鐘ト申テモ大小種々有之、既ニ先年弊邑ニテ鋳換候節、半鐘ト唱候内ニモ随分重大ノ品モ有之候故、夫々引上候ヘキ、今般表向半鐘ヲ許シ候ハヽ、小振ノ梵鐘ハ皆半鐘ト可申立候間、大サ何程目形何程以下ヲ半鐘ト御定メ可然、火之見櫓ノ所抔ハ半鐘ト唱ヘ可然候、左候ヘハ、在来ノ半鐘ノ文字ハ先ツ除キ

申度候、諸宗触頭共へ論書案ノ内ニモ、
梵鐘之儀ハ仏門ノ重器云々、前同断、
川路来月六日発足ノ由、

三一三　奸僧誣説之儀

安政二年乙卯十月、西本願寺輪番僧徒文通ノ由ニテ致流布候間、写取差下シ候旨、京地詰役人書面ノ写

西本願寺其御地掛所（築地歟）輪番ノ坊主ヨリ、同列共へ別紙之通申越候由ニテ、於当地所々へ申触候歟ニテ、追々風聞承申候処、別紙手ニ入候間、写取入御覧候、此坊主悪僧ニテ、興正寺門跡ヲ本願寺ノ末寺扱ニ致候目論仕、追々取繕ヒ、既ニ（徳川家斉）慎徳院様御一周忌納経ノ節モ、右ハ本願寺末寺ニ付、輪番達ヲ受、興正寺使僧相達候先例抔ト申張、大取合出来、漸当五月中事済ニ相成候由、右之通リノ悪計而已巧ミ候者ニ御座候間、此末如何様ナル風聞差出候モ難計、実ニ痛心仕候ニ付云々、

三一四　西本願寺掛所輪番ノ僧ヨリ京地同列共へ遣候書面ノ由ニテ京地ニ流布致シ候書付

写

一筆啓上仕候、先以両御門跡様益御機嫌克可被（本ノマヽ）為御座奉恐悦候、然ハ梵鐘鋳換ノ儀、寺社御奉行安藤長門守（信睦・磐城平藩主）殿ヨリ当五日御達有之候ニ付、一往推引ノ上、則翌五ツ時ニ通シヲ以テ承合候処、諸山共大ニ心配、種々議論有之、尚其余風聞ノ次第、一点書ヲ以テ左ニ申上候、一輪門様ニ於テハ、右御達初発御聞取ノ節ハ大ニ御立腹、甚悪政ニ候へ共、何分　叡慮ヨリ出、　公儀ヨリ触達ノ儀ニ付難相請トハ難申出、何レ歎願致候外有之間敷思召ニ付、右梵鐘之儀ハ法器ニテ、其代リ火鉢・燭台悉皆差上可申旨、梵鐘鋳換之儀ハ御用捨ニ相成度旨、嘆願可然ト一山致評決候由、然ル処色々ニ風説モ追々相聞、中々右ニテハ御承引有之間敷旨ニ付、一ト先内伺試ル方ト評議有之、御老中阿部様へ右嘆願之趣内分試候処、火鉢・燭台類ハ其製方鉛不入（本ノマヽ）大砲・小砲難製、右ニテハ、嘆願ノ筋合難相立ト返答有之候由ニテ、尚又一山評議有之、昨今ノ趣ニテハ此方ヨリ末寺梵鐘取集言上可仕候間、末寺夫々へ直ニ手ヲ掛被下候儀ハ、御用捨被下度旨可申出段、評決有之由ニ御座候、右様可申出趣意ハ難相分候得共、先右之通治定ノ由相聞申

候、乍然此上又々如何様評議相変候哉モ難計候得共、昨今ノ模様右之通ニ御座候、依之末寺中ヘ右達書ハ、未タ無之由ニ御座候、

一芝増上寺儀ハ、御府内近在ニ千ケ寺余末寺有之由ニテ、先達テ右ノ内為首者令集会、議論区々ニ一定難致趣ニ候処、昨日為首者ニ、各存意之趣奉行所ヘ直願随意可致、段々被申渡候趣ニ御座候、何分此節ハ梵鐘取揚候而已ニハ無之、追々仏神ヘ附置有之候御扶持禄村御差上ノ上、僧分不律不如法ノ者ヲ引上、一統ニ相及シ候手段ニ付、寺別不律無之様相慎専務ノ旨、厳敷申渡有之由ニ御座候、

一右御達書、諸侯一体ニ有之候ニ付、加賀守殿ヨリ　公儀ヘ被伺出候、御領内寺院ノ梵鐘大砲・小砲ニ可鋳換様被仰出候儀ニ候哉、又ハ寺院ノ儀ハ、軍用御助勢ニモ不相成無益ノ者故、追々衰微令減少ノ思召ニ候哉、相伺度、軍用御備ノ儀ニ候ハヽ、領内各寺ノ梵鐘取上候ニハ及ヒ不申、若又衰微為致候儀ニ候ハヽ、当領ノ儀ハ先祖ヨリ仕来有之、其心得方申上度儀モ有之旨、申出候由ニ御座候、　公儀御返答ニハ何分　叡慮ヨリ被　仰出候段、御受不申候テハ不相済、只管御請可申旨、種々ニ申聞候ニ付、叡慮ノ儀難黙止由ニテ、領内ノ寺院梵鐘取払ハ、其侭御請ハ可仕旨、被申出候由ニ御座候、

一肥前国松平肥前守（鍋島斉正）殿并分家三皇之儀（本ノマヽ）ハ、寺院梵鐘取揚而已ナラス、悉皆相潰申度旨公議ヘ願出候由風聞有之候、

一前顕梵鐘鋳換ノ義、全御隠居ヨリ出、京都ヘ伺上、表向公儀御触達ニ相成候ニ付テハ、諸寺院不承知ニテ一往ニ難相治候義ハ、御隠居素ヨリ承知ニテ可有之、全ハ諸国令騒動、其虚ニ乗シテ相達度本意有之、尚又一旦右様御触有之候ハヽ、諸侯ノ内御隠居ヘ同意不同意ノ者モ相分リ可申、同意ノ諸侯ハ早速自分領ノ義触達、梵鐘速ニ引上ケ鋳潰シ可申、左候ヘハ少ンニテモ破仏ノ木口相開キ可申存意哉ト、専ラノ風評有之候儀御座候、

一紀伊殿（紀州和歌山藩主、徳川慶福）儀、西丸ヘ御直リ治定ノ評判専有之候ヘハ、近日御直リノ旨ニモ、又当年中ハ無之哉ト申者モ有之、然ル処右屋敷ニ種々ノ変事有之由、其廉ハ昨夏迄御幼君故、御広敷賄ニテ有之候所、右西丸ヘ御直リノ儀内沙汰有之候ニ付、昨夏以来表賄ニ相成有之処、毒殺仕

向ノ風聞モ有之哉ニテ、兼テ御用心ハ有之候処、昨冬頃重キ御方ヨリ御菓子御贈ニ相成候ニ付、右御菓子サギニ喰セ試ミ候処即死致候由、依テ夫々御手当有之、且又御屋形奥御座敷向ニテ、三ケ所三度出火有之候得共、大変ニ不相成、就テハ他ノ謀計ニ同意ノ者有之哉ニテ、夫々入牢糺中之趣、右之変事根本ハ去ル重キ御隠居、天下ヲ御自分一族ヲ以テ平呑（本ノマヽ）ノ巧ヨリ相起リ候事専ラ被存候事、追々相聞候、風評ニハ梵鐘取揚計ノ儀ニ無之、此表無滞諸寺院御請申出候ハヽ、引続尚又難問被仰渡、本院ノ扶持取上ケ悉皆破滅ノ存意ニテ、追々被仰出候ケ条、十三ケ条程趣意ハ不相分候得共、右之趣風聞有之儀ニ御座候、輪門様ニモ加賀程ノ御請申出候ハヽ、御聞上ニテ中々火鉢・燭台ニテハ不相済ニテ、一山評議大ニ変候趣ニ御座候、先便伺上置候御沙汰奉願上候、先ハ右申上度如斯御座候、恐々、

二日出貴札拝見仕候、然ハ御尋ノ条々則承リヨリ左ニ申上候、実ニ只氷薄如何何事モ致治定兼候得共、只今模様大略申上候、扨先頃城内段々混同ノ儀有之、密書相顕、忠勤ノ者ハ却テ不都合ニ相成、逆心ノ者ハ都合能相見候、一統相嘆居候事モ御座候、其内逆意顕レ候上ハ悪候モ本意難達哉、乍去善ノ者ハ少ク悪者ハ多ク、実ニ困窮仕候、

一天象ノ儀ハ何分彼御隠印蘭委敷、依之須彌ノ儀ハ御閉口ト奉存候、

一年忌俗例ニ被答候時ハ、魚鳥肉備テ可然候事、

一袈裟ノ事具ニ不分、

一惣テ仏説ニテ問答ノ事、

一諸山寺院取揚候事但不同、

一諸山嘆願筋、山林地面付ヲ増、依之人道教示計ノ事、

一神仏論具ニ不分、

右何レモ根本ハ全ク外ノ其趣意ハ兼テ申上候通、台場築方ノ節石塔ヲ海中ヘ入、人気試、近来鐘取揚、人気試、異国ヨリ出願ノ儀ニ付変易少モ許容、猶八丈ケ島ノ儀ニ付、何レ直ニ

今上ヘ伺可参、御手続浪華為探方異船渡来、追々関所ヲ破候共開通シ京師ヲ乱シ鐘等ニテ不言而

今上ヲ諸人ニ間悪而後本意ヲ達度企候密書

右書類先比御城内少シ乱レ候節、密書相顕レ、其次第有ル中国ノ僧、近来仏法無之旨表ニ致、俗形ニナリ、御隠

ノ臣トナリ、此人何思ヒテ欤切腹致シ、密書ヲ以他ヘ渡シ、且又外ヘ毒害ノ仕組有之候間、御城内取込既ニ戦ニ及可申処、先治リ居候、右ニ付鐘ノ儀ハ、厳重ニ被仰出モ有之間敷ト奉伺候、乍然天象之儀ハ格別ノ事故、立義ニ候ハヽ（本ノマヽ）御骨折可被成候、

一此節諸向ヘ、密方男女トモ諸国ヘ出候間、御用心可被成候、

四月七日

一御尋ノ次第御尤至極、様子ハ兄弟ノ約定モ致候事故、左ニ申上候、抑余宗ノ事ハ、何時ニテモノ儀有之候得共、真宗ノ儀ハ其業難押、然ル処鐘一条ニテ人機試候テ後遂問答、須弥ノ有無、当然ノ理道具ヲ以テ論ニ及ヒ、惣テ僧侶人道ノ用ニ致候テハ、政事ノ一助ニモ可相成、且無事ノ不理ヲ以一助ニモ可相成、只無益ノ儀理ヲ以、諸人ヲ迷シ候事、不正道ノ仕法ト申評議、今公辺穏密中ニハ候ヘ共、此上須弥ノ儀相立候得ハ、倍仏法繁栄不相立時ハ、御賢慮第一ノ事ト奉存候、

本文伝写ノ誤アルベシ、本ノ侭写取候、

三一五　鵜飼吉左衛門書翰

安政二

八月五日ノ尊書九月十五日到着云々、先達申上候築地輪番坊主ノ書状写、入

高覧候処、更ニ御怒モ不被為在、渠等カ当リ前トノ尊慮ノ由、乍恐御大量ノ御程、毎度奉感心候、御老中方ヘ御廻ニ相成候由云々御尤ノ御儀、ケ様ノ妖僧共ハ急度御処置有之様仕度候、扨右書附何方ヨリ手ニ入候哉之趣申上候様奉畏候、右私実弟興正寺門跡用人相勤居候処、右末寺ノ坊主ヨリ為見候間、入御覧候旨申持参仕候間、実弟相糺候処、持参仕候末寺ハ正恩寺ト申候由、右正恩寺ノ妹婿高槻、久寶寺ヨリ伝写仕候由之処、推考ニハ右久寶寺ノ兄明善寺ト申ハ、西本願寺役僧相勤居候由ニ付、多分明善寺ヨリ出候半ト申居候由、且先達テハ輪番ヨリ同列ヘ差越候手紙之趣申上候処、下間少進・島田左兵衛大尉・富島頼母、右三人ヘ差越候手紙ノ由ニ御座候、

一梵鐘一件ニ付テハ、本願寺家来ヨリ　殿下様・大夫中ヘ願出候処、大夫中ヨリ此ニ断リモ申兼候釣合ニ及候間、　殿下様ヘ申上候処、殿下様御承知被遊、其侭捨置候様ニトノ御意ノ由、其後程過テ本願寺参上ノ節、

御直ニ御説得被遊候処、奉畏候趣本願寺直ニ御請申上候テ、願書ハ御家来願下ケニ仕候欤ニ伝承仕候

一紫眞儀申上候処、尾州迄取下、同所ニテ大病ニ取付、

一先帰京仕候由、是非年内ニハ下向仕度旨申居候、

以下略ス

十月七日　　吉左衛門

（藤田東湖）誠之進様

再拝復